鴻臚館跡 4

— 平成4年度発掘調査概要報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第372集

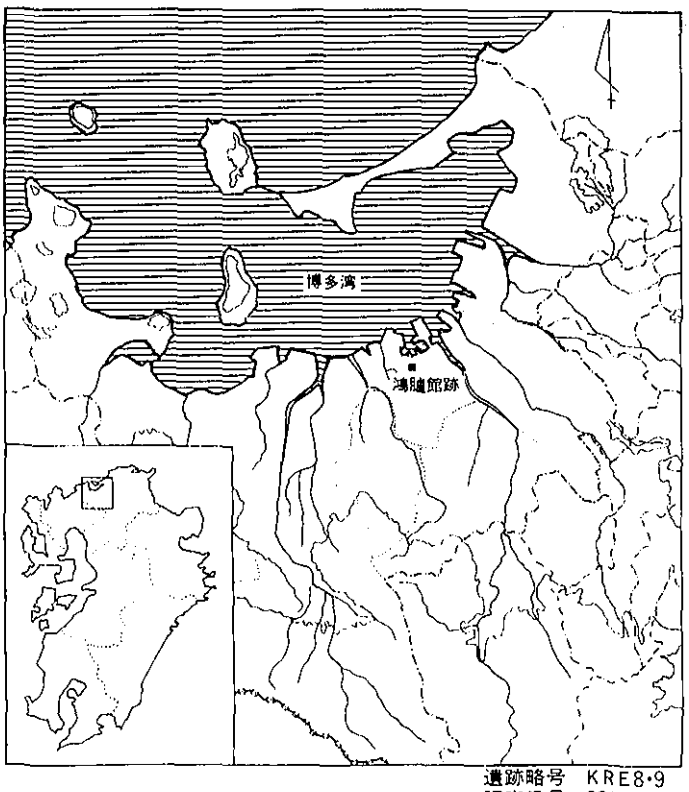
1994

福岡市教育委員会

鴻臚館跡 4

— 平成4年度発掘調査概要報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第372集

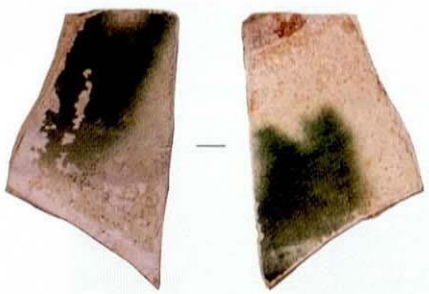


遺跡略号　KRE8・9
調査番号　9218・9236

平成6年

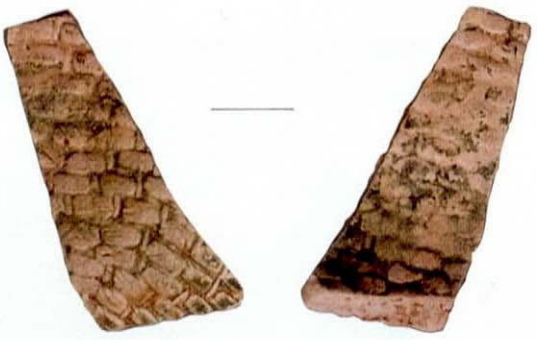
福岡市教育委員会

(1) 鴻臚館跡遠望(南から)



116

(2) 緑釉緑彩陶器

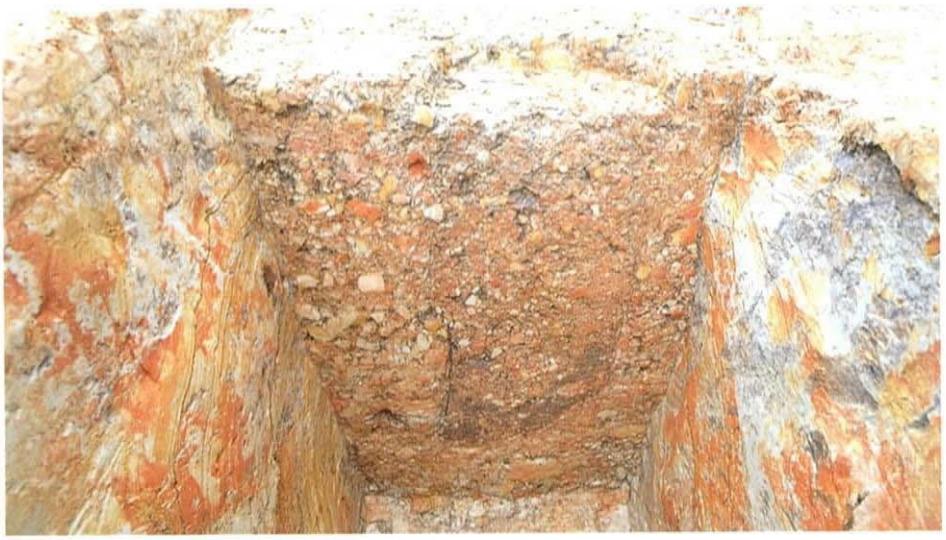


117

(3) 型作り緑釉陶器

(1) SB300(東から)

(2) SB300柱掘形・柱抜取り穴(西から)



(3) SA150柱掘形・柱抜取り穴(東から)

序

福岡市は、まちづくりの目標の一つに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。いまさら申し上げるまでもなく、本市は地理的関係から、先史時代より東アジアとの文化交流の門戸として発展を遂げてきました。鴻臚館は、この文化交流の代表的な遺跡として学術的に価値が高いとともに、本市の目標とする都市像の原点でもあります。このため、本市では、鴻臚館跡の発見以降、遺跡の全容解明に向けて計画的な発掘調査を行っています。

発掘調査計画に従い実施してまいりました野球場南側地区は、平成4年度で終了いたしました。これまでの調査により、同地区における建物施設の変遷をはじめ、多くの成果を得ることができました。この調査成果は、後日に調査報告書として刊行すると共に、現在進めております展示館の新築および遺跡の環境整備に反映させてまいります。

今回報告いたしますのは、平成4年度に実施いたしました発掘調査の概要です。今後、本書および調査資料が学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後なりましたが、発掘調査にあたり御指導と御援助をいただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の委員各位、文化庁の関係者各位、福岡県教育委員会をはじめ種々の御協力いただいた関係各位にたいし、深く感謝いたします。

平成6年1月13日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が、1992年度(平成４年度)に実施した鴻臚館跡発掘調査の概要報告書である。
2．遺構実測図に付した座標値は、平面直角座標系第Ⅱ座標系による座標値である。
3．遺構図には、遺構ごとに一連の遺構番号を付し、番号の前にSA(築地・塀)、SB(建物)、SD(溝・濠)、SE(井戸)、SF(通路)、SK(土坑)、SX(その他) などの分類記号を付した。
4．検出遺構および出土遺物については鴻臚館跡調査研究指導委員の御指導と御教示を得た。
5．本書に掲載した遺構、遺物の写真は、文化財整備課の力武卓治、瀧本正志の撮影による。
6．本書に掲載した遺構、遺物の実測図は、力武、田中壽夫、瀧本による。
7．本書の執筆は瀧本正志が行ない、英訳はLISE J.HODGKINSON(九州大学大学院生)が行った。
8．本書の付論として、金原正明(天理大学付属天理参考館)、金原正子(古環境研究所)、水野正好(奈良大学)、三辻利一(奈良教育大学)、三野　章(第一経済大学)の各氏から玉稿を頂戴した。
9．本書の作成に当たり、宮園登美枝、江崎木綿、寺村チカ子、堀　一恵、金石邦子、山口玲子、真鍋晶子、大石江里子の補助を受けた。
10．本書の編集は瀧本正志が担当した。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに ……1

1. 発掘調査計画 ……1

2. 遺跡整備計画 ……1

3. 調査の組織 ……2

Ⅱ　調査の記録 ……3

1. 調査の概要 ……3

2. 第8次調査 ……4

3. 第9次調査 ……8

4. 小　結 ……21

Ⅲ　付　論

1. 鴻臚館跡の土坑(便所遺構)における寄生虫卵・花粉・種実の同定分析
（金原正明，金原正子）……25

2. 鴻臚館跡出土瓦の蛍光X線分析（三辻利一）……39

3. 鴻臚館式軒丸瓦について（瀧本正志）……43

4. 輪宝・銅壷の出土について（三野章）……49

5. 福岡城跡発見の地鎮・鎮壇資料（水野正好）……53

挿 図 目 次

Fig. 1 鴻臚館跡発掘調査位置図（1／5,000）……VI
Fig. 2 第8次調査位置図（福岡城下絵図）…… 5
Fig. 3 第8次調査遺構配置図（1／400）…… 5
Fig. 4 石垣断面図（1／70）…… 6
Fig. 5 福岡城下之絵図…… 7
Fig. 6 石垣断面位置図（福岡城下絵図）…… 7
Fig. 7 ＳＢ300概略図……8
Fig. 8 第4～9次調査遺構配置図（1／300）……折り込み
Fig. 9 第9次調査遺構配置図（1／250）……9
Fig.10 ＳＡ150・301，ＳＢ300柱掘形実測図(1／70) …11
Fig.11 ＳＤ357出土遺物実測図（1／3）…… 13
Fig.12 ＳＫ351・352・356出土遺物実測図（1／3）……15
Fig.13 ＳＫ358出土遺物実測図（1／3）……16
Fig.14 ＳＫ368出土遺物実測図（1／3）……17
Fig.15 ＳＫ255出土遺物実測図（1／3，1／4）……19
Fig.16 ＳＫ255出土遺物実測図（1／2）……20
Fig.17 整地土層出土遺物実測図（1／3）……20
Fig.18 鴻臚館Ⅰ期遺構配置図……22
Fig.19 鴻臚館Ⅱ期遺構配置図……22
Fig.20 鴻臚館Ⅲ期遺構配置図……23
Fig.21 鴻臚館Ⅳ・Ⅴ期遺構配置図……23

表 目 次

tab. 1 平成4年度鴻臚館跡調査一覧…… 3
tab. 2 建物施設の方位……21

図 版 目 次

巻頭図版1 (1) 鴻臚館跡遠望(南から)
(2) 緑釉緑彩陶器
(3) 型作り緑釉陶器
巻頭図版2 (1) ＳＢ300(東から)
(2) ＳＢ300柱掘形・柱抜取り穴(西から)
(3) ＳＡ150柱掘形・柱抜取り穴(東から)
図 版1 (1) 調査地遠景(北から)
(2) 調査地調査前(西から)
(3) 調査区西半部全景(西から)
(4) 調査区東半部全景(北から)
(5) 福岡城石垣根石(北から)
(6) 福岡城石垣根石(東から)
図 版2 (1) 第Ⅰ調査区全景(東から)
(2) 第Ⅰ調査区全景(南から)
図 版3 (1) ＳＢ300全景(東から)
(2) ＳＢ300全景(南から)
(3) ＳＢ300柱掘形断面(西から)
(4) ＳＢ300柱掘形断面(東から)
(5) ＳＢ300柱穴礎板(東から)
(6) ＳＢ300柱穴礎板(南から)
図 版4 (1) ＳＡ301柱掘形・柱抜取り穴(西から)
(2) ＳＡ301柱掘形・柱抜取り穴(南から)
(3) ＳＡ301柱掘形・柱抜取り穴(西から)
(4) ＳＡ301柱掘形・柱抜取り穴(南から)
(5) ＳＡ150柱掘形・柱抜取り穴(東から)
図 版5 (1) 第Ⅱ調査区全景(南から)
(2) 第Ⅱ調査区東半部全景(西から)
図 版6 (1) 第Ⅱ調査区東半部全景(南から)
(2) ＳＤ357遺物出土状況(北から)
図 版7 (1) ＳＫ352遺物出土状況(南から)
(2) ＳＫ368遺物出土状況(東から)
図 版8 (1) ＳＫ360(東から)
(2) ＳＥ361(南から)
図 版9 出土遺物 1
図 版10 出土遺物 2
図 版11 出土遺物 3
図 版12 出土遺物 4

1．鴻臚館跡の土坑(便所遺構)における寄生虫卵・花粉・種実の同定分析

挿図目次

図 1　第５次調査遺構配置図（1／250）……26
図 2　ＳＫ57･69･70（南から）……26
図 3　ＳＫ57調査状況（南から）……26
図 4　ＳＫ56実測図（1／80）……27
図 5　ＳＫ61実測図（1／80）……27
図 6　ＳＫ57実測図（1／80）……27
図 7　ＳＫ69･70実測図（1／80）……27
図 8　寄生虫卵出現図……29
図 9　寄生虫卵組成図……29
図10　鴻臚館土坑における花粉組成図……33

表目次

表 1　寄生虫卵分析における有無……28
表 2　寄生虫卵分析結果……29
表 3　花粉分析結果（１）……32
表 4　花粉分析結果（２）……33
表 5　土坑ＳＫ57における種実同定結果……35
表 6　鴻臚館の土坑(便所遺構)の寄生虫卵･花粉･種実からみた食物…38

図版目次

図 版 1　(1)第５次調査全景(南から)
　　(2)土坑ＳＫ57(南から)
　　(3)土坑ＳＫ69(南から)
　　(4)土坑ＳＫ70(南から)
図 版 2　ＳＫ69(1･3･5)，ＳＫ70(2･4･6)出土寄生虫卵
図 版 3　ＳＫ57出土寄生虫卵
図 版 4　ＳＫ57出土寄生虫卵、花粉
図 版 5　ＳＫ57出土花粉
図 版 6　ＳＫ57出土種実
図 版 7　ＳＫ57出土種実
図 版 8　ＳＫ57出土種実
図 版 9　ＳＫ57出土種実
図 版10　ＳＫ57出土種実、糞便塊

2．鴻臚館跡出土瓦の蛍光Ｘ線分析

挿図目次

Fig. 1　鴻臚館跡出土瓦Ｒｂ-Ｓｒ分布図……40
Fig. 2　鴻臚館跡出土瓦Ｋ-Ｃａ分布図……40
Fig. 3　大宰府政庁跡出土瓦Ｒｂ-Ｓｒ分布図……40
Fig. 4　大宰府政庁跡出土瓦Ｋ-Ｃａ分布図……40
Fig. 5　塞ノ尾窯跡出土瓦Ｒｂ-Ｓｒ分布図……41
Fig. 6　塞ノ尾窯跡出土瓦Ｋ-Ｃａ分布図……41
Fig. 7　浜口廃寺出土瓦Ｒｂ-Ｓｒ分布図……41
Fig. 8　浜口廃寺出土瓦Ｋ-Ｃａ分布図……41
Fig. 9　塞ノ尾窯跡北出土瓦Ｒｂ-Ｓｒ分布図……41
Fig. 10　塞ノ尾窯跡北出土瓦Ｋ-Ｃａ分布図……41
Fig. 11　各遺跡出土瓦のＮａ量比較……42

表目次

tab. 1　鴻臚館跡出土瓦分析表……42

3．鴻臚館式軒丸瓦について

挿図目次

Fig. 1　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ａ類実測図（1／4）……44
Fig. 2　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ａ類……44
Fig. 3　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ｂ類実測図（1／4）……44
Fig. 4　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ｂ類……44
Fig. 5　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ｃ類実測図（1／4）……45
Fig. 6　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ｃ類……45
Fig. 7　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ｄ類実測図（1／4）……45
Fig. 8　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ｄ類……45
Fig. 9　軒丸瓦計測部位図……46
Fig. 10　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ａ～Ｄ類実測図(1／2)…47

表目次

tab. 1　軒丸瓦瓦当計測表……46
tab. 2　調査次数別出土点数一覧……46

4．輪宝・銅壺の出土について

挿図目次

Fig. 1　輪宝、銅壺出土地点図（1／4,000）……50
Fig. 2　輪宝、銅壺出土状況図……51
Fig. 3　輪宝、銅壺出土地点現況……51
Fig. 4　輪宝実測図（1／4）……52
Fig. 5　輪宝……52
Fig. 6　銅壺実測図（1／4）……52
Fig. 7　銅壺……52

5．福岡城跡発見の地鎮・鎮壇資料

挿図目次

Fig. 1　福岡城跡内出土輪宝……54
Fig. 2　福岡城跡内出土銅壺……54

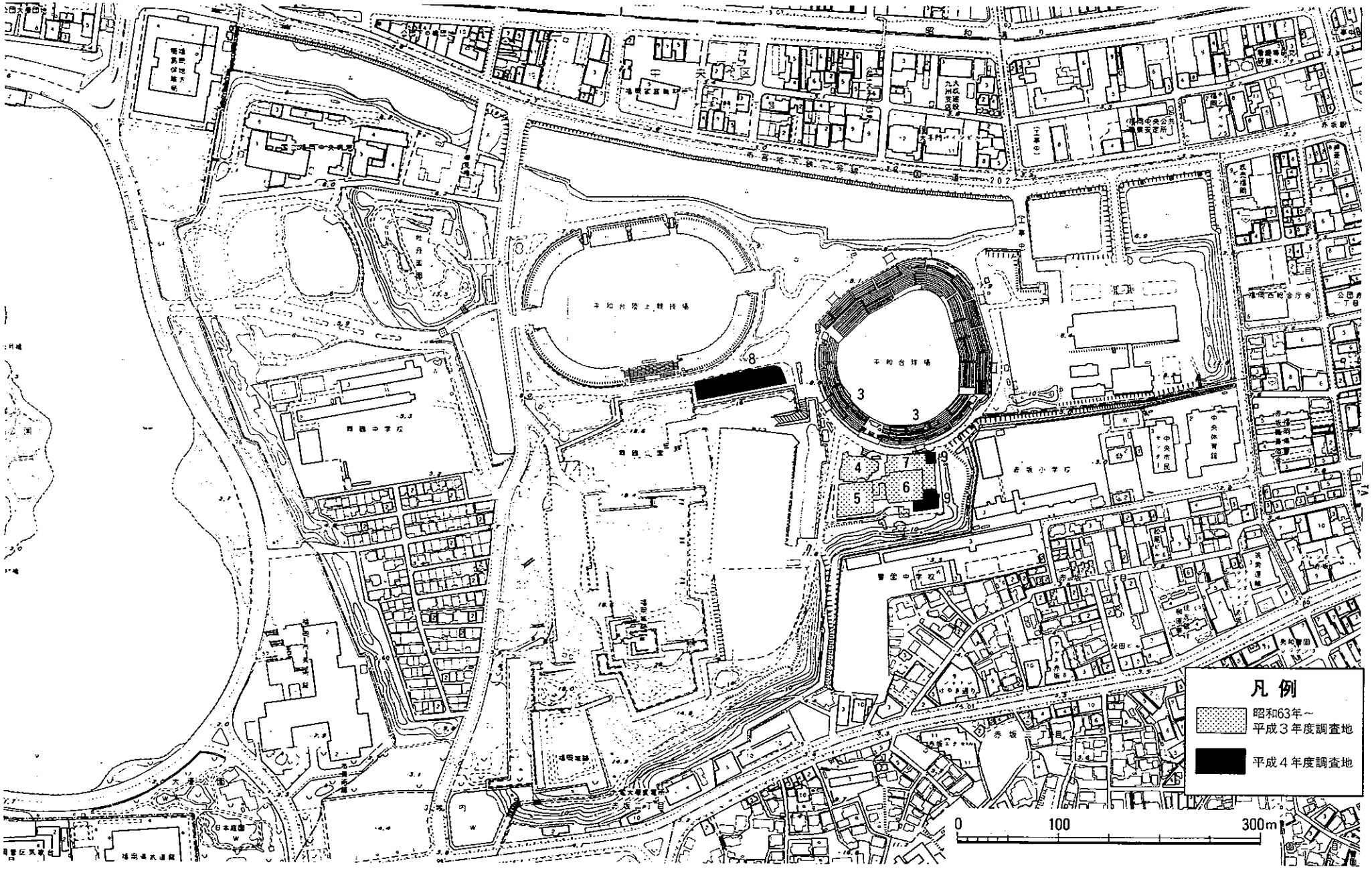


Fig. 1　鴻臚館跡発掘調査位置図（１／5,000）

Ⅰ はじめに

1．発掘調査計画

鴻臚館跡の調査については、1987年(昭和62年)に平和台野球場改修工事に伴う緊急調査が実施され、以降、野球場南側一帯において発掘調査が継続して行われてきた。これまで実施してきた野球場南側一帯における調査は、遺跡の存在を確認する点にあった当初の目的が4年度で達する状態であった。次の調査の段階は、平和台野球場下における調査の早期着手が困難な現状を踏まえた上で、遺跡の立地する高台の地における遺跡の範囲及び構造を明らかにすることである。しかしながら、長期的調査計画が未策定であったために、平成4年度の鴻臚館跡調査研究指導委員会において、早急に計画を策定することの指導が有り、平成5年度の同委員会において提出することとなった。

平成4年度の調査は、平和台野球場の西方100mに位置する地区(第8次調査)、および前年度調査区に接する地区(第9次調査)の二地点である。第8次調査は、これまでの鴻臚館跡の調査によって使用できなくなったテニス等の球技施設の当面的措置として、旧弓道場にテニス場を設置するに当たり、事前に遺構の確認を行うものである。第9次調査は、第7次調査において地下埋設物などの関係から調査ができなかった門跡のSB300および掘立柱建物SB321の規模確認、さらに第7次調査区の南側部分における遺構確認である。

2．遺跡整備計画

1988年から調査を実施してきた平和台野球場南側一帯の約8,000㎡については、平成4年度で遺跡の確認調査が終了することとなった。これまでの調査では、初めて鴻臚館跡の所在を遺構の面から明らかにするとともに、多種多量の出土遺物をとおして、古代から中国、朝鮮半島との深い関係や、遠くイスラム地域とも間接的に結び付いていたことが判明した。特に、奈良時代初頭から平安時代にかけての建物施設の変遷を明らかにすることができたのは多いなる成果であった。

調査成果から、鴻臚館の施設が平和台野球場下に広がっていることは明白なことから、早急に野球場下の調査が望まれたが、代替球場等の問題などから早期の調査着手は困難であった。このため、本格的な遺跡整備計画は野球場下を含む一帯において鴻臚館跡の全容が明らかになった後に策定することとし、これまでの調査範囲については仮整備的に行うことが平成4年度鴻臚館跡調査研究指導委員会で審議された。

平成4年度同委員会においては、下記のように既存展示館内の展示方法と館外の遺跡整備についていくつかの指導を受けた。

展示館は、1989年のアジア太平洋博覧会開催時、礎石建物跡に覆屋を設置したものであった。しかしながら、展示館内で公開していた遺構が、建物跡を理解するのに不十分であったことから、遺構と存在していた建物との関係、すなわち上下の関係を示す必要性が指摘された。さらに、軽量素材を用いて建物を復元し、吊下方式が提案された。展示館の規模から、復元する建物の棟筋部分については復元しないこととなった。また、建物の復元計画を進めるに当たっては、小委員会を設置することが決められた。

館外については、発見された奈良時代～平安時代の遺構の変遷、時期がわかりやすい方法を用いること、近い将来に本格的整備をする時に、今回の整備が障害とならないような仮整備的位置付けに立って計画を策定することが審議された。さらに同委員会では、文化庁から仮整備の手法としては、バラス敷き、芝張り、遺構の平面表示、建物基壇や柱の立ち上げ等である旨の具体的手法が示された。

3．調査の組織

1）鴻臚館跡調査研究指導委員会（平成4～5年度）

	委員名	専門		委員名	専門
委員長	平野邦雄	国史学	副委員長	横山浩一	考古学
	石松好雄	考古学		小田富士雄	考古学
	狩野　久	国史学		川添昭二	国史学
	笹山晴生	国史学		澤村　仁	建築学
	杉本正美	造園学		鈴木嘉吉	建築学
	坪井清足	考古学		中村　一	造園学
	西谷　正	考古学		八木　充	国史学
	渡辺定夫	都市工学		渡辺正気	考古学

2）福岡市教育委員会

平成4年度(1992年度)

教育長	井口雄哉
教育次長	井上剛紀
文化財部長	花田兎一
文化財整備課長	後藤　直
文化財整備課主査	山崎純男
文化財整備課文化財主事	瀧本正志
文化財整備課	市毛智子

平成5年度(1993年度)

教育長	尾花　剛
教育次長	井上剛紀
文化財部長	後藤　直
文化財整備課長	古西憲輔
文化財整備課主査	田中壽夫
文化財整備課文化財主事	瀧本正志
文化財整備課	市毛智子

Ⅱ　調 査 の 記 録

1．調査の概要

1）第8次調査

調査地は、平和台野球場の西100m、鴻臚館の位置する高台地の北辺中央部に位置する。福岡城の位置では、三の廓、革櫓の北方に位置する。江戸時代の調査地のありかたは、現代に遺る城絵図および文献史料からも空間地もしくは通路が想定される地域である。戦前における調査地には、陸軍の駐屯地施設の炊飯場および倉庫が位置していたことが当時の記録を基にして作られた駐屯地模型から知ることができる。

調査に当たり、指導委員会では石垣の基礎部分についても明らかにすることが求められた。

計画では、調査地に盛土を行い、テニスコートおよび遊技施設を作る。調査は排土置場の関係から、調査区を西半部と東半部とに分けて実施した。

調査の結果、検出した遺構は、近代の建物跡、排水路であり、その大半が旧軍施設である。薄い地表土直下で頁岩の地山が現われ、近世以降における削平の大きさを示していた。調査区の東辺部において、風化頁岩を整地土としている地業跡を確認したが、時代を明らかにするには至らなかった。また、今次調査では鴻臚館に直接的関係する遺構、遺物は認められなかった。

2）第9次調査

第9次調査の主眼点は、第7次調査において地下構築物（旧軍施設）等の関係から調査ができずに全容が不明であった門跡のSB300、掘立柱建物SB321の規模確認と、前年度調査区の南側における遺構確認である。調査地の範囲には、第5次調査で確認した便所遺構が、第7次調査で確認した東門と長方形に画す塀の中心線を対象軸とした場合に対象形に位置する地点も含まれている。

調査の結果、門跡のSB300および掘立柱建物SB321の規模を明らかにした。また、鴻臚館施設設置に伴う造成事業と旧地形も確認することができた。さらに、SB300の基礎構造や、SB300と連接して一連の施設をなす塀SA301、SA150において柱抜取り穴を確認するとともに、柱掘形の開削方法が明らかとなった。このため鴻臚館跡Ⅲで報告した施設の変遷には、一部の訂正が必要となった。この点については、後述する。

調査番号	遺跡略号	次数	調査面積	調査期間	備　　考
9218	KRE	8	1,670㎡	920615～921030	福岡城三の丸
9236	KRE	9	430㎡	920910～930331	〃

tab.1　平成4年度鴻臚館跡調査一覧

2．第8次調査

1）調査地の位置

調査地は、平和台野球場の西100m、鴻臚館の位置する高台地の北辺中央部に位置する。福岡城の位置では、三の廓、革櫓の北方に位置する。調査地の江戸時代における占地状況は、現代に残る城絵図および文献史料から、空間地もしくは通路が推定される。

現況で標高8.5mを測る平坦地の調査地は、明治時代から第2次大戦終了の間には陸軍駐屯地施設の炊飯場および倉庫が設置され、江戸時代には調査地の南と西の辺に高さ8～12mを測る二ノ丸石垣が築かれている点からも、大規模な削平を受けていることが十分に推定された。

2）遺　構

遺構は、地表から0.8m下の頁岩の地山面（標高7.7m）で検出した。地山と地表との間は真砂土で占められている。検出した遺構は、建物4棟、溝10条、井戸1基、水溜等の施設と造成地業である。

建物は全て東西棟の礎石建物で、SB291は「日」の字状に溝基礎を掘って栗石を入れ、SB292～294は握り拳大の根固石の上にA3サイズ大の礎石を置いている。建物規模はSB291は梁行5.4m・桁行7.2m、SB292は梁行5.4m・桁行18m、SB293は梁行3.6m・桁行21.6m、SB294は梁行3.6m・桁行4m以上。溝は素掘溝(SD295・296)と石組溝とに分かれ、石組溝には石材が花崗岩や砂岩の切り石を使用する溝と自然石を使用する溝(SD281・282)とがある。SD281・282は石垣の裾に沿ってつくられ、幅0.5mの溝底には半截した土管を敷き並べている。SD283・284・288・289はSD282を壊して築いた溝で、四角垂形の花崗岩を3段に積みあげた上に長さ1.4mの花崗岩の角柱で蓋をしている。SD285・287は長さ1.2m前後の砂岩の石柱を使用している。井戸は直径0.9mの円形に四角垂形の花崗岩を積みあげ、水溜は4か所にコンクリートで築造している。検出した建物等の施設は、配置位置および規模が当時の施設を復元した模型に合致することから、旧軍の施設であると断定される。石組溝のSD281・282は、近世に築かれた後に近代まで使用されていた可能性がある。

調査区東部で整地地業跡が認められた。北から東の範囲へ向かって緩やかに傾斜する地山面上を汚れていない頁岩風化土が覆う。この地山面の傾斜は、第3次調査で検出した谷部と一連のものであることが、方向性などから指摘される。整地土中からは遺物は出土していない。

委員会で指摘事項となっていた福岡城石垣の基礎部分における石積み技法の解明については、Fig.6に示す位置に3か所のトレンチを設定した。その結果、石垣は、Fig.4に示すように面幅が0.5～0.8mを呈する花崗岩等の粗割石を下部で72～77°、上部で81°の勾配を持たせて築いていることが判明するとともに、石垣基礎部の根石の据付け方法については地山頁岩の岩盤を平坦にした後に粗割石を置くだけで他の技法は認められなかった。根石の控え等は不明である。

第8次調査では鴻臚館に直接関係する遺構・遺物が検出されなかった。本調査地の検出面高が標高7.7m、平和台野球場内の第3次調査での遺構検出面の標高は平均8m、野球場南側に位置する第4～7次調査での遺構検出面の標高は平均9mを測る。従って、標高のほぼ同じ第3次調査でも掘削の深い遺構が残っていることから、第8次調査地においては大規模な遺構は存在しなかった可能性が高い。

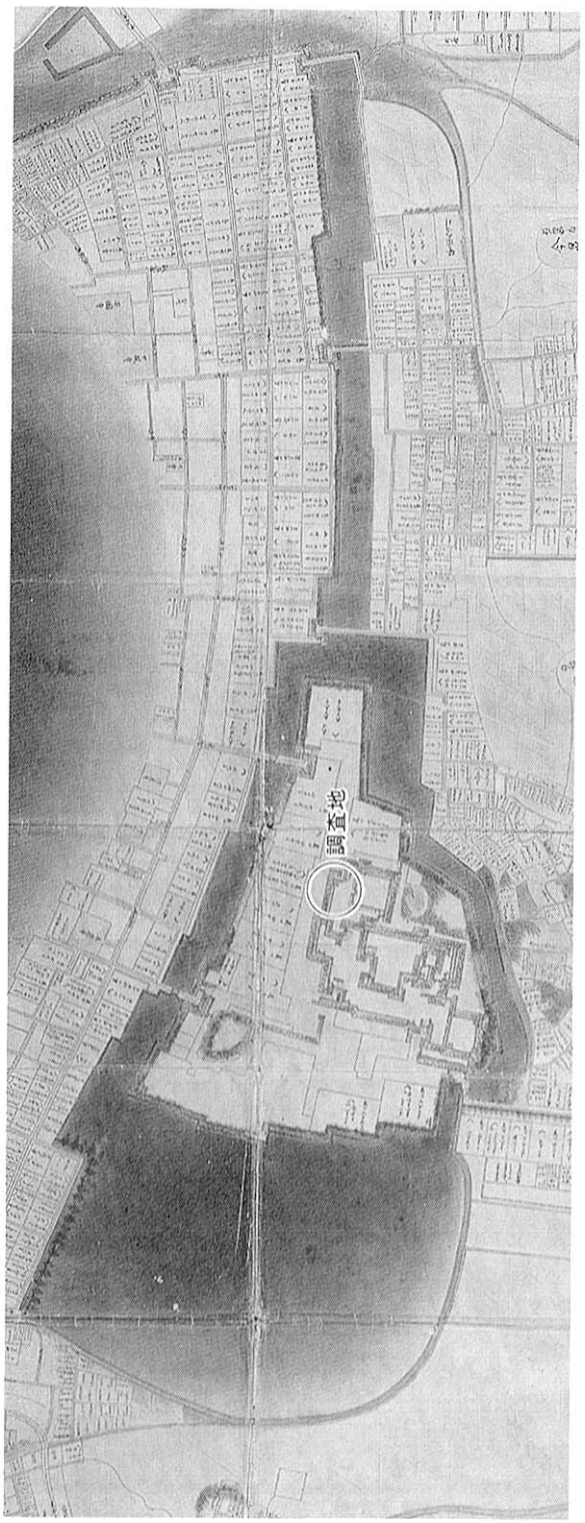


Fig. 2　第 8 次調査位置図（福岡城下絵図）

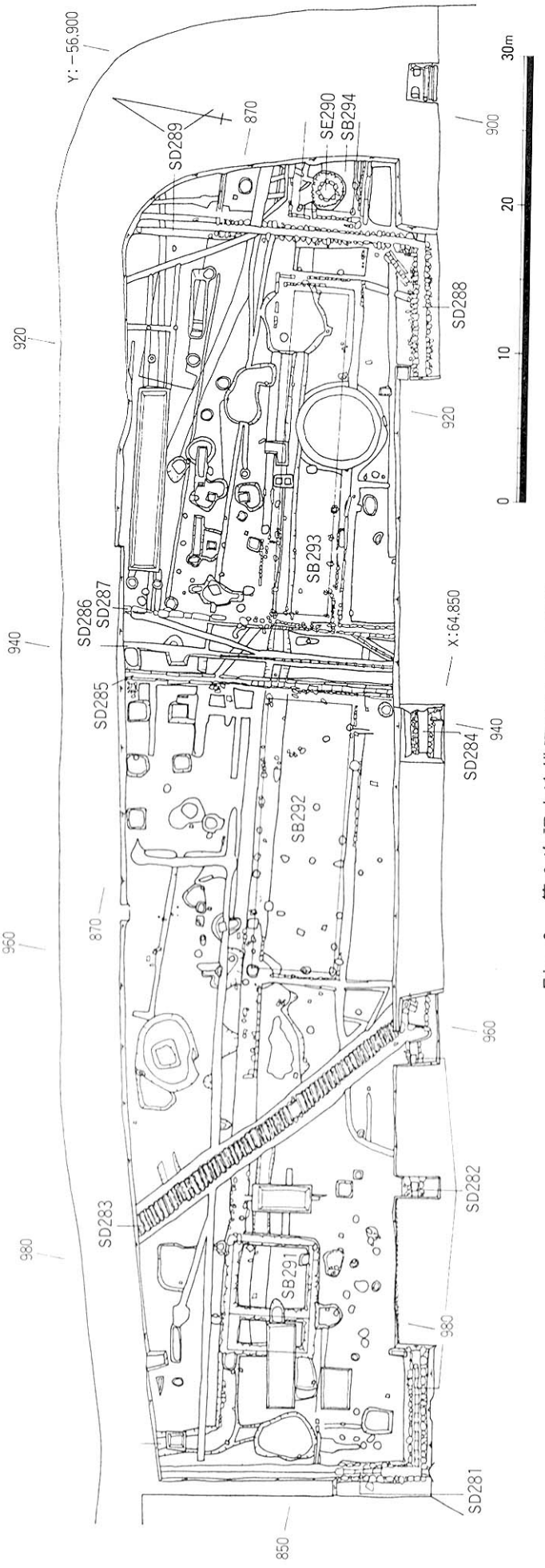


Fig. 3　第 8 次調査遺構配置図（1／400）

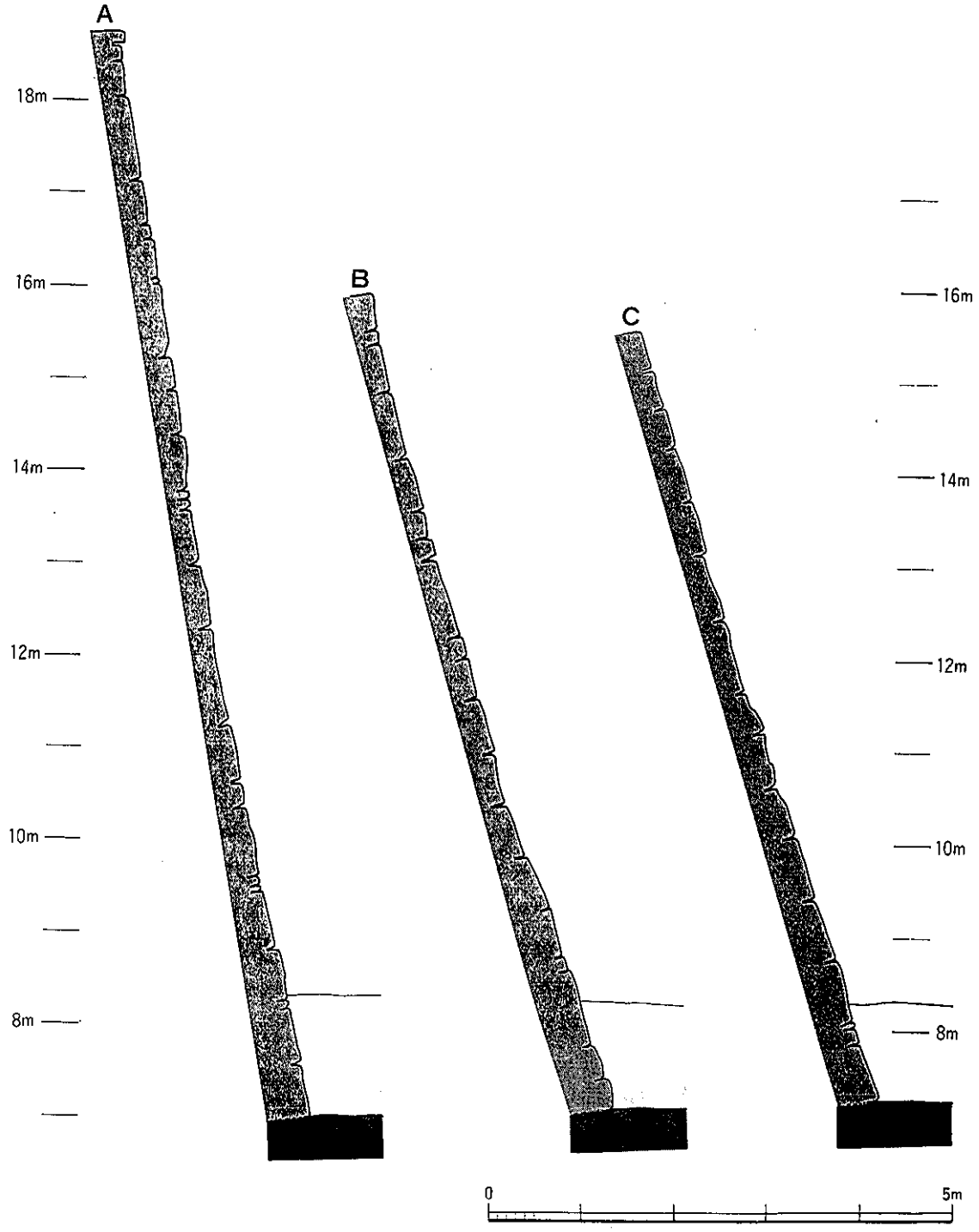


Fig.4　石垣断面図（1／70）

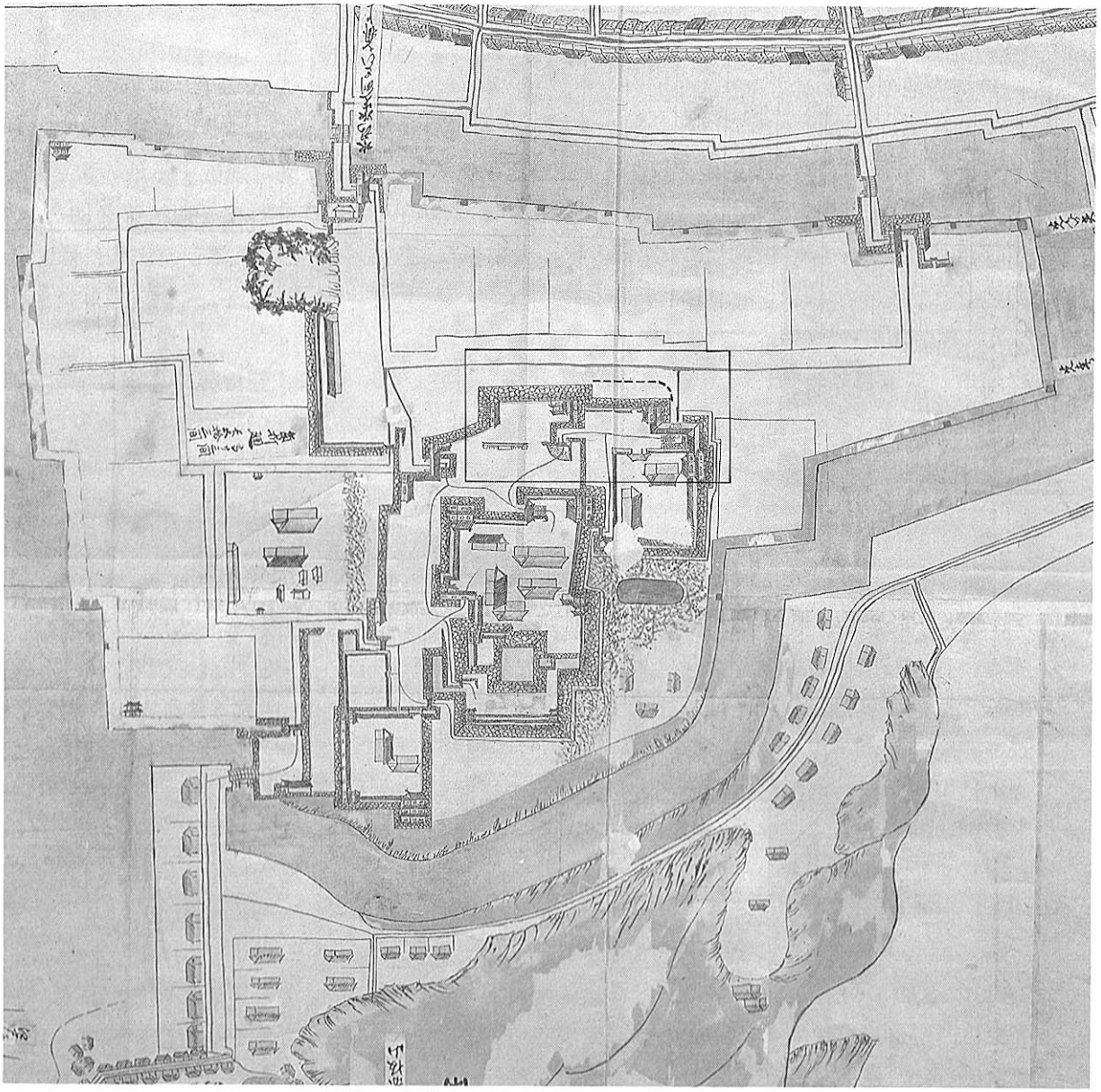


Fig. 5　福岡城下之絵図（九州大学九州文化史研究施設蔵）

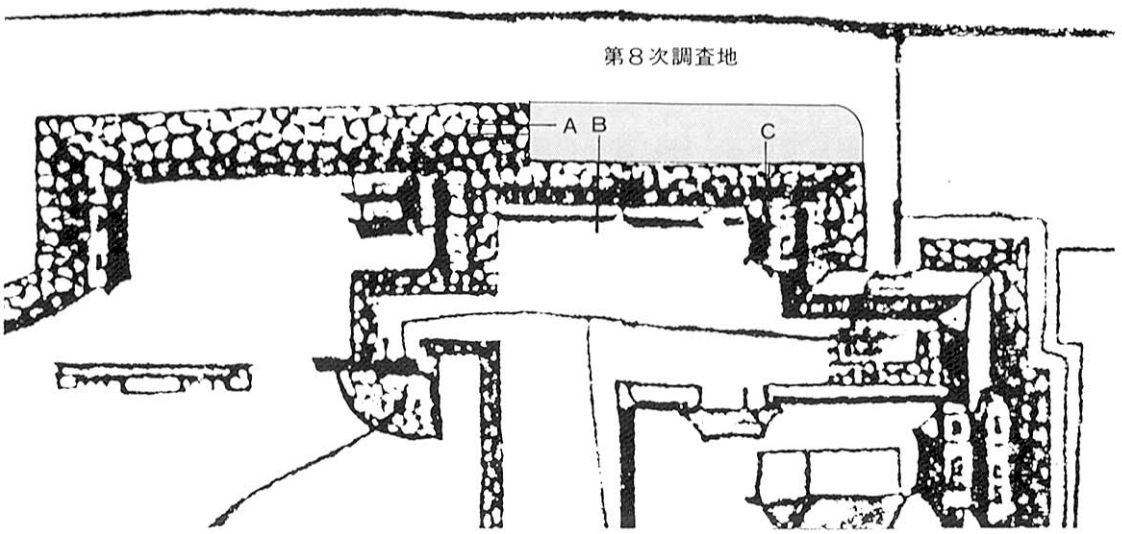


Fig. 6　石垣断面位置図（福岡城下絵図）

3．第9次調査

1)調査地の位置

第9次調査は2地点からなり、第7次調査で存在を確認したものの立木により全容が調査できなかった門SB300の周辺地である第1調査区と第6・7次調査地に南接する地の第2調査区である。また、関連調査としてSB300に連接する塀SA301の調査を行なった。第2調査地の北半部は標高8.2mを測るが、南半部は近代に大規模な削平を受けて北半部との比高差は0.5mある。

2）遺　構

検出した遺構は、門、塀、掘立柱建物、土壙、井戸、溝、小穴、整地跡で、奈良～平安時代、中世と江戸時代とに大別されるが、一部の遺構は第7次調査で存在が確認されたものと重複する。

奈良～平安時代の遺構

門

SB300　調査区北辺部に位置する、梁行2間、桁行3間の掘立柱建物の八脚門である。塀SA301・302が南と北に取り付く。抜取り穴が残り、柱は全て抜き取られている。基壇、階段、雨落ち溝等は残存していない。柱間は、梁間2.66m、中央間3.55m、脇間2.07mを測る。柱径は柱抜取り穴に残る痕跡から40cm前後を知る。側柱の柱掘形は脇間の2本の柱を1組とし、幅1.2m・長さ3.6～3.8m・深さ0.8m以上の長方形の穴を掘り、その後に底面に深さ60cmの2基の柱穴を個別に掘る。棟桁筋の柱掘形は門に取付く塀の柱掘形と一体化して掘り、その後に底面に柱穴を個別に掘っている。すなわち溝状の掘形部分に限れば、南側2本の柱掘形はSA301の柱掘形と同じくし、北側2本の柱掘形はSA302の柱掘形と同じくする。建物棟桁方向は真北から東へ約2°偏する。

塀

SA301　SA15・150・302・303とともに東西74.07m、南北56.26mの矩形に塀を形成し、東辺中央に門SB300を配置する施設の東辺南半部である。SB300に連接する掘立柱の塀で、10間分を検出した。柱間は2.42m～2.46mを測る。柱は柱抜取り穴の状況から塀の内側に倒して全て抜き取っている。しかし、塀の隅柱だけは塀の外側から抜き取る。柱掘形は、Fig.11に示すようにSB300の棟桁筋の柱穴も一体化し、溝状に幅1.2m・深さ0.9m以上を掘り下げた後、底面に方90cm・深さ60cm前後の柱穴を約1.5m間隔で新たに掘っている。柱は数cmの層厚で柱の周りを突き固めて据付ける。塀の方向は、真北から東へ約2°偏する。

SA302　SB300の北側に連接する掘立柱の塀で、一部を検出した。規模、柱掘形はSA301と同様。塀は北側の調査区の外へ続く。

溝

SD357　調査区南東部に位置する南北溝で、南側は調査区外に続く。幅1.5m、深さ0.8m、長さ7m分を検出した。

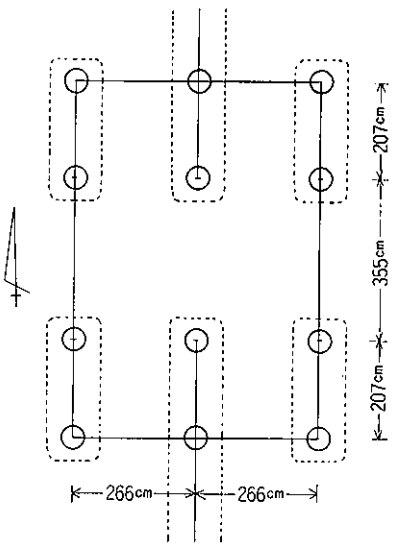


Fig.7　SB300概略図

X : 64,800

Y : −56,850

Y : −56,800

X : 64,750

SB31
SB32
SK29
SK23
SK38
SK61
SK75
SK80
SD312
SB50
SK56
SK82
SA311
SK69
SK70
SK59
SK60
SK57
SB320
SB321
SK255
SA302
SB300
SB322
SF272
SK208
SK273
SA301
SK211
SB323
SK210
SK209
SK213
SA150
SK160
SK244
SA316
SK35
SK353
SK352
SK354
SK355
SD357
SK358

0 10 20m

Fig. 8　第４～９次調査遺構配置図（1／300）

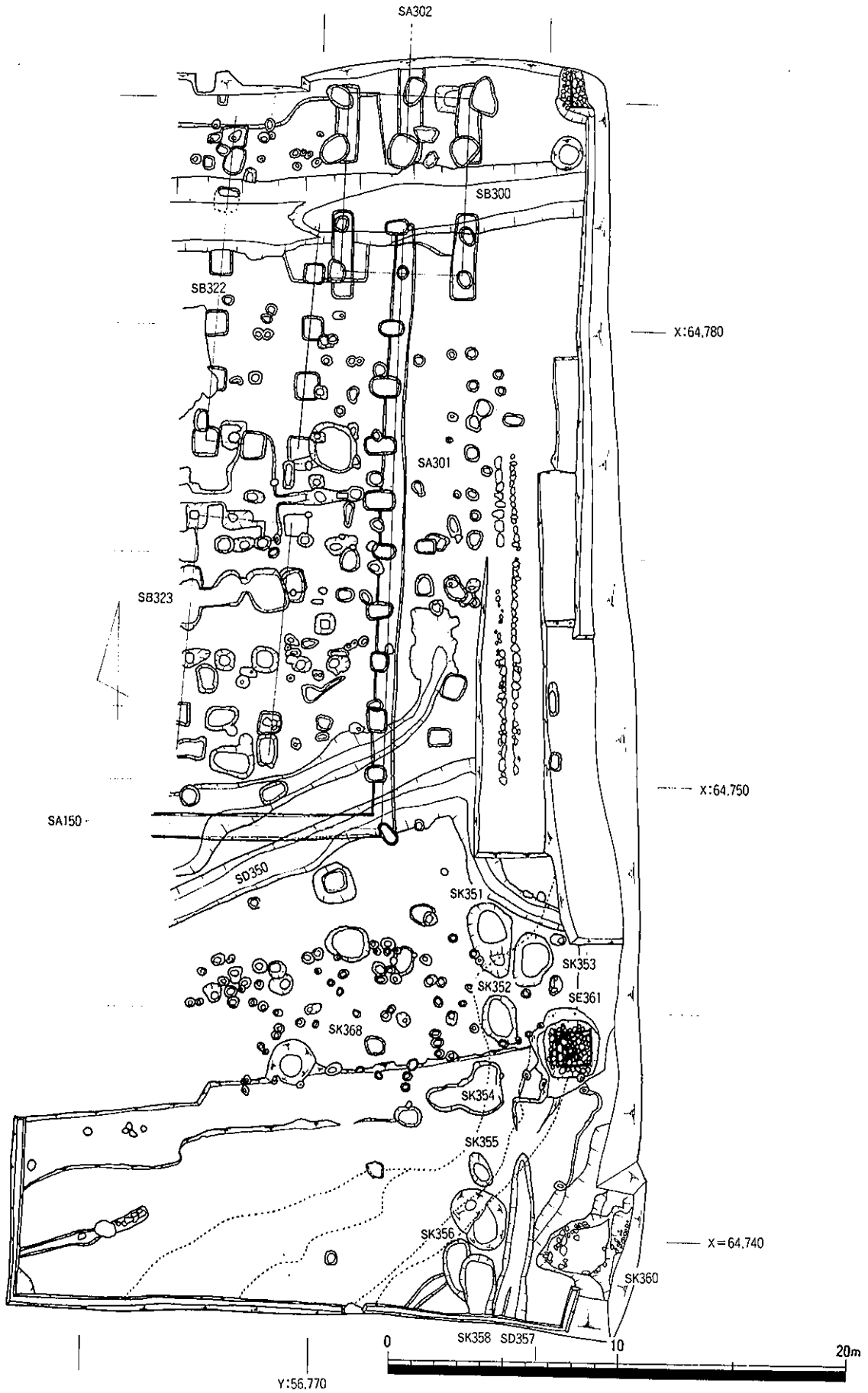


Fig.9　第9次調査遺構配置図（1／250）

溝底は南に傾斜し、北側で先細り底面も立ち上がる。溝の断面形は半円形を呈する。溝中からは陶磁器、瓦等が多量に出土した。SK358に壊されている。

土　壙

SK351　調査地の北東部、SA301の南隅から南西へ５ｍに位置する。東西２ｍ、南北3.3m、深さ0.5mを測る。南北に長い楕円形の平面形を呈する。壁は弧を描きながら立ち上がり南辺には狭いステージを持つ。土壙内からは、多数の陶磁器、瓦片が出土した。SK352・354・355・357とともに南北に一直線状に並んで位置する。本来は、これらの土壙は一つの溝を形成していた可能性が高く、向きは真北で東に2度偏する。

SK352　調査地の北東部、SK351の南に位置し、東西２ｍ、南北3.3m、深さ0.5mを測る。南北にやや長い楕円形の平面形を呈する。壁は弧を描きながら立ち上がる。土壙内からは多数の陶磁器、瓦片が出土した。

SK353　調査地の北東部、SK351の東に位置し、東西1.8m、南北2.4m、深さ0.6mを測る。隅丸方形の平面形を呈する。底は弧を描きながら立ち上がる。土壙内からは多数の陶磁器、瓦片が出土した。

SK354　調査地の東辺中央部、SK352の南に位置する。東西3m、南北2.3m、深さ0.4mを測る。南北に長い隅丸方形の平面形を呈する。壁は弧を描きながら立ち上がる。土壙内からは、多数の陶磁器、瓦片が出土した。

SK355　調査地の東辺中央部、SK354の南に位置する。東西0.9m、南北1.6m、深さ0.3mを測る。南北に長い楕円形の平面形を呈する。直線状に位置する他の土壙より小さい。壁は弧を描きながら立ち上がる。土壙内からは、多数の陶磁器、瓦片が出土した。

SK356　調査地の南北中央部、SK355の南に位置する。東西1.2m、南北2.5m、深さ0.2mを測る。南北に長い楕円形の平面形を呈する。壁は弧を描きながら立ち上がる。土壙内からは、多数の陶磁器、瓦片が出土した。

SK358　調査地の北辺部、SK356の東に位置し、SD357を壊して掘られている。東西1.6m、南北2.5m、深さ0.7mを測る。南北に長い楕円形の平面形を呈する。壁は弧を描きながら立ち上がり南辺には狭いステージを持つ。土壙内からは、多数の陶磁器、瓦片が出土した。

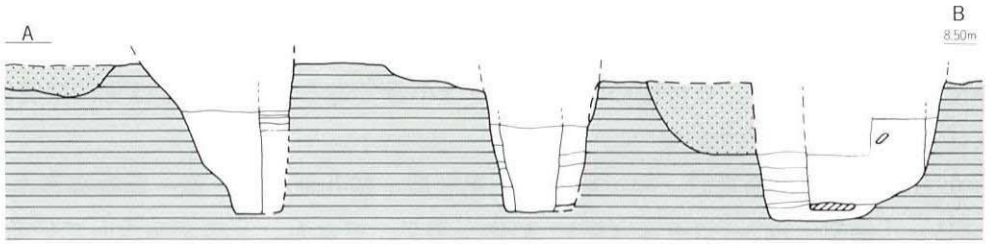
SK368　調査地の中央部、SK352から西へ７ｍに位置する。方0.8mを測り、隅丸方形の平面形を呈す。土壙内からは、完形品の越州窯青磁輪花椀が正置した状態で中央部から出土した。

造成跡　直接的な遺構ではないが、施設建設に先立つて行なった敷地の造成跡を調査地南東部およびSB300東側において確認した。頁岩風化土の地山の直上には旧表土である層厚数cmの黒色土が有る。この旧地表ラインは調査地の中央部を南西から北東に走り、北方向に弧を描くように折れ曲がり、SB300の東側をとおる。

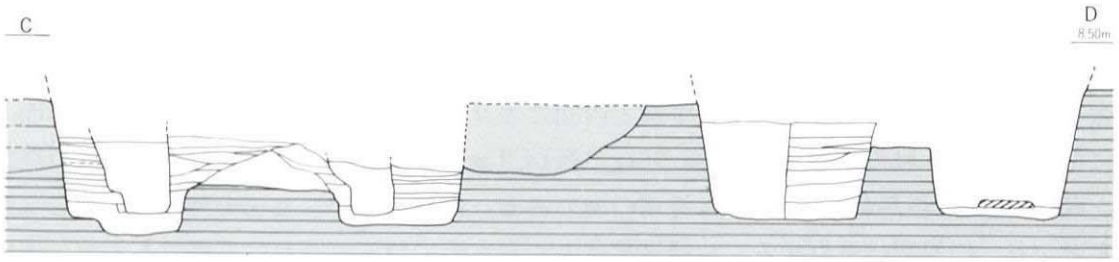
中世の遺構

土　壙

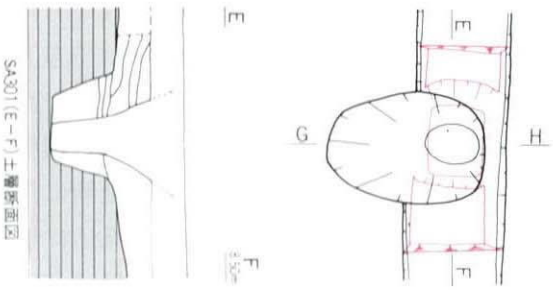
SK360　調査地の南東隅、SD357の東に位置する。遺構の一部を検出した。底の中心は東にあるのか、東下がりの様相を呈し、大半は調査区の東外に拡がる。土壙内には子供の頭ほどの石や小塊が多くある。土壙内からは、染付け等が出土している。



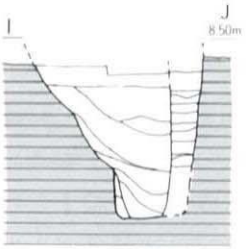
SB300(A－B)土層断面図



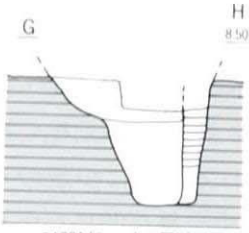
SB300(C－D)土層断面図



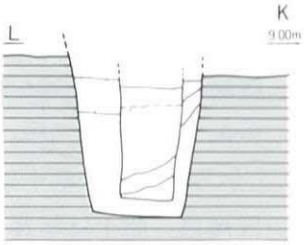
SA301(E－F)土層断面図



SA301(I－J)土層断面図



SA301(G－H)土層断面図



SA150(K－L)土層断面図

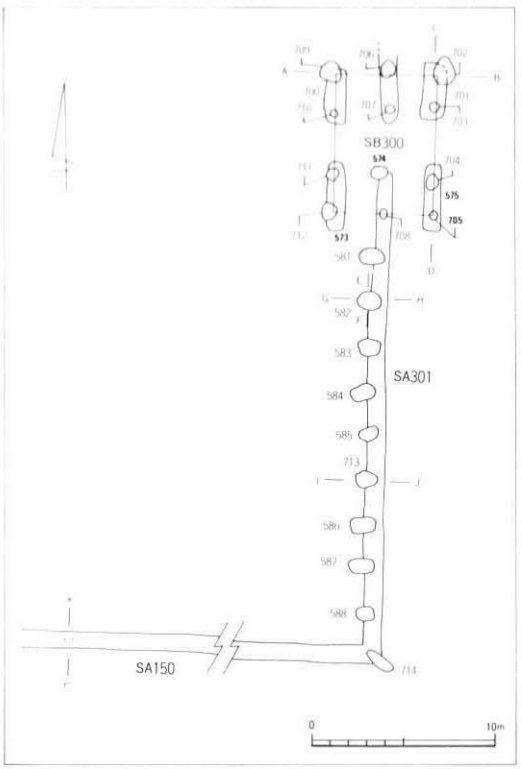


Fig.10　SA150・301，SB300柱掘形実測図（1／70）

3）遺　物

遺物は古墳時代～近代までの物が出土した。大半は鴻臚館と福岡城に関連するもので、一部に14～15世紀の物が含まれ、その他の時期の遺物は小量である。本報告では主に鴻臚館関係の遺物を取り上げる。

SD357からは、越州窯系青磁（椀・輪花椀・褐彩皿・輪花皿・蓋・壷・黄釉褐彩水注）、白磁（椀・皿）、土師器（椀）、須恵器（坏）、動物土製品、軒丸瓦、瓦等が出土している。

26・27青磁褐彩の皿である。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は先尖気味に丸く仕上げる。底部は平底であるが、中央部を凹ませる。見込には厚さ４～６㎜を測り、白色～赤褐色の目土が7か所に残ることから、未使用品であろう。胎土は不純物を多く含み、灰色を呈する。体部外面の上半部と内面にオリーブ色の釉を施し、口縁部の内外面３か所に褐釉を施す。釉の剥離が激しい。26は口径14.4cm、底径6.4cm、器高4.1cm。27は口径14.6cm、底径6.4cm、器高4cm。17・18は青磁の椀である。体部は僅かに丸味を持って外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめている。高台は平底であるが、周縁を高くして畳付とする。粘土円盤もしくは粘土紐を底部に貼り付けた後、ナデ調整を施して高台を形成する。胎土には不純物が多く含まれる。口縁部内外面には白色土の化粧がけを行ない、その後にややくすんだオリーブ色の釉を体部外面の上半部と内面に施す。17は口径15.2cm、高台径6.5cm、器高5.1cm。18は口径14.8cm、高台径6.8cm、器高5.3cm。青磁の椀椀には高台に糸切り痕跡が残る例も有る。16･19･20･28は青磁の輪花椀である。体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸くおさめ、５か所に刻みをもつ。高台は平底であるが、周縁を高くして畳付とする。粘土円盤もしくは粘土紐を底部に貼り付けた後、ナデ調整を施して高台を形成する。胎土には不純物を多く含み、暗赤灰色～灰色を呈する。施釉前に白色土の化粧がけをし、体部外面上半部と内面全面にくすんだオリーブ色の釉を施す。見込には厚さ４～６㎜を測る白色～灰褐色の目土や目跡が６～７か所に残り、底部にも同数の目跡が残る。16は口径15.8cm、底径7.4cm、器高5.2cm。19は口径17.6cm、底径7.8cm、器高5.8cm。20は口径19.6cm、底径8.6cm、器高6.4cm。28は口径17.2cm、底径8.6cm、器高6.1cm。28は釉の剥離が激しく、器面に残っていない。21・22・24・25は青磁黄釉褐彩の水注の破片である。釉は淡いオリーブ色～青色をおびたオリーブ色。21は注口部。基部は外径2.3cm・内径1.1cm、先細りとなり先端部では外径1.3cm・内径0.8cm。先端部に褐釉。胎土は0.2㎜前後の砂粒を多く含む。22は取手部。逆Ｊの字状を呈し、背面に4条の沈線が施される胎土に少量の不純物を含むものの良好。24は底部と胴部。胴部は球状を呈し、底部の高台は中央部が凹めた平高台。施釉前に白色土の化粧がけを底部近くまで施している。胎土は0.2㎜前後の砂粒を多く含み、粗い。25は耳部。胴部と頸部との境に粘土紐を貼付ている。胎土は粗く、0.2㎜前後の砂粒を多く含む。23は新羅焼の甕である。球状の胴部にＬ状に外反する口縁部が付く。胴部はタタキで整形の後に肩部だけをヨコナデ調整し、下半部は平行の叩き目を残す。肩部にはヘラ記号が残る。胎土は0.2㎜前後の砂粒を多く含み、暗灰色である。復原口径は14.2cm、胴部径16.5cm。29は土師器の椀で、口縁部を欠く。体部は丸味を持って外傾しながら立ち上がる。高台は粘土紐の貼付けにより成形し、端部が外側に開く。体部内面は黒色、外面は淡い灰褐色。胎土は精良である。高台径8.2cm。次ぎに、図示していないもので特徴的な遺物について補足説明する。壷は青磁の盤口壷で頸部がやや外反しながら立ち上がり、口縁は２重口縁的に直立する。口縁端部は面をなす。

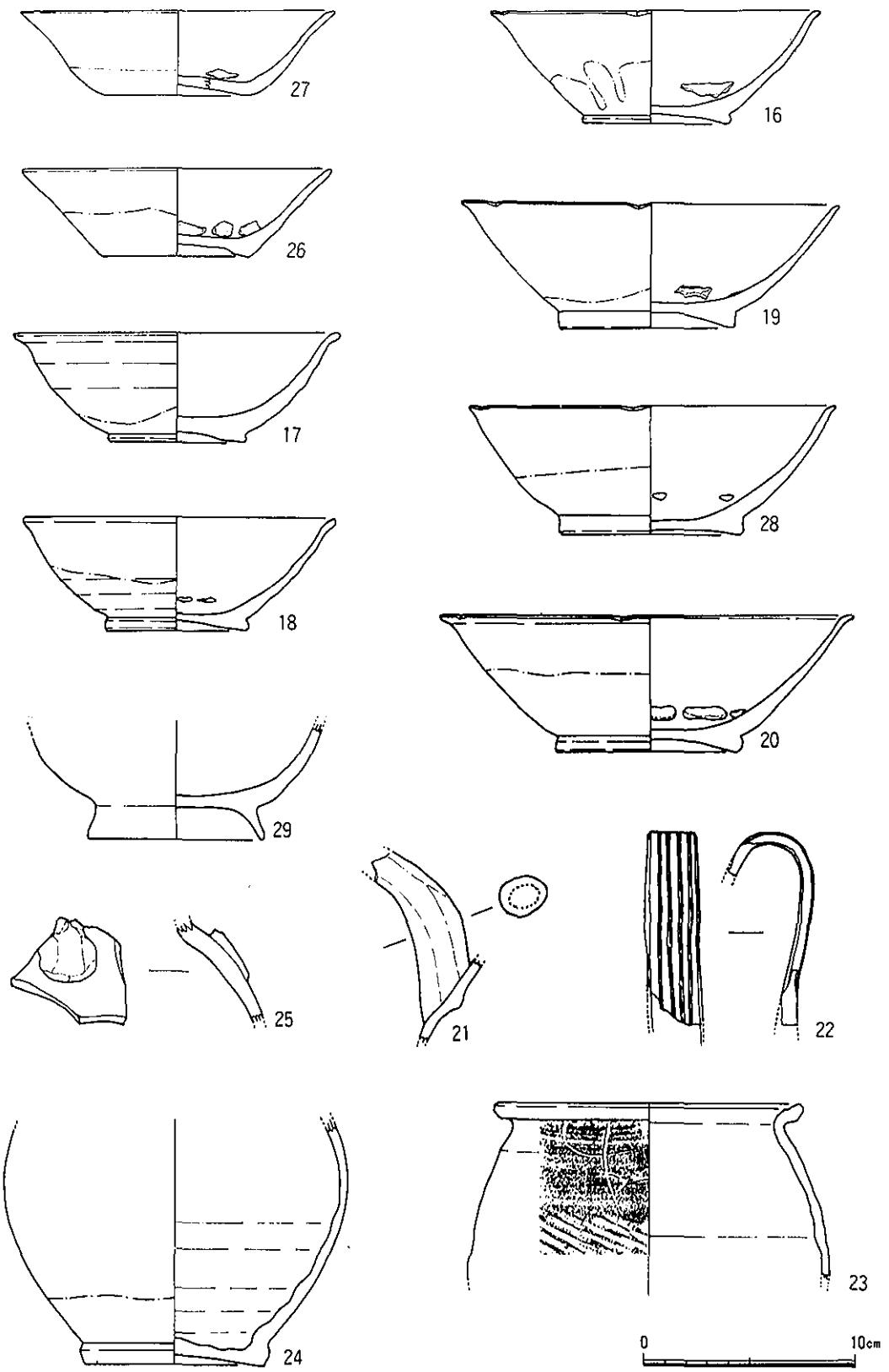


Fig.11　SD357出土遺物実測図（1／3）

口縁の内面と外面全面に暗い緑灰色の釉を施す。胎土は黒色の不純物を多く含み、茶色味を持った灰色を呈する。SK358から接合する同一固体の破片が出土した。動物土製品は土馬頭部の破片と考えられる。人の拳ほどの大きさである。口や目をヘラ描きし、器面をヘラ磨きする。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、灰色。軒瓦は、単弁14弁軒丸瓦、鴻臚館式軒平瓦と均整唐草文軒平瓦とが出土している。

SK351からは、越州窯系青磁（椀・輪花皿・蓋・水注）、白磁（輪花椀）、陶器（壺・鉢）、土師器（椀・皿）軒丸瓦、丸平瓦、石錘等が出土している。

9･10は白磁輪花椀である。口径13.2㎝、高台径6㎝、器高5.8㎝。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめている。体部下半部から口縁端部にかけて外側から細い棒状工具の押圧により輪花状に成形する。体部下位はヘラケズリによる調整。高台は削り出し。胎土は乳灰色。全面に青味をおびた乳灰色の釉。高台畳付は施釉後に掻き取っている。10は底部も施釉後に削り取り、露胎とする。8は白磁椀で、口縁部を欠く。体部は丸味を持って立ち上がる。径5.6㎝を測る高台はヘラケズリにより輪状に削り出し、やや内傾する。高台内底に墨書が残る。胎土は不純物や砂粒を含まず、白色。釉は体部外面下端までと内面に施し、乳灰色である。11は復原口径17㎝の青磁の椀で、底部を欠く。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は直線的に外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には幅2㎜の1条の沈線が廻る。体部下半はヘラケズリによる調整。胎土は淡青灰色を呈し、0.5～1㎜を測る少量の砂粒を含む。釉はくすんだオリーブ色。12は底部を欠く、復原口径12㎝の龍泉窯系青磁椀。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は直線的に外反する。口縁端部は肉厚で丸くおさめる。外面には蓮華文をヘラ描きで施す。胎土は淡い黄色味をおびた灰色を呈し、0.5㎜前後を測る砂粒を多く含む。不純物を多く含む釉は全体に厚く、青色をおびた灰色。60は青磁壺の蓋。天井部はわずかに丸味をもち、口縁部は下方に折れ曲がりやや外反しながら直線的に伸びる。口縁端部は平坦に仕上げる。天井部外面はヘラケズリ、その他は横ナデ調整。外面の天井部には渦形と波形のヘラ描きよる沈線、口縁部との境にも2条の沈線を施す。天井部と口縁部との境には直径4㎜の孔が2か所にあり、焼成前に穿孔したもの。口径11㎝、器高2.2㎝を測る。全面にはやや暗いオリーブ色の釉を施す。

SK352からは、越州窯系青磁（椀）、白磁（椀）、須恵器（甕）丸平瓦等が出土している。

13は白磁の小型の椀である。口径12.6㎝、高台径4.2㎝、器高3.9㎝。体部はゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部には粘土紐を貼り付けによる玉縁。外面は高台から口縁部下までヘラケズリ調整。高台は輪高台であるが、内底の削りは2㎜と浅い。胎土は乳灰色を呈し、精選。高台を除く全面にやや黄色をおびた乳灰色の釉。高台は露胎。14は白磁の椀で、体部下半を欠く。復原口径15.2㎝。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめている。口縁端部には輪花の刻みが認められる。体部外面は口縁部近くまでヘラケズリ調整。胎土は精選され、不純物を含まない乳白色。釉は全面に施し、青味をおびた乳灰色である。

SK353からは、越州窯系青磁（椀・盤口水注・褐釉灯盞）、白磁（椀）、土師器（椀）、軒平瓦、丸平瓦等が出土している。青磁椀には、胎土に黒い不純物を多く含み、高台が平底であるが周縁を高くして畳付とし、釉は内面と外面上半部まで施す群と、胎土は精選され、高台が輪高台、釉は畳付を施釉後に掻き取って露胎とする以外は全面施釉する群とがある。いずれも見

込内底と畳付に目跡が残る。また、体部外面にヘラ片切彫りによる花文が全面に描かれている青磁椀も出土している。褐釉灯盞は口径10.5cm、器高3.3cm、底部径3.5cmを測り、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。口縁部近くの内面に１個のつまみ。底部には糸切り痕跡が残る。胎土は１㎜前後の砂粒を多く含み、釉は内面にのみ施釉する。この破片は、SK354出土の資料と同一固体であった。盤口水注は頸部と口縁部の破片である。口縁は直線的に立ち上がり、端部は面をなす。復原口径は14cm。口縁部の内面および全外面にやや黄色味をおびた暗オリーブ色の釉を施す。口縁部内面には目跡が残る。

SK354からは、越州窯系青磁（椀・褐釉灯盞・水注）、白磁（椀）、須恵器（甕）、陶器(椀)、土師器（椀）、軒丸瓦、丸平瓦等が出土している。

SK355からは、越州窯系青磁（椀）、須恵器（甕）、土師器（椀）、瓦等が出土している。

SK356からは、越州窯系青磁（椀・輪花椀・皿）、白磁（椀・皿）、須恵器（甕）、土師器(椀)、丸平瓦等が出土している。15は青磁の椀椀で、高台は蛇目高台。口縁部を欠く。高台径5.1cm。体部はわずかに丸味を持って立ち上がる。畳付に白色の目土が残るが、見込内底には目

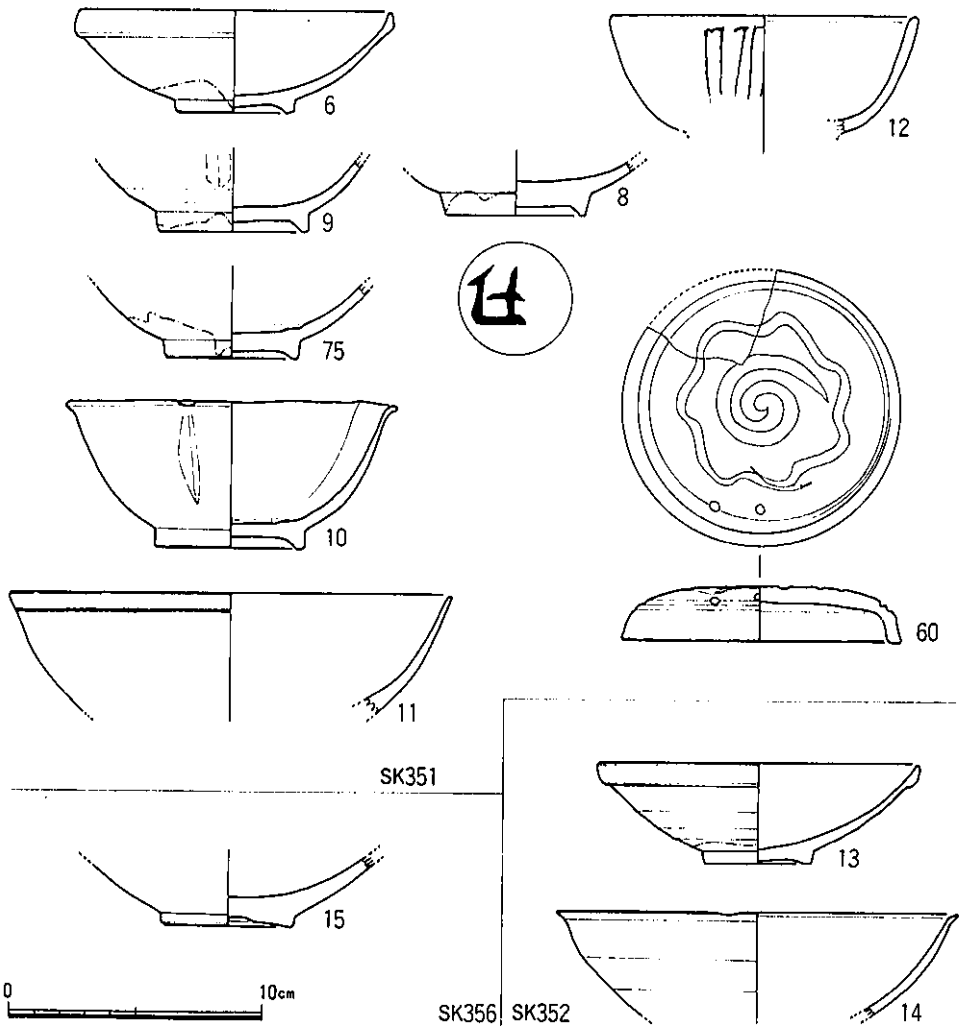


Fig.12　SK351・352・356出土遺物実測図（1／3）

跡は認められない。胎土はわずかに0.2㎜ほどの砂粒を含み、やや青味がかった灰色。全体にやや暗いオリーブ色の釉を施す。

SK358からは、越州窯系青磁（椀・輪花椀・褐彩皿・壷）、白磁（椀・皿）、新羅焼（蓋）、土師器（坏）、丸平瓦等が出土している。

31は青磁椀で、体部以上を欠く。口径5.5cmの高台はヘラケズリにより浅い輪状高台としている。くすんだオリーブ色の釉を器面全面に施した後、畳付部分の釉を掻き取る。胎土には不純物は含まれない。見込と畳付には目跡が残る。35・36は青磁輪花椀である。体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸くおさめ、5か所に刻みをもつ。高台は平底であるが、周縁を高くして畳付とする。粘土円盤もしくは粘土紐を底部に貼り付けた後、ナデ調整を施して高台を形成する。胎土には不純物を多く含み、青味を持った灰色を呈する。施釉前に白色土の化粧掛けを体部外面上半部と内面全面に施した後に、くすんだオリーブ色の釉を施す。見込には厚さ4～6㎜を測る白色の目土や目跡が7か所に残り、底部にも同数の目跡が残る。35は口径21cm、底径10cm、器高8.1cm。36は口径17.4cm、底径7cm、器高6.7cm。33は白磁の小皿で、口縁部を欠く。底部は平底。胎土は乳白色で精選されている。底部を除く全面に青味をおびた乳灰色の釉を施す。底径は4.8cm。青磁椀椀には、高台が釉を全面に施した後に畳付の釉を掻取る資料も出土している。32は青磁皿で底部を欠く。体部は直線的に外反し、口縁は「く」の字状に折れ、丸味を持ちながら外反する。口縁端部は丸くおさめている。胎土は黒色の不純物を多く含み、灰色を呈する。口縁部まで化粧掛けをした後、やや暗いオリーブ色の釉を施す。口径は14cm。34は新羅焼の蓋で、平坦な円盤状に半円球のつまみが付く。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、粗い。口径8.6cm、器高2.5cm。暗青灰色を呈する。軒瓦は、単弁14弁軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦とが出土した。

SK368からは青磁椀が完形で出土した。47は輪花椀である。体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸くおさめ、5か所に刻みをもつ。高台は平底であるが、周縁を高くして畳付とする。粘土円盤もしくは粘土紐を底部に貼り付けた後、ナデ調整を施して高台を形成する。胎土には黒色の不純物や1㎜前後の砂粒を多く含み、暗赤灰色を呈する。施釉前に白色土の化粧がけをし、体部外面上半部と内面全面にくすんだオリーブ色の釉を施す。見込には白色の目土や目跡が7か所に残り、畳付にも同数の目跡が残る。47は口径18.8cm、高台径9.6cm、器高7.6cm。

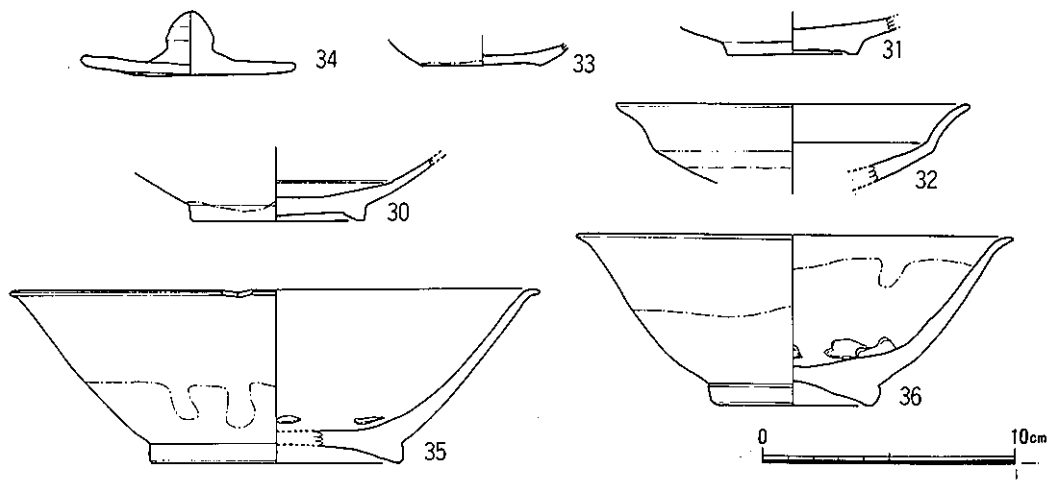


Fig.13　SK358出土遺物実測図（1／3）

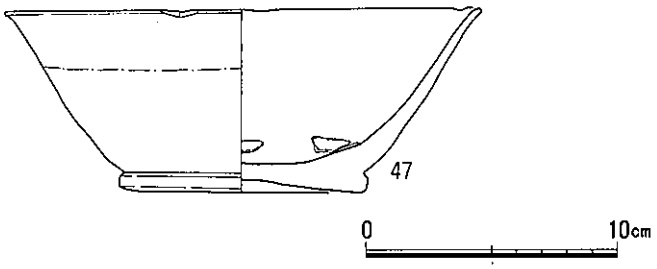


Fig.14　SK368出土遺物実測図（1／3）

SK255は第７次調査で検出した土壙であるが、一部を未掘のままとしていた。今次調査において未掘部分を検出したので、前次調査で出土した遺物も併せて出土遺物の紹介を行なう。土壙内からは、越州窯系青磁（椀・輪花椀・皿・水注・双耳壷・蓋・褐釉香炉蓋・褐釉灯盞）、黄釉褐彩（深鉢・水注）、白磁（椀・皿）、緑釉緑彩陶器、緑釉陶器、須恵器（甕）、土師器（坏・椀・甕）、石鍋、馬歯、丸平瓦等が出土している。

4・96は土師器の坏である、体部は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。底部にはヘラ切り痕跡が残る。胎土は0.2～0.5㎜の砂粒を多く含み、淡い茶灰色を呈する。焼成はやや軟質である。4は口径13㎝、底径８㎝、器高３㎝。96は口径12.2㎝、底径６㎝、器高3.2㎝。5も土師器の坏である、体部はややカーブを描くように外傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。底部にはヘラ切り痕跡が残る。胎土は0.2～0.5㎜の砂粒を多く含み、淡い茶灰色を呈する。焼成はやや軟質である。口径12.6㎝、底径8㎝、器高3.5㎝。6は土師器の椀で、口縁部を欠く。体部はやや丸味を持ちながら直線的に外傾する。高台は粘土紐の貼付けにより、端部が細くなる。器面はヨコナデ調整。胎土は精選されており、砂粒を含まない。焼成は良好で、焼き締まっている。高台径は6.3㎝を測る。94は褐釉の香炉蓋である。二重口縁のような２段の天井部に中空円筒形のつまみが付く。天井部と体部との境は押圧し、波状に仕上げる。上段と下段の天井部の境の3か所に穿孔する。胎土は黒褐色の不純物を多く含み、淡い茶灰色を呈する。釉は外面のみに施す。口径10.5㎝、器高7.7㎝。8～12、95・96は越州窯系青磁の椀である。11は体部、口縁部が直線的に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。高台は平底であるが、周縁を高くして畳付とする。粘土円盤もしくは粘土紐を底部に貼り付けた後、ナデ調整を施し、中央部を押し上げて高台を形成する。底部中央の器厚は0.3㎝。胎土には不純物や砂粒は含まれず、青灰色を呈する。施釉前に白色土の化粧がけをし、体部外面上半部と内面全面にくすんだオリーブ色の釉を施す。見込内底と畳付には白色～灰褐色の目土や目跡が5～6か所に残る。口径19.8㎝、高台径10㎝、器高6㎝。8は肉厚の体部、口縁部が直線的に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。高台は平底であるが、周縁を高くして畳付とする。粘土円盤もしくは粘土紐を底部に貼り付けた後、ナデ調整を施し、中央部を押し上げて高台を形成する。高台の縁と体部下端はヘラケズリ調整し、高台は面取り風である。底部中央の厚みは1.1㎝。胎土には茶褐色の不純物や砂粒を少量含み、灰褐色～青灰色を呈する。体部外面上半部と内面全面に釉を施すが、剥離が激しく釉色などは不明。見込内底と畳付には白色の目土や目跡が10か所に残る。口径18.6㎝、高台径10.3㎝、器高6.7㎝。10は青磁の椀である。体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。高台はヘラ削りによる浅い輪高台である。周縁もヘラケズリ調整する。胎土は不純物や砂粒を含まず、乳灰色を呈する。全面にくすんだオリーブ色の釉を施し、畳付は釉を掻き取り露胎。見込

内底と畳付には白色の目土や目跡が18～20か所が残る。口径19.2cm、高台径10cm、器高7.2cm。9は青磁の椀である。体部、口縁部は直線的に外傾しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。高台は内底面を浅くヘラケズリした輪高台。胎土には不純物や砂粒は含まれず、精選され、淡い青灰色を呈する。ややくすんだオリーブ色の釉を全面に施し、高台は露胎。口径17cm、高台径6.6cm、器高6.3cm。95は体部、口縁部が直線的に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。底部は平底であるが、中央部に向かってゆるやかに凹みをもたせる。底部と体部との境をヨコナデして、丸味を持たせる。底部中央の厚みは0.9cm。胎土は不純物や大きな砂粒を含まないが、やや粗く、青灰色～乳灰色を呈する。施釉前に白色土の化粧がけを底部近くまで施し、その上オリーブ色の釉を施す。見込内底には白色の目土が8か所、畳付に目跡が7か所それぞれ残る。口径21.4cm、高台径9cm、器高8.3cm。12は体部、口縁部が直線的に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。底部は平底で、中央部を押し上げている。底部と体部との境をヨコナデして、丸味を持たせる。底部中央の厚みは0.9cm。胎土には不純物や砂粒を含まず、乳灰色を呈する。体部外面上半部と内面全面に灰色を持ったオリーブ色の釉を施す。見込内底と畳付けには白色の目土や目跡が8～9か所に残る。口径16.2cm、高台径7.8cm、器高6.1cm。SK255出土の越州窯系青磁椀の一部には、高台に糸切り痕を底部に残す資料も出土している。13は黄釉褐彩の深鉢である。寸胴の胴部を持ち、口縁部はL字状に折れる。口縁端部は波状に仕上られている。黄釉を底部近くまで、口縁部および胴部3か所に褐釉を施す。口径14.6cm、底径8cm、器高12.8cm。3は無釉陶質の大型鉢である。体部は直線的に外反しながら立ち上がり、口縁部は内側に折れ曲がる。内面の口縁端部近くには凸帯が1条廻る。底部は中央部を底上げした平底である。器面はナデ調整であるが、体部外面に平行叩き目が部分的に残る。胎土は1～5mm程の砂粒を多く含み、暗いセピア色を呈する。口径43cm、底径14.2cm、器高18.2cm。内面底の器面は磨滅痕が認められ使用された可能性が高い。116は緑釉緑彩陶器で器形は不明。117は型づくりによる袋物の緑釉陶器である。内外面には植物繊維で編んだ笥の模様がある。

整地層内からはFig.17に示す遺物を含め、多くの遺物が出土している。

59は見込内底に毛彫りの草花文を持つ青磁の輪花椀である。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。体部上半部から口縁端部にかけて外側からヘラ状工具による押し引きで輪花を成形する。体部下位はヘラケズリによる調整。高台は外開き気味に付く。胎土は精良で、淡い青味がかった灰色を呈する。内外全面にオリーブ色の釉を施す。高台内面に円形の目土が残る。口径14.4cm、高台径6.6cm、器高6.8cm。54は李朝の施釉陶器の椀で口縁部を欠く。高台は削り出し、断面形が三角形をなす。胎土はやや粗い砂粒を多く含み、灰白色を呈する。全面に青味を持った灰色の釉を施し、畳付の釉を掻き取る。砂粒の多い白い目土が見込内底には8個所、畳付には4個所が残る。高台径5cm。朝鮮半島産と考えられる。56は唐津系の施釉陶器の皿である。体部は直線的に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。高台は削り出し、体部下半もヘラケズリ調整。胎土は粗い砂粒を多く含み、淡い茶灰色を呈する。内面と体部外面上半部に暗い緑色がかる灰色の釉を施す。体部外面と高台は露胎。畳付には4個所の目跡が残る。口径23cm、高台径7.6cm、器高6.3cm。49は越州窯系青磁の椀で口縁部を欠く。体部はやや丸味を持ち外傾しながら立ち上がる。高台は削り出しの輪高台。オリーブ色の釉を全面に施し、畳付の部分を後で掻き取る。目跡が見込内底には輪状に、畳付に

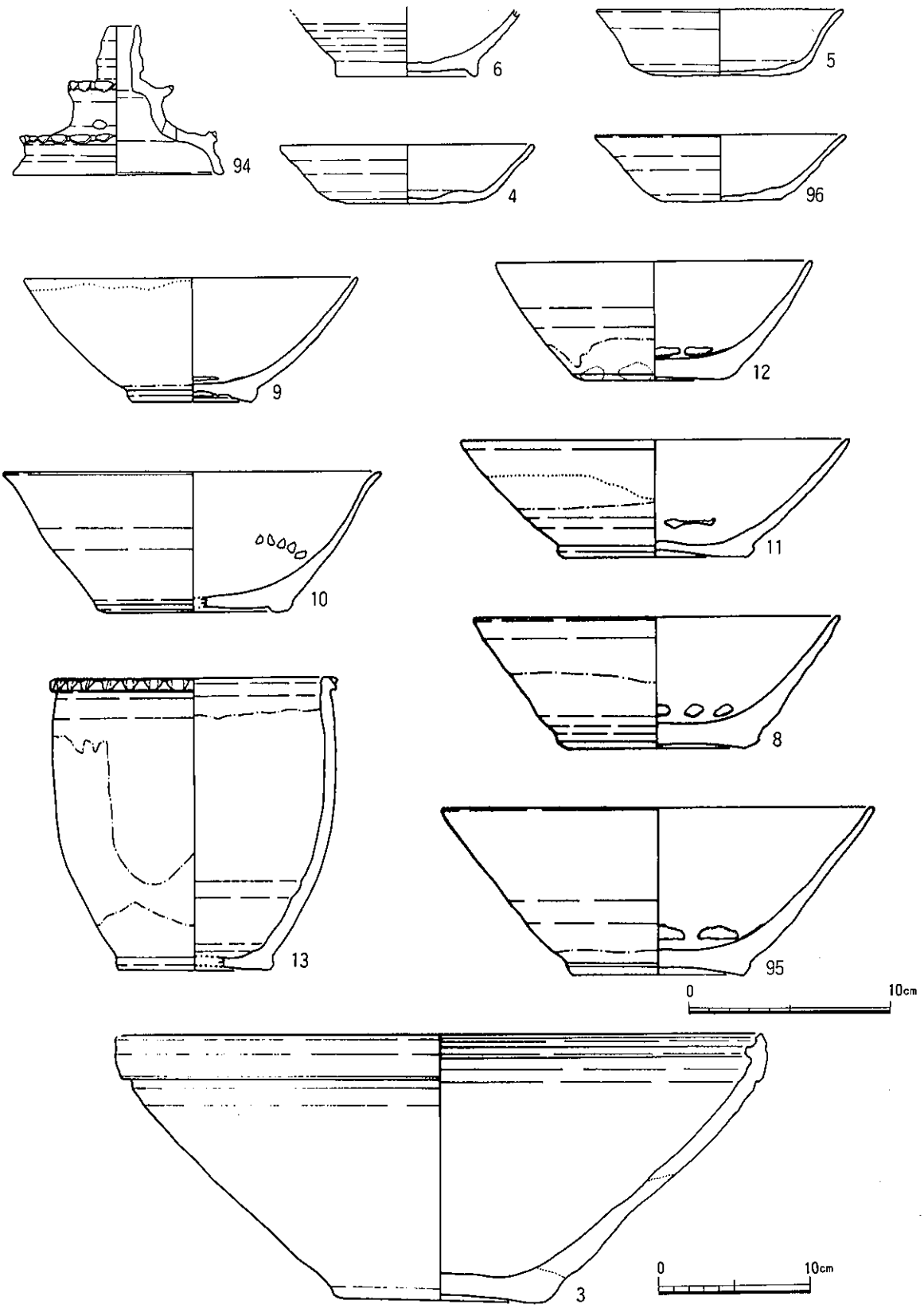


Fig.15　SK255出土遺物実測図（1／3，1／4）

は全面に残る。胎土は精選。50は越州窯系青磁の椀で口縁部を欠く。高台は削り出しの輪高台。濃いオリーブ色の釉を全面に施す。高台内底に白色の目土が4か所残り、見込には認められない。胎土は精選。48は越州窯系青磁の皿。体部は下半で折れ曲がり、立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。高台は削り出しによる輪高台。胎土には砂粒は含まれないがやや粗く、淡い灰褐色を呈する。器面全面にオリーブ色の釉を施し、畳付部分を掻き取る。目跡が畳付に残るが数は不明。口径14.2cm、器高4.7cm、高台径7.4cm。57は青磁の蓋で、下半部を欠く。擬宝珠形のつまみが頂部に付く。下段の体部に穿孔が認められる。胎土は精良で、砂粒を含まず、乳灰色を呈する。灰色気味の淡いオリーブ色の釉を全面に施す。

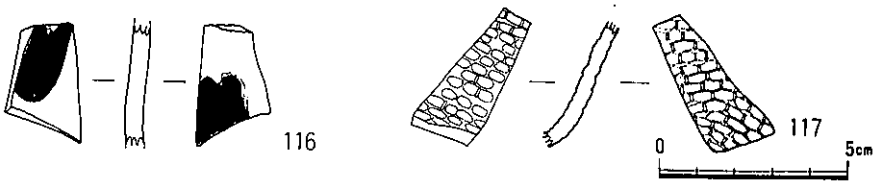


Fig.16　SK255出土遺物実測図（1／2）

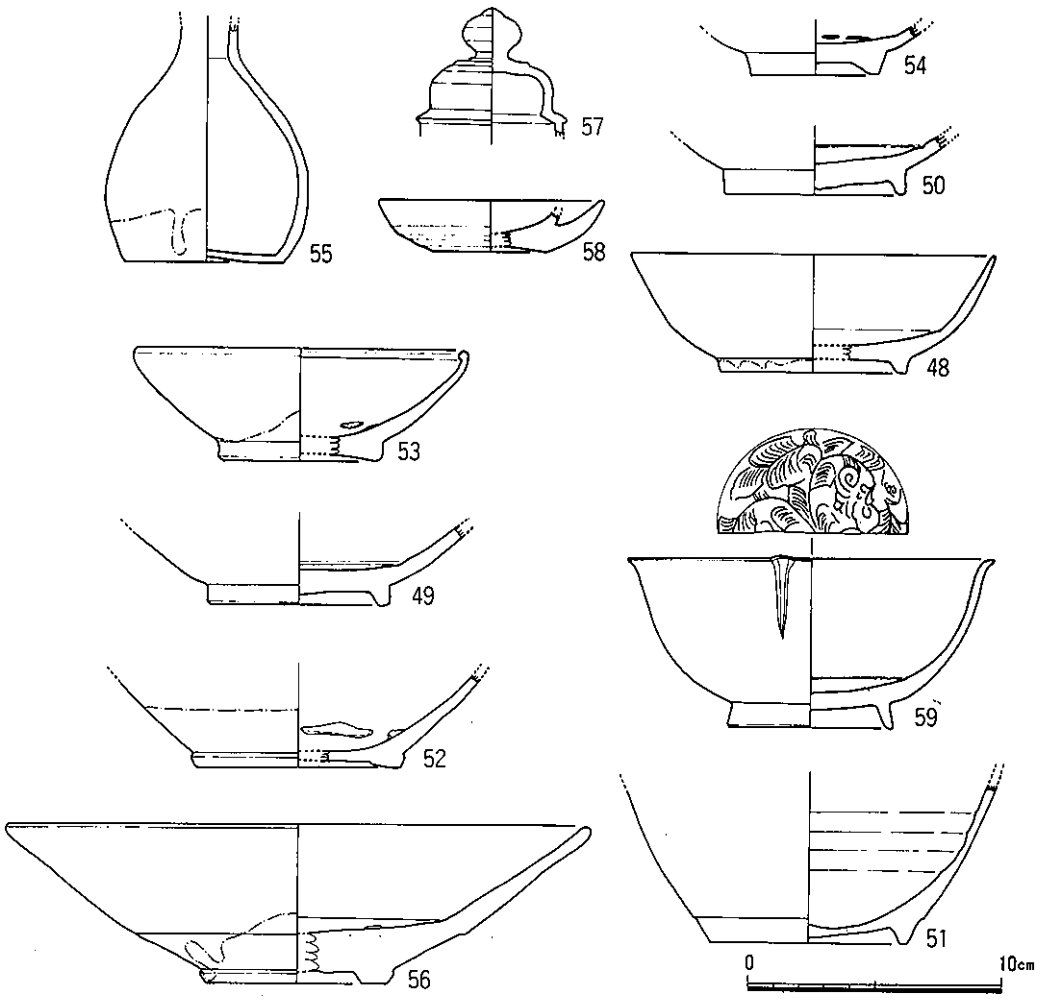


Fig.17　整地層内出土遺物実測図（1／3）

4．小　　結

野球場南側一帯において実施してきた第3～9次調査の成果から、遺構の変遷を中心に簡単にまとめて見ることとする。

1）遺構の変遷

前概報で、第Ⅱ期の遺構は「L」の字状に配された4棟の掘立柱建物とⅠ期の塀を南側に拡張した柵列からなるとしたが、第9次調査の結果、柵列の柱穴はⅠ期の塀の柱抜取り穴であることが判明した。さらに、鴻臚館の施設の変遷を検討するのに、現状では、遺構の前後関係を示す切合い関係や時代を決定する十分な遺物が出土していない。このため、これまでのⅠ期とⅡ期の遺構変遷の再検討が必要となり、建物や施設などの方位の状況から見てみた。

tab.2に示すように建物や施設等の方位は、SB320～323は真北から東へ5°、他の建物や施設は真北から東へ2°と大きく二つに分かれる。また、SB31の東桁柱筋はSA303と重複するが、これらは必然性の結果と考えられる。すなわち、規定された施設配置や土地利用計画における施設の連続性の観点から鴻臚館施設の変遷を考えると、Ⅰ期はL型に配置する掘立柱建物SB320～323。Ⅱ期は東西74.07m、南北56.26mを測る長方形の塀SA15・150・301～303と塀の東面中央に位置する門SB300、および便所土壙SK57・69・70。Ⅲ期は礎石建物SB31・32・50、柵列SA311、通路SF272。Ⅳ・Ⅴ期はSK208・255等の土壙および未発見の建物の順に建設したと理解される。

遺　構　名	偏　位
SB320～323	N- 5° -E
SB300	N- 2° -E
SA15・150・301～303	N- 2° -E
SK57・69・70	N- 2° -E
SB31・32・50	N- 2° -E
SA311	N- 2° -E
SF272	N- 2° -E

tab.2　建物施設の方位

2）整　地

第8・9次調査において整地跡を確認した。特に、第9次調査の東南部においては、丘陵斜面に大規模に土盛り整地している。さらに、SB300の東部においても同様な状況であることから、この整地が行なわれた時期は、丘陵に鴻臚館施設が設置された時期に重なるものと思われる。

3）課　題

本年度で野球場南側一帯の調査が終了したが、遺構の変遷やⅣ・Ⅴ期の建物の存在、鴻臚館の主体部そのものの存在も不明で、鴻臚館全容の解明には未だ遠い。このため、早期に平和台野球場における調査が待たれる。

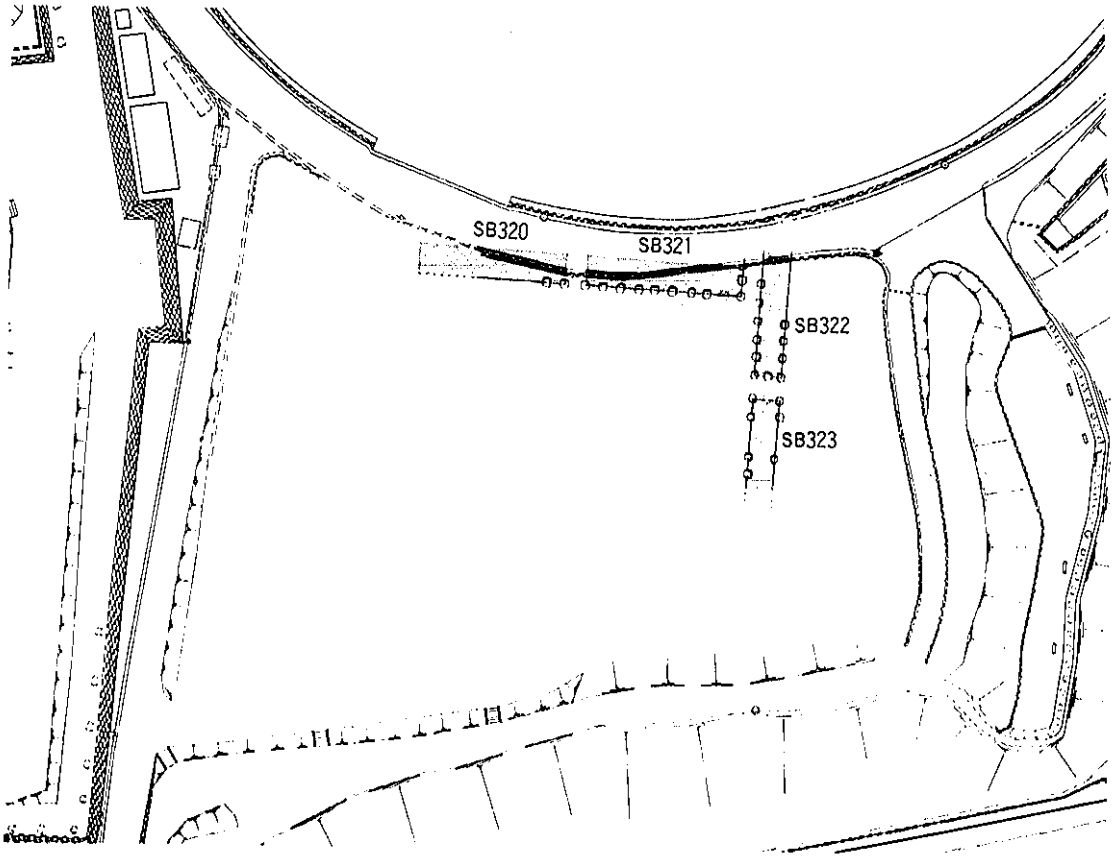


Fig.18　鴻臚館Ⅰ期遺構配置図

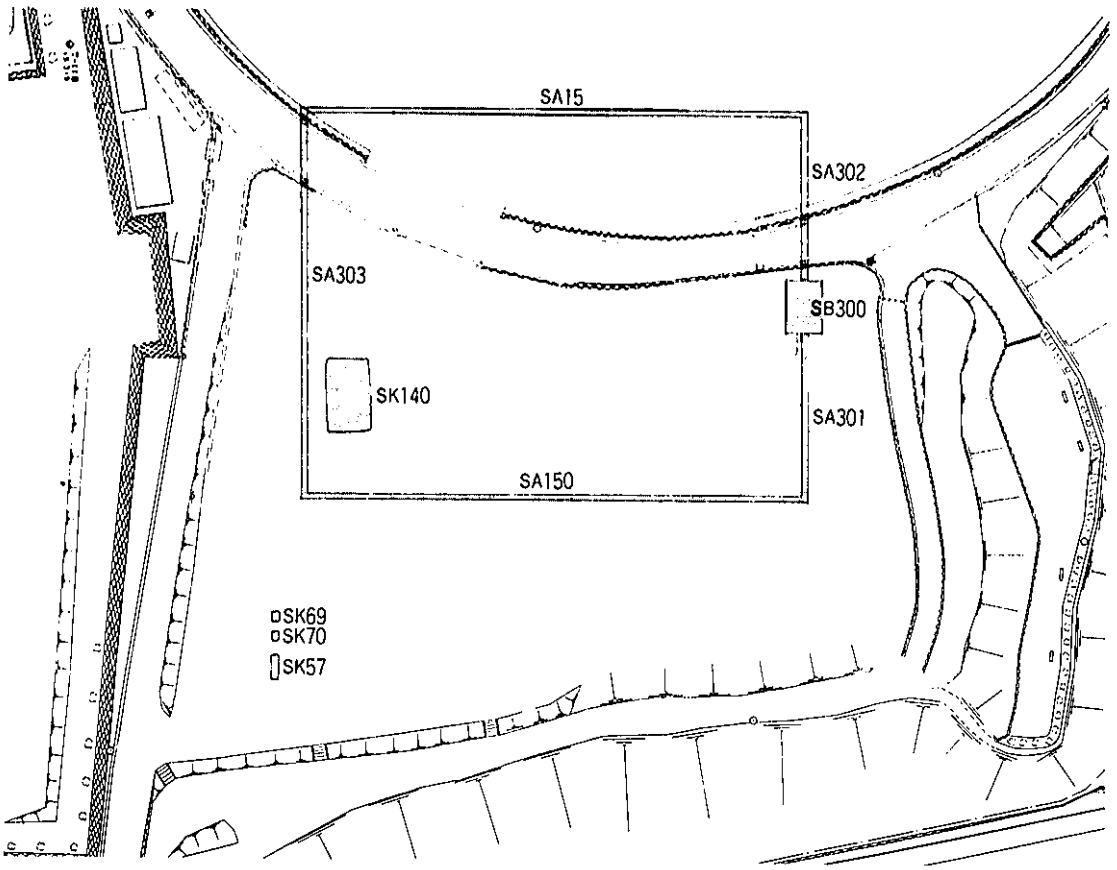


Fig.19　鴻臚館Ⅱ期遺構配置図

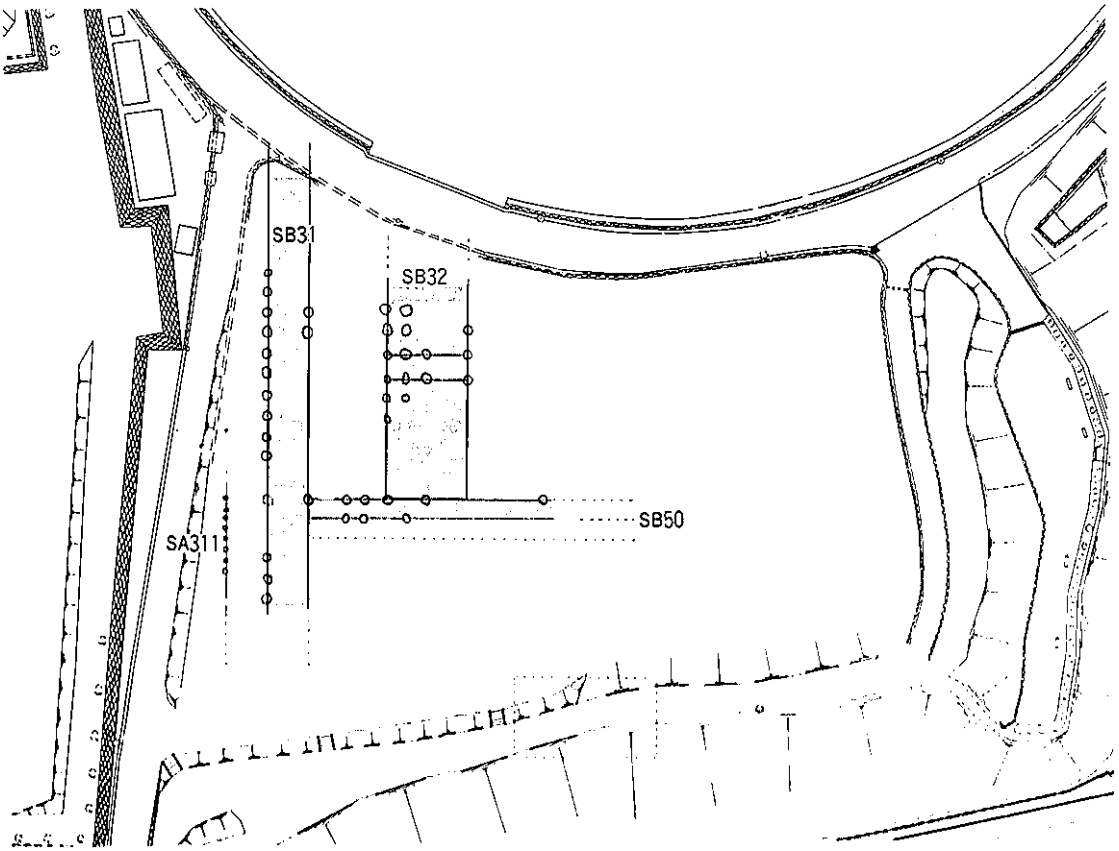


Fig.20　鴻臚館Ⅲ期遺構配置図

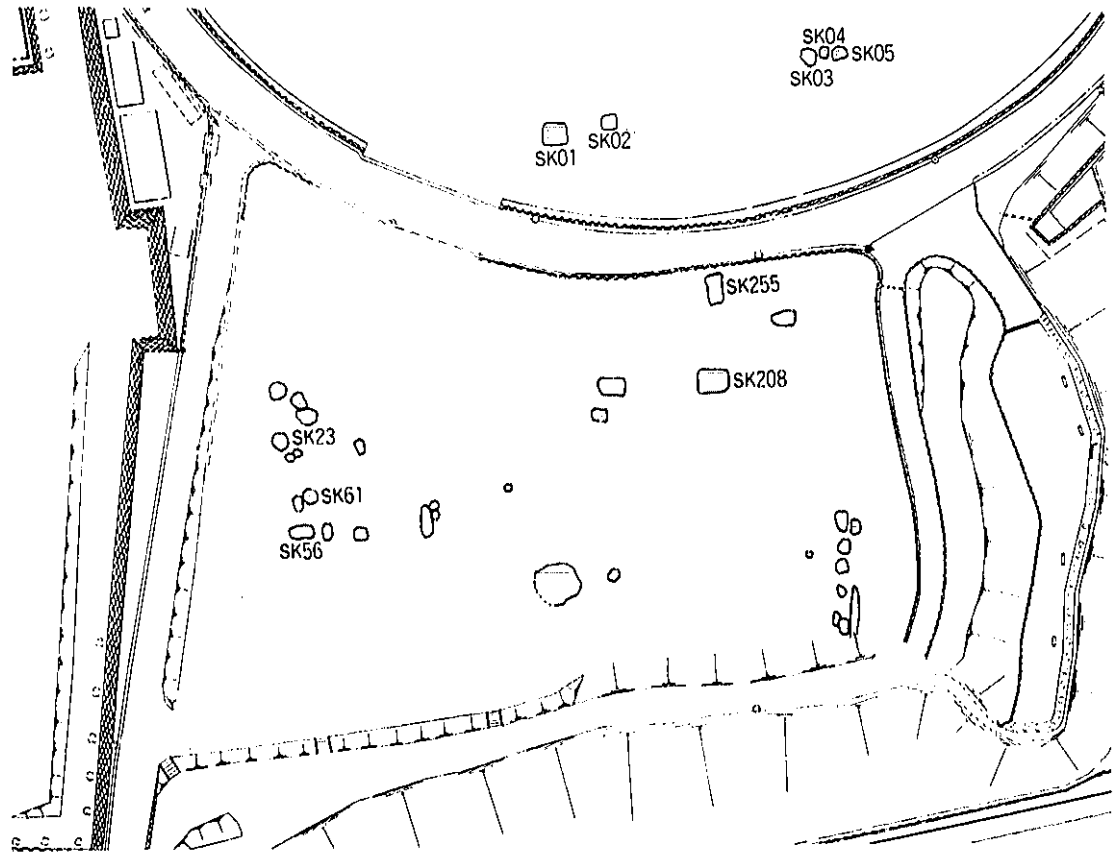


Fig.21　鴻臚館Ⅳ・Ⅴ期遺構配置図

Results of the 8th and 9th excavations of the Korokan

The 8th and 9th excavations of the Korokan were undertaken from June 1994 to March 1995. The surface area of each excavation are 1670m² and 430m² respectively, the positions of which are shown in Figure 1.

The 8th excavation unearthed the modern architectural remains and traces of land readjustment thought to date back to the time of construction of the Korokan. The architectural remains discovered are the foundations of part of the army installation located there prior to the Second World War. A ditch constructed of piled-up granite worked into square columns and square weights was also discovered in association with the architectural remains. This ditch was also part of the army installation.

During the 9th excavation foundations, ditches and pits related to the Korokan were discovered. This in particular led to the elucidation of the scale and foundation construction methods of the pillared gate building SB300, discovered during the 7th excavation. The gate is an 'eight-legged gate' structure measuring 5.32m east to west and 7.62m north to south, and with the gate attached to the centre. The pillars, measuring 40cm in diameter, were embedded in the ground and then consolidated by ramming to prevent them falling down.

These excavations resulted in light being shed on the following points.

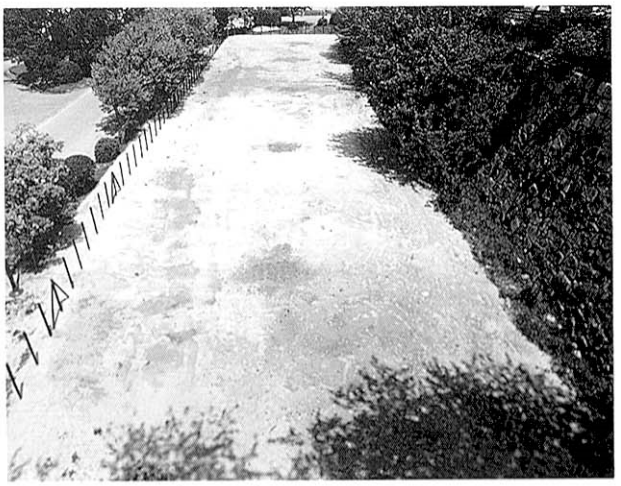
At present, neither overlapping architectural features inferring chronological sequence or dateable artefacts have been sufficiently uncovered to investigate any transitions in the Korokan fascilities. On consideration of the continuity of fascilities in land usage schemes, the fact that the bearings of buildings and fascilities SB 320-323 range from due north to east 5° seems to indicate that the Korokan fascilities were constructed in the follong order: Phase Ⅰ, the pillared structures SB320-323 arranged in an 'L' shape; Phase Ⅱ, the rectangular fence SA15, 150, and 301, measuring 74.07m east to west and 56.26m north to south, the gate SB300 located half way along the fence's east side, and lavatory pits SK57, 69, and 70; Phase Ⅲ, foundation structures SB31, 32, and 50; and Phase Ⅳ·Ⅴ, pits SK208 and 255.

図　版

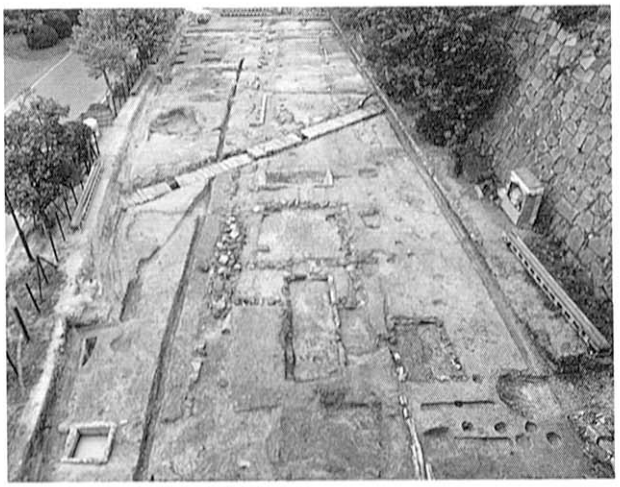
PLATES

SB300（東から）

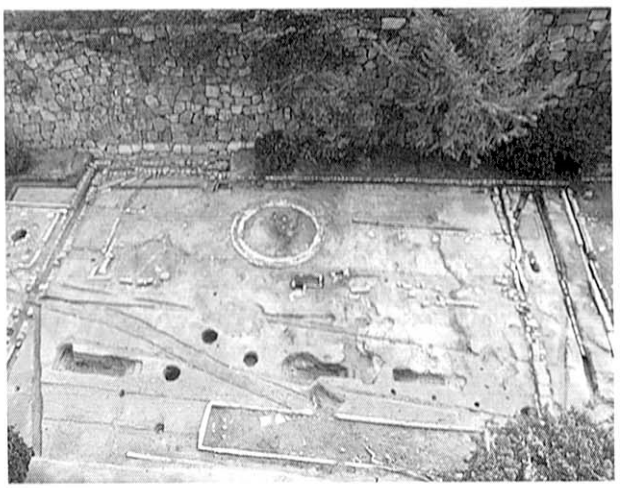
(1) 調査地遠景(北から)



(2) 調査地調査前(西から)



(3) 調査区西半部全景(西から)



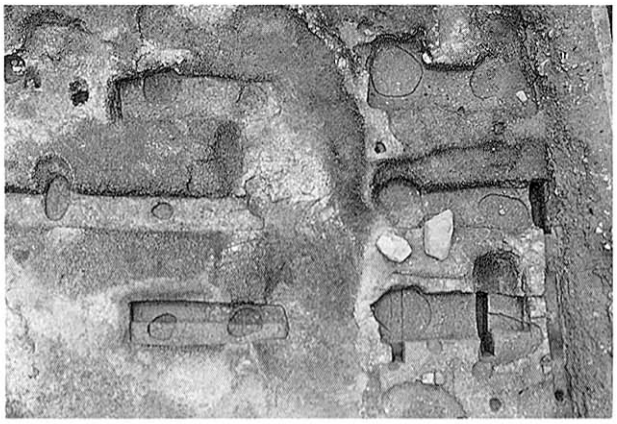
(4) 調査区東半部全景(北から)

(5) 福岡城石垣根石(北から)

(6) 福岡城石垣根石(東から)

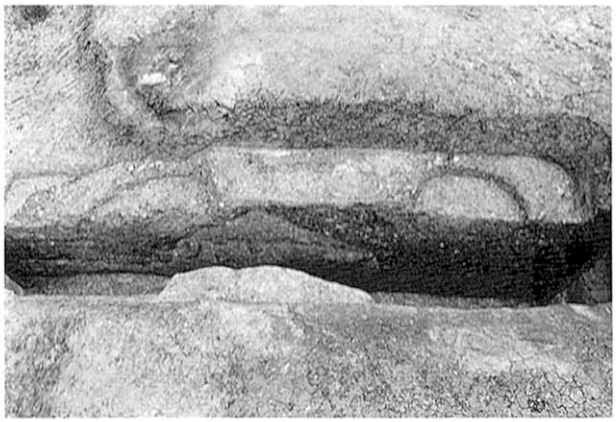
(1) 第Ⅰ調査区全景(東から)

(2) 第Ⅰ調査区全景(南から)



(1) SB300全景(東から)

(2) SB300全景(南から)

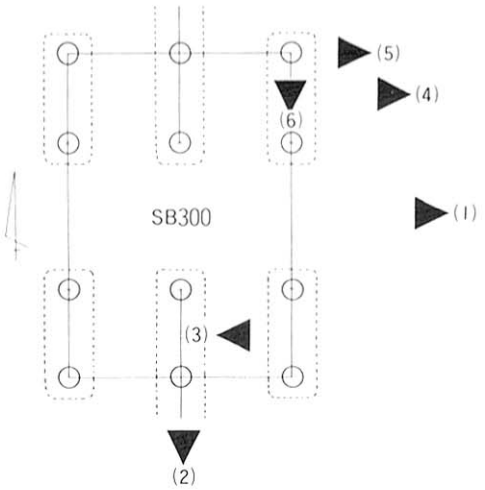


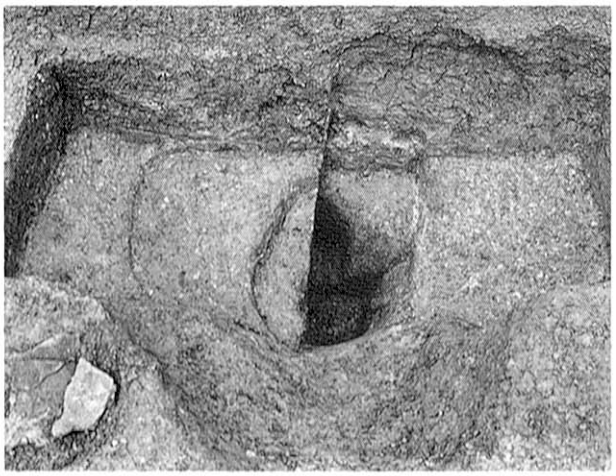
(3) SB300柱掘形断面(西から)

(4) SB300柱掘形断面(東から)

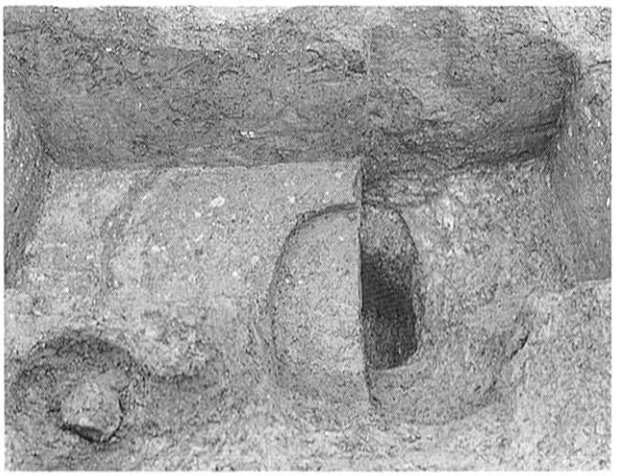
(5) SB300柱穴礎板(東から)

(6) SB300柱穴礎板(南から)

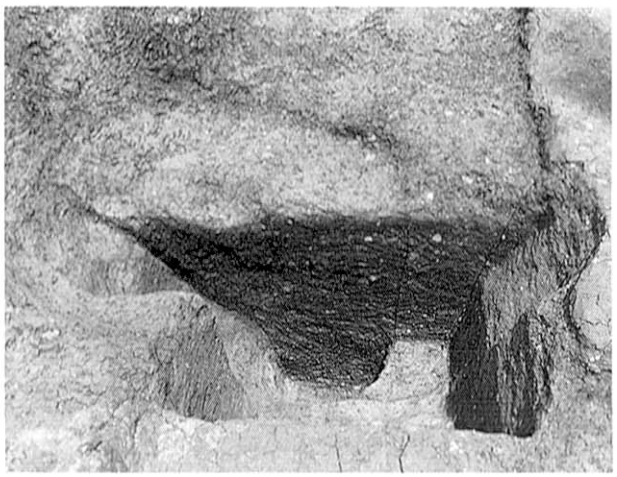




(1) SA301柱掘形・柱抜取り穴(西から)

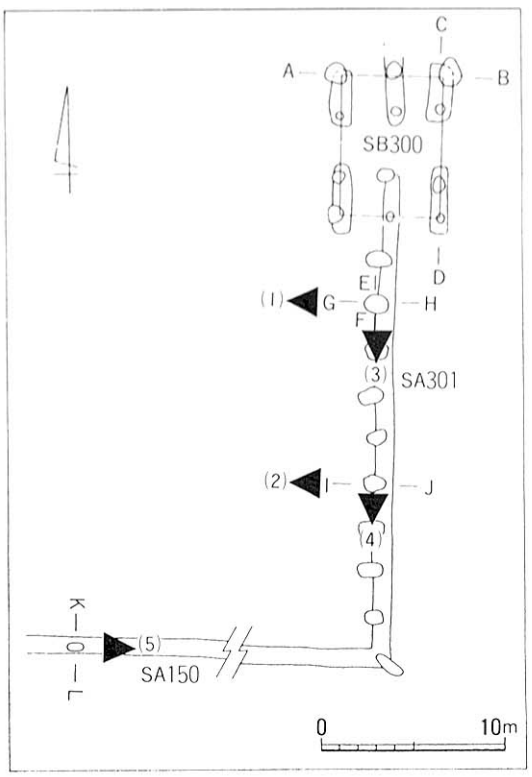


(2) SA301柱掘形・柱抜取り穴(南から)



(3) SA301柱掘形・柱抜取り穴(南から)

(4) SA301柱掘形・柱抜取り穴(南から)



(5) SA150柱掘形・柱抜取り穴(東から)

(1) 第II調査区全景(南から)

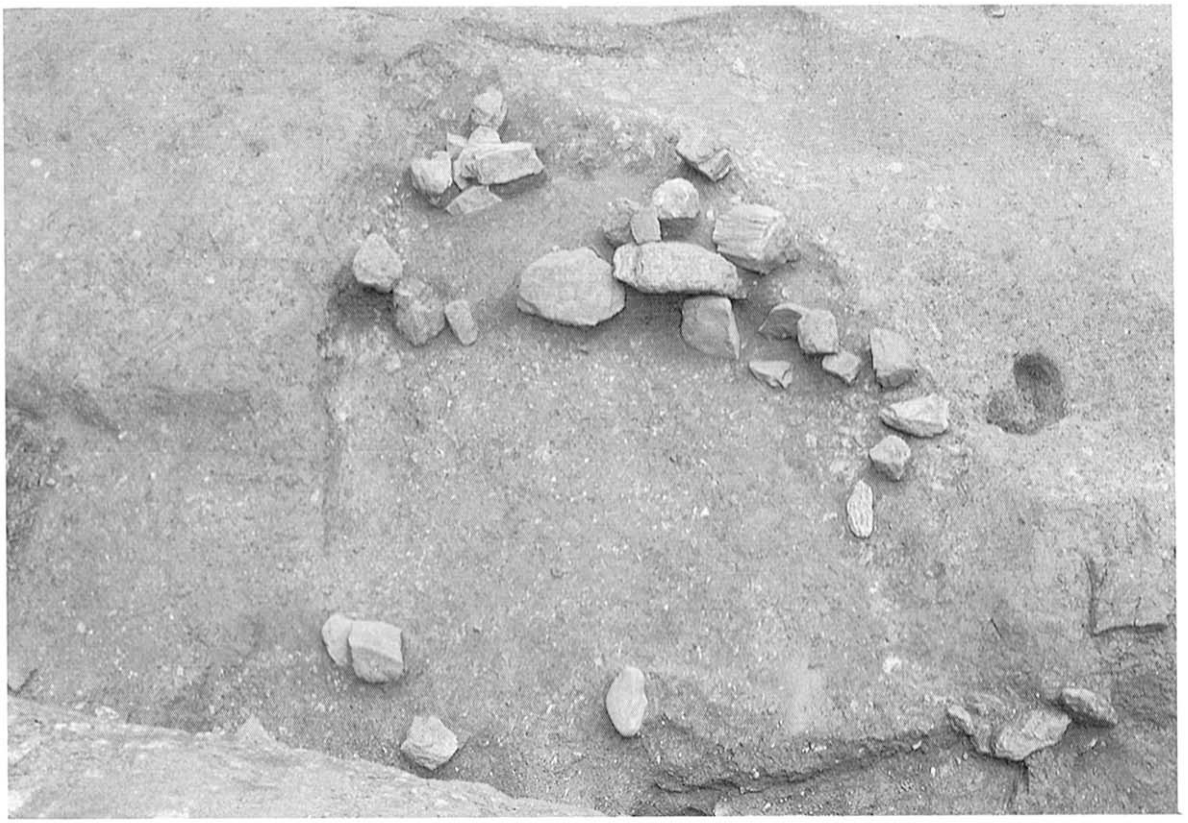
(2) 第II調査区東半部全景(西から)

(1) 第II調査区東半部全景(南から)

(2) SD357遺物出土状況(北から)

(1) SK352遺物出土状況(南から)

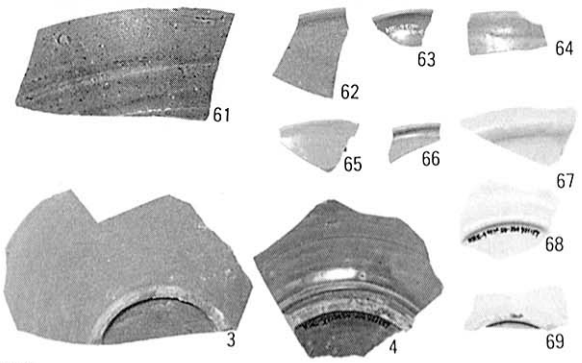
(2) SK368遺物出土状況(東から)



(1) SK360(東から)

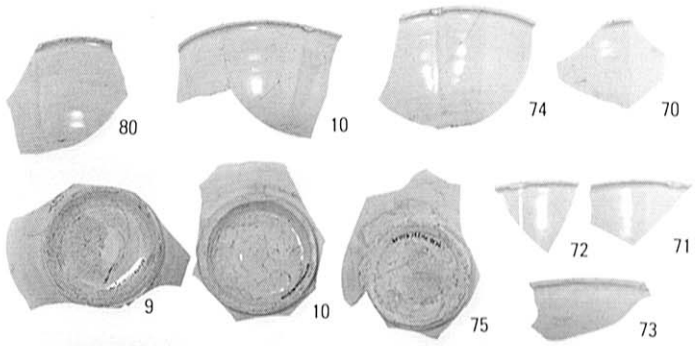
(2) SE361(南から)

SD350

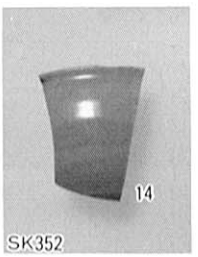


SD350

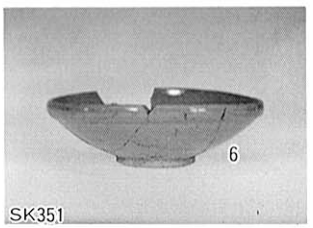
SK351



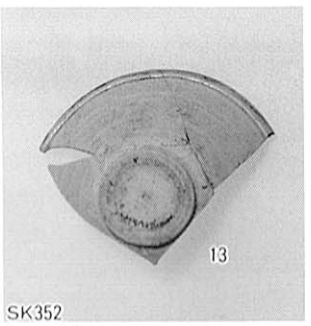
SK351



SK352



SK351



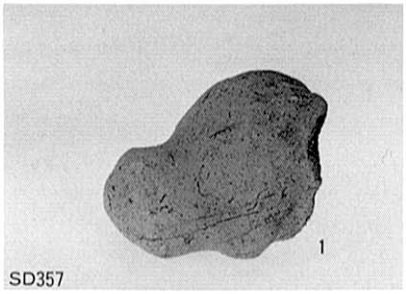
SK352

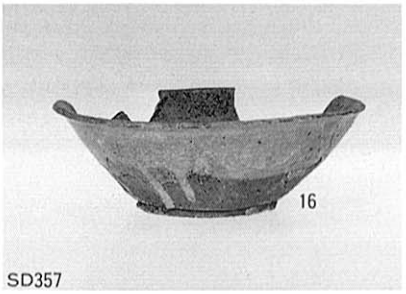
SK354

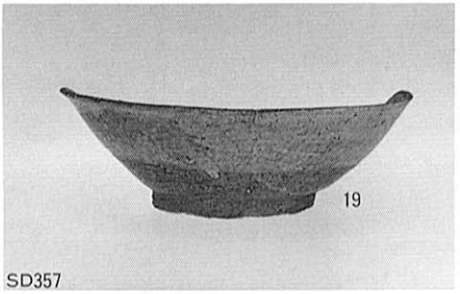
SK354

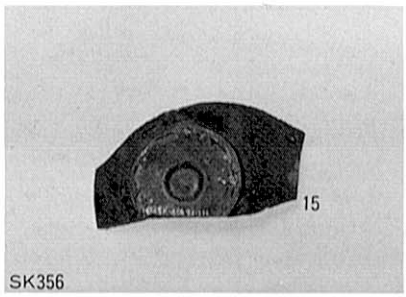
SK355

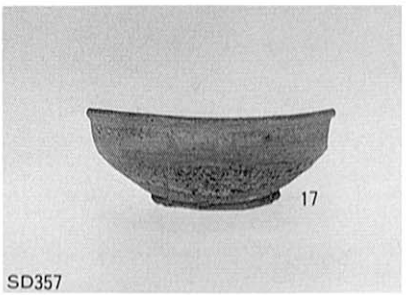
（1）出土遺物１

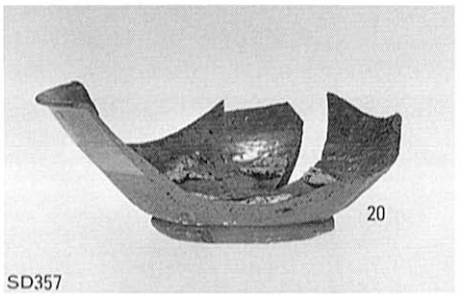

1
SD357

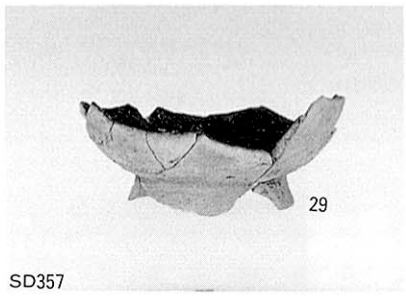

16
SD357

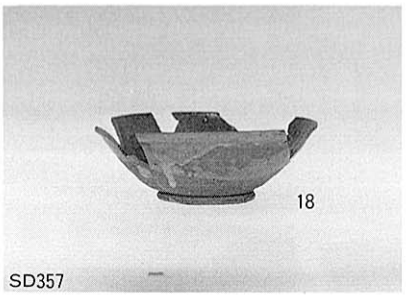

19
SD357

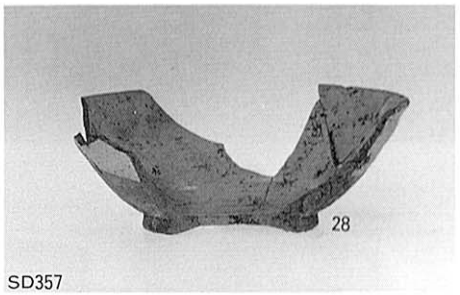

15
SK356

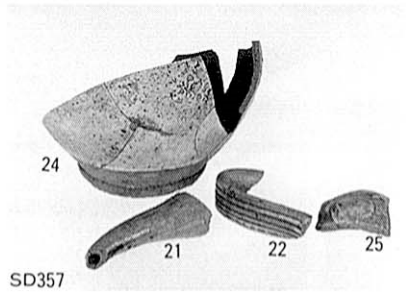

17
SD357

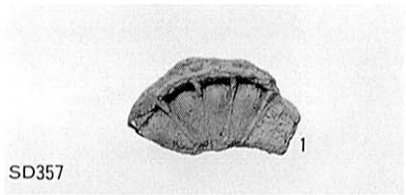

20
SD357


29
SD357

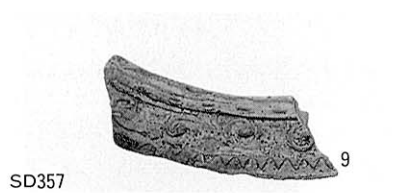

18
SD357

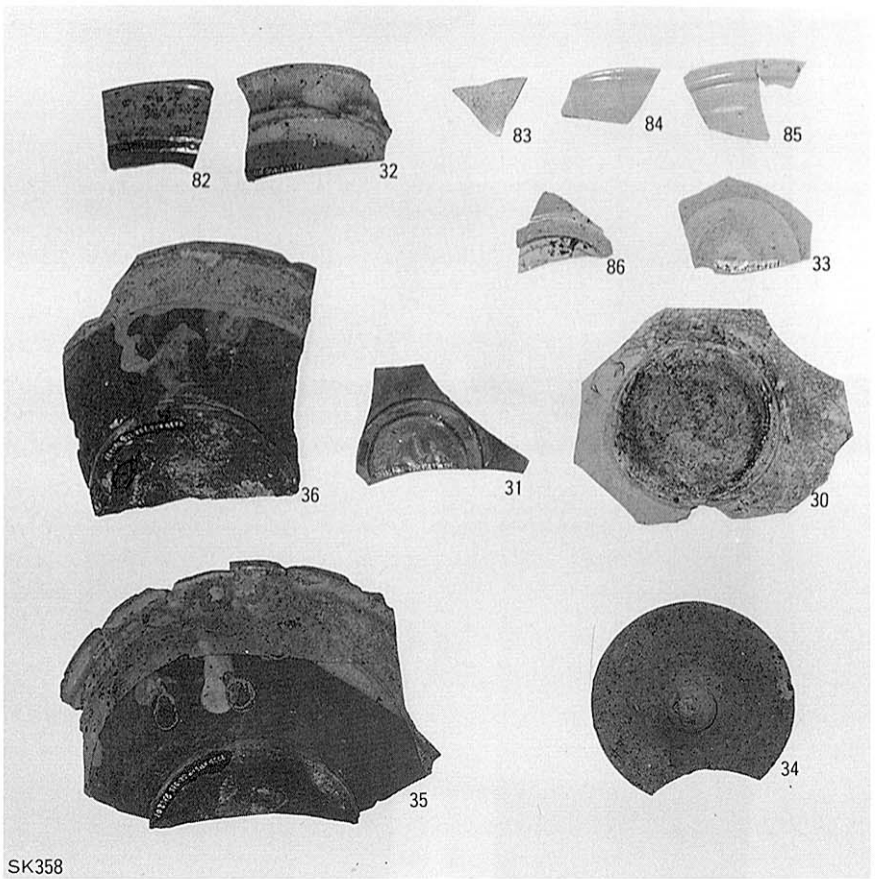

28
SD357


24
21
22
25
SD357


1
SD357

7
SD357

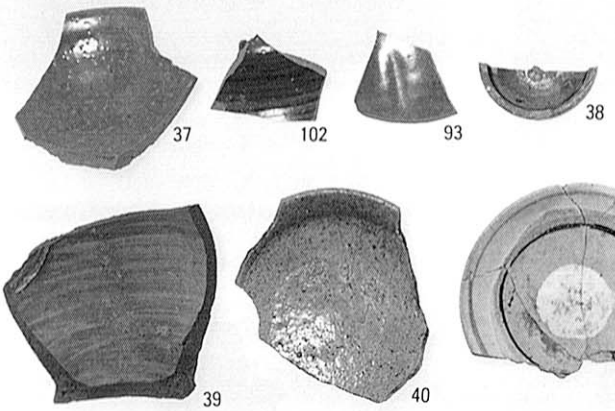

9
SD357


82
32
83
84
85
86
33
36
31
30
35
34
SK358

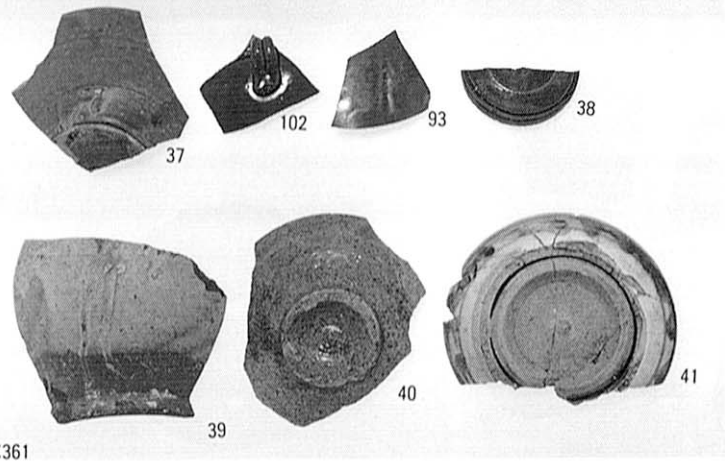
(1) 出土遺物２

SD357

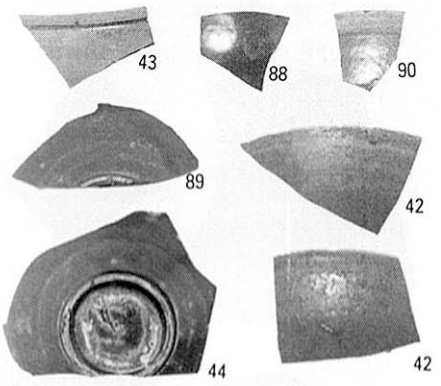
SD357



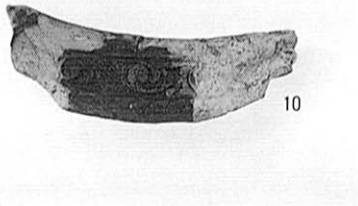
SE361



SE361

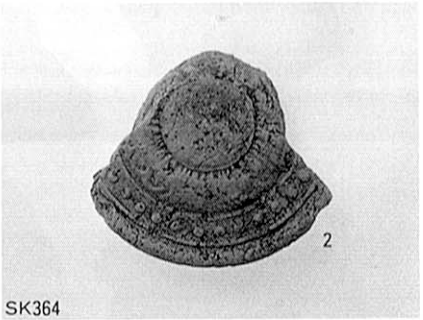


SK364



SK363

SK364



SK364

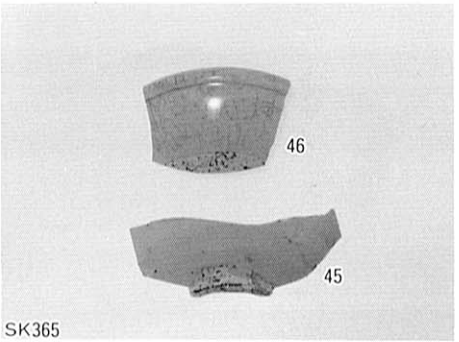
(1) 出土遺物３

21

SK364

22

SK365


46

45

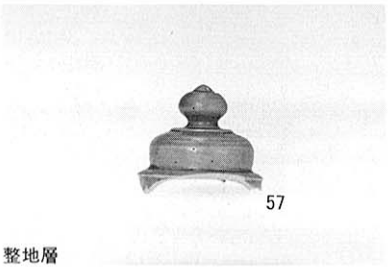
SK365

47

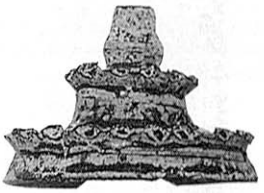
SK368

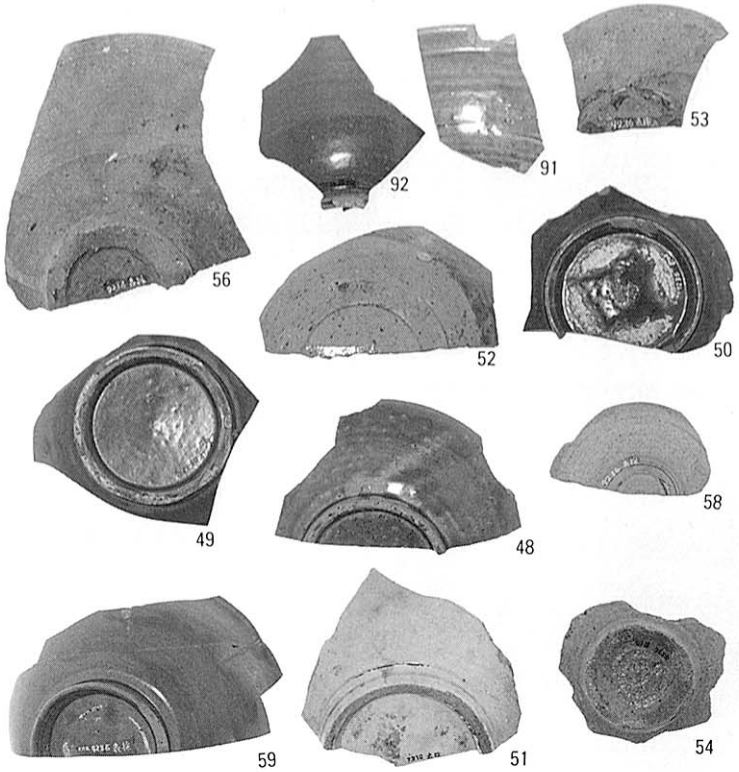
55

整地層


57

整地層




53

91

92

56

52

50

49

48

58

59

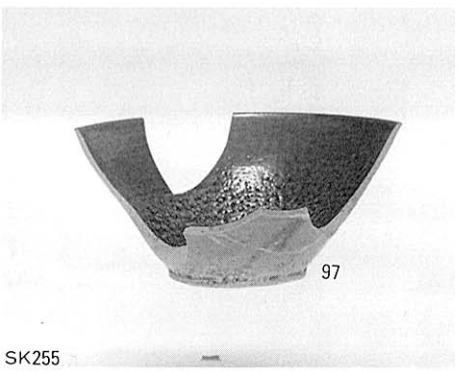
51

54

整地層

94

SK255


97

SK255

（1）出土遺物４

Ⅲ　付　　論

1．鴻臚館跡の土坑（便所遺構）における寄生虫卵・花粉・種実の同定分析

2．鴻臚館跡出土瓦の蛍光Ｘ線分析

3．鴻臚館式軒丸瓦について

4．輪宝・銅壺の出土について

5．福岡城跡発見の地鎮・鎮壇資料

鴻臚館跡の土坑(便所遺構)における寄生虫卵・花粉・種実の同定分析

天理大学附属天理参考館　金原正明
古環境研究所　金原正子

1．はじめに

便所遺構の科学的検討は、ここ2・3年で本格的に研究されだした。特に寄生虫卵分析は、藤原京跡の便所遺構において新たに用いた分析法であり（金原，1992)、便所遺構の検出や食生活の新たな資料を知ることが可能となった。便所遺構と断定できたならば、その堆積物から抽出される資料は食生活と直結する情報となり、より直接的に食生活の復原をすることができる。しかし、この種の研究は緒についたばかりであり、調査例も少なくまだまだデータの蓄積段階でもある。

このたび福岡市教育委員会から鴻臚館の便所遺構の貴重な堆積物の検討機会を頂いた。提供された試料はいくつかの土坑の堆積物があったが、ここでは寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定の3項目について検討を行い、報告する。種実の整理は中村亮仁氏に手伝って頂いた。

2．試料と経過

試料は採取されていたSK-56・57・61・69・70(註)1の堆積物である。SK-57・69・70の3土坑の堆積物は漆黒色から黒褐色を呈する有機質の泥土で、あまり岩石・鉱物粒が混じらずほぼ有機質のみから構成され泥炭状の堆積物であった。SK-57のみ比較的試料量があったため、後述の方法で水洗選別すると半固結の泥炭状の有機質の塊が検出され、糞便の堆積が固結したものと予想された。SK-57については、寄生虫卵分析と花粉分析を、この半固結の塊から任意に4試料を取り出し分析処理した。種実は試料を200cc毎にわけ、任意に4試料を水洗選別した。他に2000cc中より大きなものを抽出した。前者を試料2-1～5、後者を試料1とした。

なお、分析はSK-57・69・70において各処理を検討しながら行った。都合、SK-57では寄生虫卵分析4試料、花粉分析2試料、SK-69では寄生虫卵分析と花粉分析各1試料、SK-70では寄生虫卵分析4試料、花粉分析2試料の分析を検討した。他の2つの土坑では対比試料として、寄生虫卵分析と花粉分析を行った。結果的には、寄生虫卵分析20点、花粉分析16点、種実同定6点、計42点の分析・同定を行った。

3．寄生虫卵分析・花粉分析

1）方法

SK-57・69・70の糞便塊とみなされる半固結の有機質塊は、現行の直接塗抹法と同様に無処理状態でも寄生虫卵を鏡検することができた。ここでは以下の方法で寄生虫卵と花粉分析の処理を行った。

i．試料をそれぞれ1㎤ずつ採量する。
ii．DWを加え撹拌する。
iii．篩別により大きな粒子を除去する。
iv．試料を2分する。
v．片方の試料をグリセリンゼリーで封入し、寄生虫卵分析用の標本を作成する。
vi．もう片方にアセトリシス処理を施す。

(註)1 SK56・61の試料は、便所遺構であるSK57・69・70との比較検討資料を得るために分析を依頼した。(編集者註)

図1　第5次調査遺構配置図（1／250）

図2　SK57・69・70（南から）

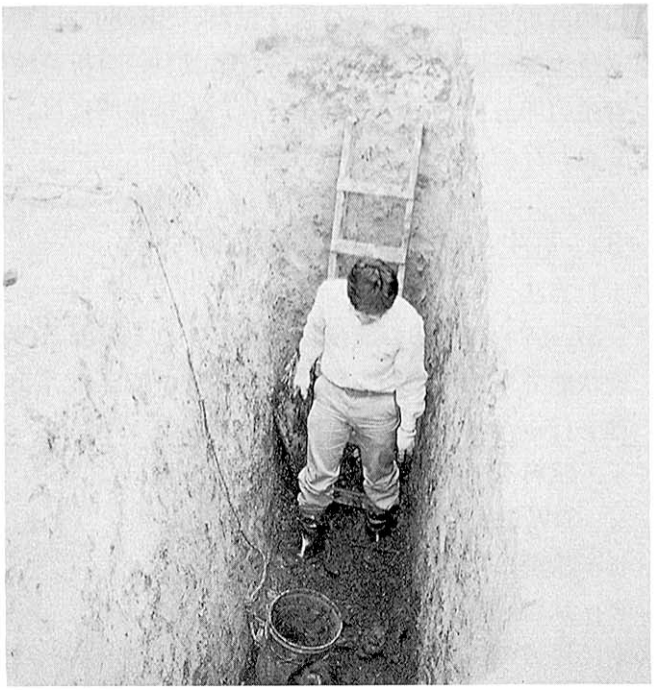


図3　SK57調査状況（南から）

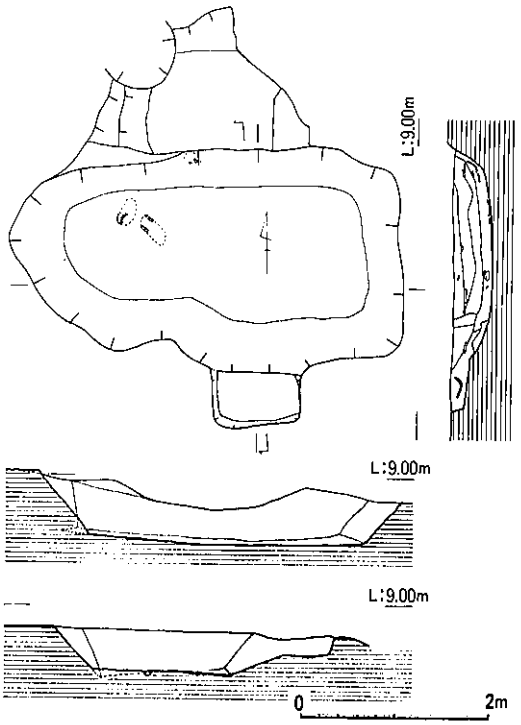


図4　SK56実測図（1／80）

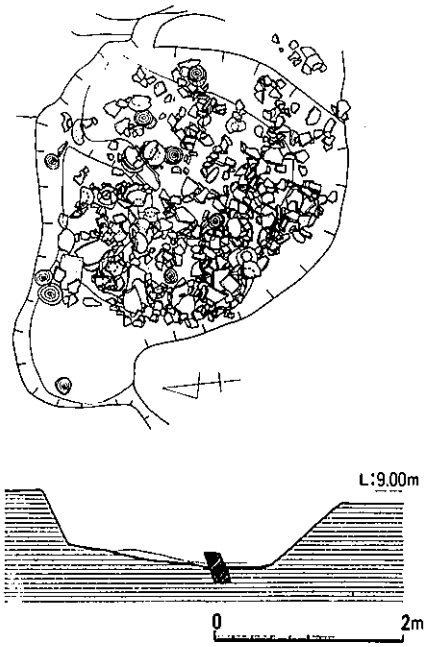


図5　SK61実測図（1／80）

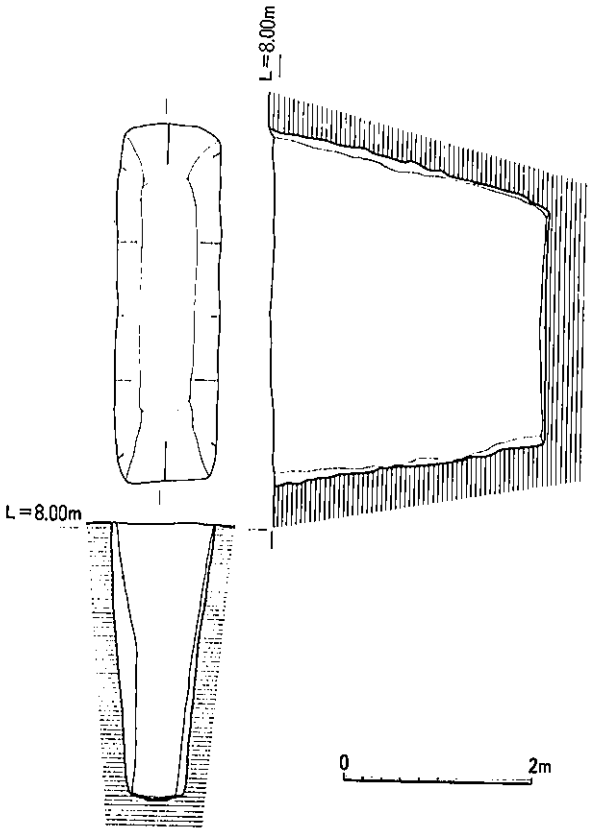


図6　SK57実測図（1／80）

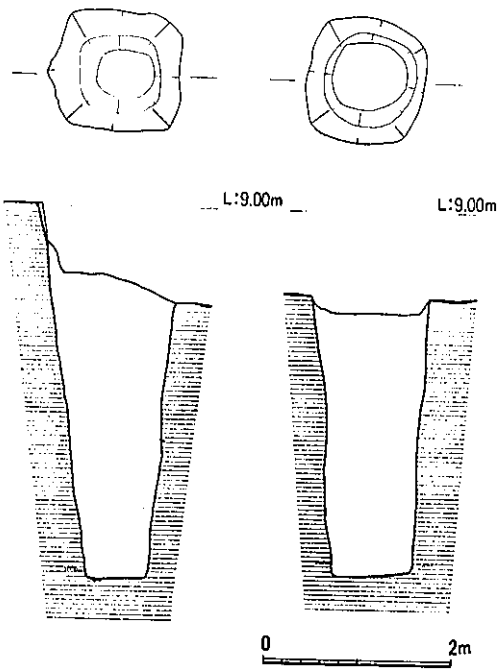


図7　SK69・70実測図（1／80）

vii. 染色後グリセリンゼリーで封入し花粉分析用の標本を作製する。
viii. 検鏡・計数し密度を算出する。

SK-56・61の試料は通常の堆積土であり、岩石・鉱物粒を含むため、vとviの間にフッ化水素酸処理を挟んだ。

2）寄生虫卵分析

結果は、寄生虫卵の有無を表1に示した。寄生虫卵の検出された試料については表2に結果を示した。なお、計数は適量行い、各試料の1cm中の計数率を示した。計数結果は1cm中の含有密度に算出しダイアグラムを作成した。加えて組成比を見るため、相対比率を算出しダイアグラムに示した。

土坑および試料	SK-56						SK-57				SK-61					SK-69	SK-70			
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	1	2	3	4	5		1	2	3	4
Helminth eggs 寄生虫卵	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+

(+：含まれている　-：含まれていない)

表1　寄生虫卵分析における有無

表1に示されるように、SK-57・69・70からは寄生虫卵が検出された。SK-56・61からはまったく寄生虫卵が検出されなかった。SK-57・69・70からは、回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫卵、有・無鉤条虫卵、日本海裂頭条虫卵、マンソン裂頭条虫卵、肝毛頭虫卵の7つの分類群が検出された。回虫卵と鞭虫卵は卵殻のみから人体寄生虫の回虫・鞭虫とは断定できないが、ここでは明らかな人の便所であることと寄生虫卵の組み合わせから人の糞便とみなされるため、人体寄生虫である回虫および鞭虫と断定した。有・無鉤条虫卵とした分類群は、有鉤条虫卵と無鉤条虫卵および単包条虫卵・多包条虫卵は分類できないが、ここでは有・無鉤条虫卵で代表した。

寄生虫卵の含有密度は試料によってばらつきはあるが、多い試料では1cmに80000個以上が含まれている。この含有密度は今まで見つかっているいずれの便所遺構の分析結果より高い。密度の高さは糞便堆積物が上位の堆積物により圧縮されていることが考えられる。また、顕微鏡下では消化残渣が多く含まれるというより、消化残渣で堆積物が構成されているといってもよいものであった。このことからも、SK-57・69・70の堆積物が人の糞便が累積した堆積物だとみなされる。よって、SK-57・69・70が便所遺構である蓋然性が高い。寄生虫卵の含まれていなかったSK-56・61は、消化残渣も認められず、糞便の堆積しいては便所遺構の可能性はないといえる。

寄生虫卵の傾向は、土坑によって異なる。SK-57では、回虫卵・鞭虫卵・肝吸虫卵が多く、横川吸虫卵がやや少なく、有・無鉤条虫卵、日本海裂頭条虫卵、肝毛頭虫卵はきわめて少ない。SK-69とでは、鞭虫卵・肝吸虫卵が多く、横川吸虫卵と有・無鉤条虫卵が出現する。SK-70でも、鞭虫卵・肝吸虫卵が多く、横川吸虫卵と有・無鉤条虫卵が出現する。試料1のみ肝吸虫卵が含まれていない。これは寄生虫卵の含有量が少ないため、傾向があらわれていない可能性がある。

分類群			SK-57				SK-69	SK-70			
学名	和名		1	2	3	4		1	2	3	4
	(1cm3中の計数率)		(1.47%)	(1.56%)	(2.5%)	(1.11%)	(4.76%)	(10%)	(10%)	(3.57%)	(3.7%)
Helminth eggs	寄生虫卵										
Ascaris lumbricoides	回虫	卵殻	490	522	209	277	25		36	181	12
Trichuris trichiura	鞭虫	卵殻	273	279	189	173	601	73	480	858	205
Clonorchis sinensis	肝吸虫	卵殻	458	496	325	176	1015		17	626	196
Metagonimus yokogawai	横川吸虫	卵殻			8	23	152		16	61	2
Taenia	有・無鉤条虫	卵殻	3	3	7		53	11	51	135	12
Diphyllobothrium nihonkaiense	日本海裂頭条虫	卵殻		1							
Spirometra erinacei	マンソン裂頭条虫	卵殻					2		5	1	
Capillaria hepatica	肝毛頭虫	卵殻				1					
Helminth egg?	寄生虫卵?	卵殻				9					
Total	計		1224	1301	738	659	1848	84	605	1862	427
	(1cm3中に算定)		83265	83397	29520	59639	38824	840	6050	52157	11540

表 2　寄生虫卵分析結果

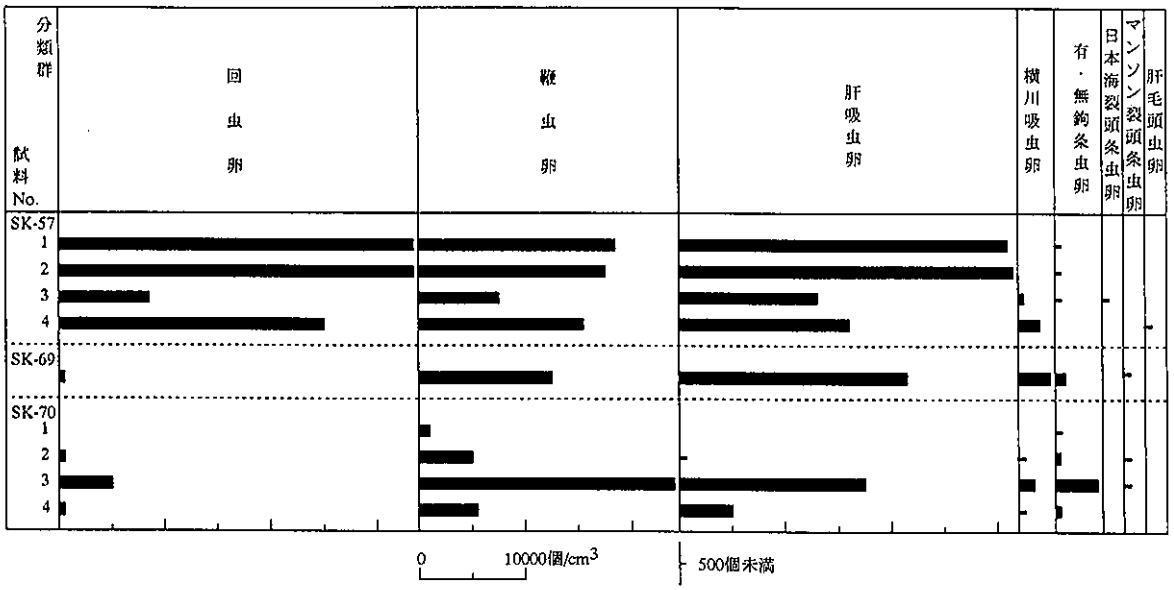


図 8　寄生虫卵出現図

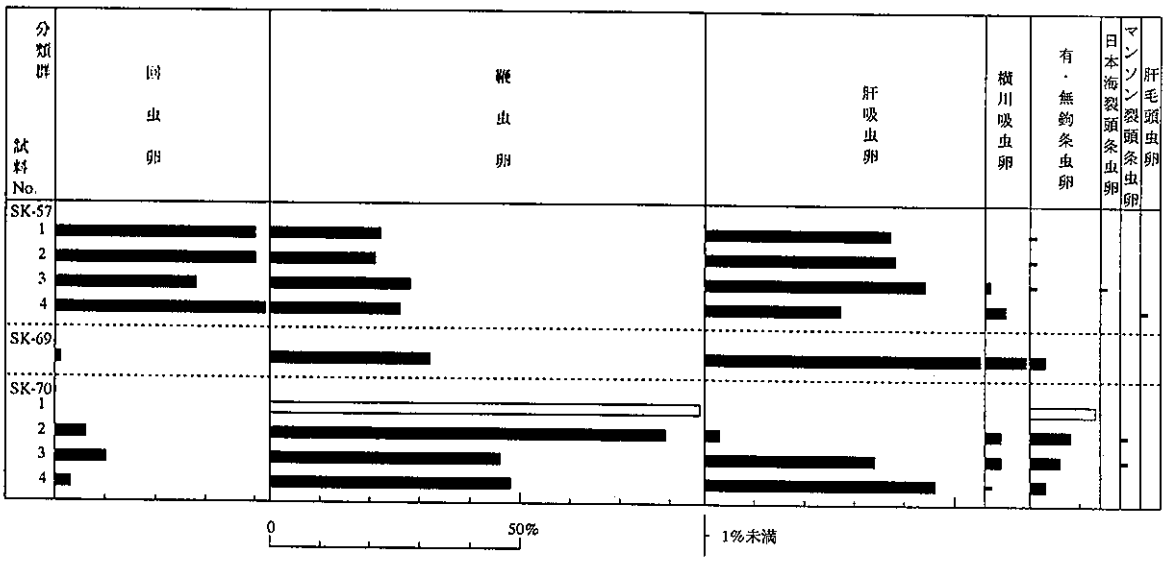


図 9　寄生虫卵組成図

相対比率による組成比でみると、より顕著であり、SK-57では回虫卵・鞭虫卵・肝吸虫卵が主要構成要素であり、SK-69とSK-70では回虫卵が低率で、有・無鉤条虫卵がやや低率ながらも出現するのが特徴的であり、明らかに寄生虫卵の組成に異なりがある。このことは、SK-57とSK-69・SK-70とにおいて、寄生虫の感染要素が異なる、すなわち常食される食物および食生活に差異のあることを示している。

回虫と鞭虫は、寄生虫卵の付着した野菜や野草の生食などの摂食や飲料水による直接的な経口摂取によって感染する。肝吸虫は幼虫がコイ科を主とする淡水魚を第2中間宿主とするため、それらの生食か不完全な調理による摂取によって感染する。横川吸虫はアユ・シラウオなどを第2中間宿主とするため、その生食か不完全な調理による摂取で感染する。有鉤条虫は、ブタ・イノシシを主な中間宿主とし、終宿主である人がその肉や臓器を不完全調理で摂取すると感染する。無鉤条虫卵は、ウシを主な中間宿主とし、終宿主である人がその肉や臓器を不完全調理で摂取すると感染する。日本海裂頭条虫はサケ・マスの仲間の魚類の生食か不完全な調理による摂取から感染する。肝毛頭虫はネズミ起源のものである。

SK-57では回虫・鞭虫・肝吸虫が多く、野菜や野草そしてコイ科の魚を主とする淡水魚の生食か不完全な調理での摂食を常食的に行っていたとみなされる。海産の魚の摂取などは寄生虫卵にほとんど反映されないので不明である。SK-57の寄生虫卵分析結果は、内陸部にある藤原京の便所遺構と類似性があり、近似した食生活をしていたとみなされる。

SK-69・SK-70では、鞭虫・肝吸虫が多く、野菜や野草そしてコイ科の魚を主とする淡水魚の生食か不完全な調理での摂取が常食的になされている。有・無鉤条虫卵がある程度の数量あるいは比率で出現するが、草食動物の摂取によって一過的に排出される可能性のある寄生虫卵が検出されないため、有鉤条虫である可能性が高いとみなされる。よって、SK-69・SK-70では、飼育されたブタないしイノシシを常食的に食べていたことが想定される。このことを鴻臚館が当時の迎賓館的性格であることから、憶測すると、SK-57は藤原京の便所遺構と同じ食生活をしている人々の便所跡であり、SK-69・SK-70は飼育されたブタないしイノシシという肉食を常食的に行う人々の便所跡であったとみなされる。すなわち、SK-69・SK-70は常食的に肉食を食習慣とする外来者専用の便所跡であったとみなせよう。

3）花粉分析

結果は表3・4に示し、その際寄生虫卵と同様に計数率を示した。SK57・69・70については1cmの含有密度を算出しダイアグラムを作成した。検出された分類群は樹木27、樹木と草本を含むもの5、草本22、シダ植物胞子2形態の計56であった。また、SK57・70はシダ植物胞子はまったく検出されなかった。検出された分類群は以下のようである。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、サンショウ属、キハダ属、モチノキ属、ウルシ科、シナノキ属、モクセイ科、カエデ属、ツバキ属、カキ属、ガマズミ属、スイカズラ属、タニウツギ属

〔樹木花粉〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科A、マメ科B、ウコギ科

〔草本花粉〕

マルバオモダカ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、キンポウゲ科、ナデシコ科、アブラナ科、ワレモコウ属、ノブドウ、セリ科、ナス科、オオバコ属、シソ科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

以上の分類でマメ科については、網目模様のやや大きいものをAとし細かいものをBと便宜的にわけたが、花粉が未成熟なものとそうでないものの違いかもしれない。

SK-57・69・70からは、1cm中に10000粒を越える花粉が検出された。これらからは、通常検出される花粉粒のほとんどを占める風媒花の植物の花粉が少なく、やや特殊な種類の花粉が多い。このことと、試料となった堆積物が糞便そのものの堆積物であることから、検出された花粉粒は食物となった植物とともに摂取され排泄されたものとみなされる。

一方、SK-56とSK-61では1cm中にほとんどの試料が1000粒未満であり、風媒花の植物の花粉が多い。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属・スギが多く、草本花粉ではイネ科・ヨモギ属・アカザ科－ヒユ科が多い。周辺地域はマツ属複維管束亜属（アカマツ・クロマツ）やスギなどの樹木が分布し、周囲はイネ科・ヨモギ属・アカザ科－ヒユ科が多く、それらの草本の好む日当たりのよい乾燥地が広がっていた。

SK-57・69・70では、同じ土坑内においても試料によって花粉含有密度が異なり、堆積物の個所によって変異がある。多い試料では65000粒を越す。草本花粉が多く、アブラナ科が最も多く、イネ科・シソ科・ミズアオイ属・キンポウゲ科がやや多い。明らかな食用植物であるイネ属型・ソバ属、その他にワレモコウ属・ナス科・オオバコ属が出現している。樹木と草本を含むウコギ科とマメ科も多い。樹木花粉では、ウルシ科やサンショウ属が出現している。他にクリ－シイ属－マテバシイ属とコナラ属アカガシ亜属が少し多いほかは、低率である。

最も多いアブラナ科そしてイネ属型・ソバ属は栽培植物であり、明らかに食物起源とみなされる。イネ属型とソバ属は穎や果実に付着した花粉が残存したものと推定される。アブラナ科は多くの栽培植物を含み、花粉の出現量も多く現在のアブラナ同様に花芽を含んで食用とされたとみなされよう。ナズナのような野草であったかも知れない。イネ科の花粉も雑穀起源である可能性がある。ミズアオイ属にはミズアオイ(*Monochoria korsakowii* Regel et Maack)とコナギ(*M. vaginalis* Presl)があり現在は食用とされないが、奈良時代の主要野菜の一つである水葱（なぎ）がミズアオイに比定されている（関根、1969)。食用とされた季節も夏から秋でミズアオイ属の開花期が含まれおり、ミズアオイ属の花粉の多出現と矛盾しない。花粉からミズアオイかコナギかは特定できないが、当時はかなり多く食べられていたようだ。シソ科は検出されているエゴマの果実に付着していたのかも知れないが、他に薬用植物となる種もあり断定できない。キンポウゲ科・ワレモコウ属・ナス科・オオバコ属・キク亜科も出現の仕方が不自然で食用や薬用となった花や花芽を含む植物起源であると推定される。

草本花粉に加えて、ウコギ科・マメ科・ウルシ科は不自然に多く、花あるいは花芽や花粉の付着した種実が食用あるいは薬用として摂取されたとみなされる。ウコギ科には木本のタラノキ(*Aralia elata* Seemann)と草本のウド(*A. cordata* Thunb.)が含まれこれらが花芽を含めて食

分類群		SK-57		SK-69	SK-70	
		1	2		2	4
学名	和名 1cm3中の計数率	(1.47%)	(1.56%)	(1.05%)	(4.16%)	(3.70%)
Arboreal pollen	樹木花粉					
Tsuga	ツガ属			1		
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	2	1	7	8	4
Cryptomeria japonica	スギ					
Myrica	ヤマモモ属				2	
Alnus	ハンノキ属			1		
Betula	カバノキ属			1		
Carpinus-Ostrya	クマシデ属ーアサダ	1				
Corylus	ハシバミ属				1	
Castanea-Castanopsis-Pasania	クリーシイ属ーマテバシイ属	7	15	8	11	10
Fagus	ブナ属	2				
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	3	2	1	1	2
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	8	5	7	15	19
Ulmus-Zelkoba serrata	ニレ属ーケヤキ				2	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属ームクノキ			1	7	1
Zanthoxylum	サンショウ属	2	2	4	2	5
Phellodendron	キハダ属			9	16	37
Anacardiaceae	ウルシ科	31	22	36	18	25
Tilia	シナノキ属	1	1	1		
Oleaceae	モクセイ科		1			1
Acer	カエデ属			2		1
Camellia	ツバキ属				1	
Diospyros	カキ属				1	
Viburnum	ガマズミ属			7	9	
Lonicera	スイカズラ属					1
Weigela	タニウツギ属		1			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Ulticaceae	クワ科ーイラクサ科			5		1
Rosaceae	バラ科			1	5	2
Leguminosae A	マメ科 A	44	35	72	28	95
Leguminosae B	マメ科 B	57	32	41	34	50
Araliaceae	ウコギ科	86	89	61	37	63
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Caldesia reniformis	マルバオモダカ		4	12	8	6
Gramineae	イネ科	42	41	30	96	31
Oryza type	イネ属型	10	4	8	16	9
Monochoria	ミズアオイ属	32	22	39	67	28
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節		7	1	6	
Fagopyrum	ソバ属	5	6	9	6	8
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科ーヒユ科	1	1	8	10	7
Ranunculaceae	キンポウゲ科	23	30	47	29	25
Caryophyraceae	ナデシコ科				1	
Cruciferae	アブラナ科	126	71	190	66	51
Sanguisorba	ワレモコウ属	10	8	2	8	14
Ampelopsis brivipedunculata	ノブドウ			1	1	1
Umbelliferae	セリ科	1	1	4	2	4
Solanaceae	ナス科	9	4	23	17	8
Plantago	オオバコ属	7	8	1		
Labiatae	シソ科	28	15	18	9	17
Valerianaceae	オミナエシ科					3
Lactucoideae	タンポポ亜科	3	1	5	5	3
Asteroideae	キク亜科	7	7	29	10	29
Xanthium	オナモミ属				6	5
Artemisia	ヨモギ属	4	4	2	7	5
Fern spore	シダ植物胞子			2		
Arboreal pollen	樹木花粉	57	50	85	94	106
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	187	156	180	104	211
Nonarboreal pollen	草本花粉	308	234	429	370	254
Total pollen	花粉総数	552	440	694	568	571
	(1cm3中に算定)	37551	28205	66095	13654	15432
Unknown pollen	未同定花粉	8	7	8	8	7

表 3　花粉分析結果(1)

分類群		(1/10m3中)	SK-56						SK-61				
学名	和名		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5
Arboreal pollen	木本花粉												
Podocarpus	マキ属		1	1	1								
Abies	モミ属			1									
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属		3	3			3	3	4	14		13	2
Cryptomeria japonica	スギ		16	14		3	3			6	4	15	4
Taxaceae-Cephalotaxaxeae -Cupressaceae	イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科			1						1			
Betula	カバノキ属											1	
Corylus	ハシバミ属									1			
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属ーアサダ			3						1			
Castanea crenata-Castanopsis	クリーシイ属			4			2					3	
Fagus	ブナ属											1	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属								1			4	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属		2				7		2				
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属ームクノキ		1				1		3	1	1	13	1
Ilex	モチノキ属											1	
Oleaceae	モクセイ科			1								3	
Arboreal・Nonarboreal pollen	木本・草本花粉												
Leguminosae	マメ科A						3						
Nonarboreal pollen	草本花粉												
Gramineae	イネ科		6	36	1	4	6	4	2	9	3	6	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科		3	1	2		1						
Monochoria	ミズアオイ属			1									
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科ーヒユ科		5	4	6	1	2			2			1
Caryophyllaceae	ナデシコ科												1
Cruciferae	アブラナ科		8	6	6	2	1						
Umbelliferae	セリ科					3							
Solanaceae	ナス科		1										
Xanthium	オナモミ属			2									
Lactucoideae	タンポポ亜科		3			1	2	1				3	
Asteroideae	キク亜科											1	
Artemisia	ヨモギ属		42	36	13	14	17	3		2	3	2	3
Fern spore	シダ植物胞子		8	9	2		9				1		
Arboreal pollen	樹木花粉		23	28	1	3	16	3	10	24	5	54	7
Arboreal・Nonarboreal pollen	木本・草本花粉		0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉		68	86	28	25	29	8	2	13	6	12	6
Total pollen	花粉総数		91	114	29	28	48	11	12	37	11	66	13
		(1cm3中に算定)	910	1140	290	280	480	110	120	370	110	660	130
Unknown pollen	未同定花粉		0	0	0	1	0	1	0	8	0	15	0

表 4　花粉分析結果(2)

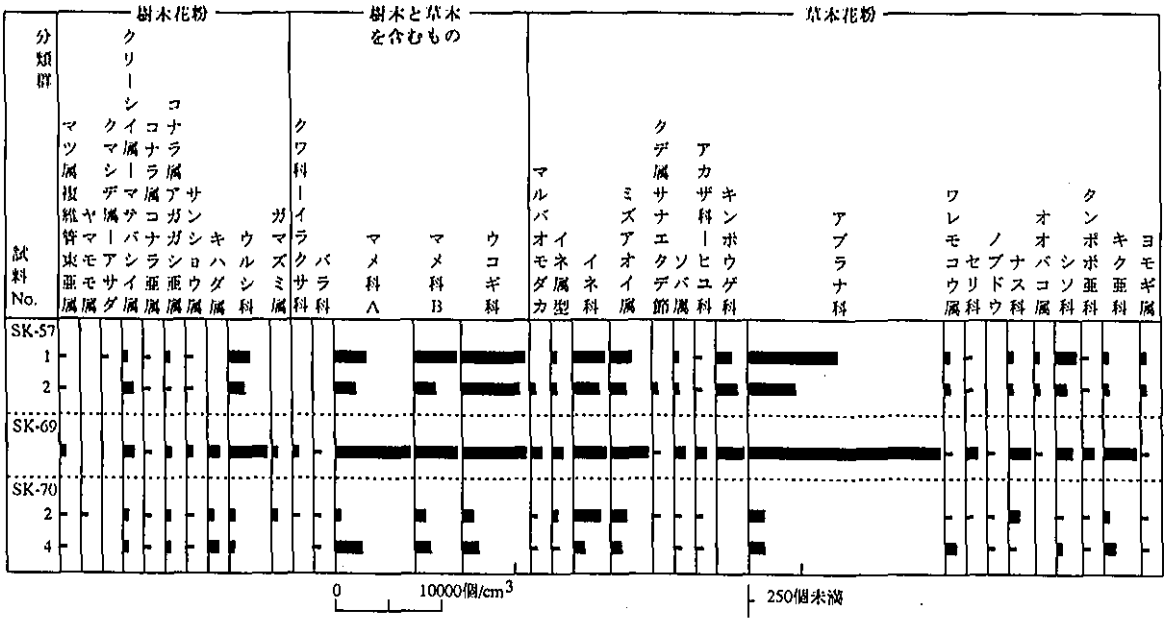


図10　鴻臚館土坑における花粉組成図

べられたと推定される。マメ科の花粉は細分は難しいが、ハギ属(Lespedeza)に最も類似し、食用となったものだろう。ウルシ科の花粉は食用あるいは薬用となるヌルデ(*Rhus javanica L.* var. *roxburghii* Rehder et Wils)やチャンチンモドキ(*Chaerospondias axillaris* Burtt et Hill)の種実に起因する可能性があるが不明である。

4．種実同定

1）方法

種実同定は試料量の多いSK-57で行った。試料1は堆積物2000ccを5㎜の篩でわけ大きな種実を抽出した。その際ウリ類は対象外とし、くっついてきた小さな種実は計数した。試料2-1～5は堆積物200cc毎にを0.25㎜篩で水洗し、その残渣を双眼実体顕微鏡によって観察しながら同定計数した。よって、試料1は試料2000cc中の5㎜以上の種実であり、試料2-1～5は計1000cc中の0.25㎜以上の種実である。

2）結果と所見

同定の結果、樹木11、草本11の計22分類群の種実が同定された。他にザクロに類似の種子があったが同定には至らなかった。結果は一覧表に示し、以下に検出された分類群とその特徴および観察結果を記す。〔樹木〕

a. チョウセンゴヨウ　*Pinus koraiensis* Sieb. et Zucc.　種子　マツ科

黒褐色で倒卵形を呈し、表面には微細で不規則で不鮮明な凹凸をもつ。種皮は堅く厚い。長さ14.1㎜、幅8.8㎜ほど。チョウセンゴヨウは本州・四国および朝鮮・中国東北・ウスリーの亜高山帯（亜寒帯）に分布し、本遺跡の周辺には産しない。朝鮮半島からもたらされた可能性が高い。チョウセンゴヨウないしゴヨウマツ類の種子は藤原宮や上之宮遺跡などの6～8世紀の宮跡からの出土例がある。

b. ヤマモモ　*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.　核（内果皮）　ヤマモモ科

黄褐色で両凸レンズ状偏平楕円形を呈し、表面には維管束とみられる繊維状物質が密に残る。内果皮は堅く厚い。長さ8.3㎜、幅6.7㎜。長さ7.5㎜、幅5.4㎜。

c. クワ属　*Morus*　種子　クワ科

黄褐色で三角状楕円形を呈し、基部に爪状の突起をもつ。長さ2.6㎜、幅1.3㎜前後。

d. キチゴ属　*Rubus*　核（内果皮）　バラ科

淡褐色～黄褐色で腎形を呈し、表面には網目状の隆起をもつ。長さ2.4～2.8㎜、幅1.1～1.8㎜。

e. サンショウ　*Zanthoxylum piperitum* DC.　種子　ミカン科

黒色で楕円状球形を呈する。表面には微細な網目状構造をもつ。下端の側面に臍があり、その部分はくぼむ。長さ3.4㎜、幅2.7㎜。長さ3.9㎜、幅3.1㎜。

f. クロガネモチ　*Ilex rotunda* Thunb.　種子　モチノキ科

茶褐色の細長い三角状半円形を呈し、背面には2本の溝が走る。長さ5.2㎜、幅1.6㎜前後。

g. ナツメ　*Zizyphus jujuba* Mill.　核（内果皮）　クロウメモドキ科

黒褐色～茶褐色で両端がとがる楕円状長楕円形を呈し、表面には縦方向に不規則な皺状隆起がある。長さ11.4㎜、幅4.6㎜。ナツメは中国北部原産で日本でも古くから栽培されていたとみられている。藤原宮や上之宮遺跡などの6～8世紀の宮跡からの出土例がある。

h. ツタ　*Parthenocissus tricuspidata* Planch.　種子　ブドウ科

黒灰色で一端がとがる倒卵状楕円形を呈する。腹面の中央には一本の稜が走り、背面には楕円形の先端をもつカラザがある。長さ4.1㎜、幅3.0㎜。

i. シマサルナシ　*Actinidia rufa* Planch. ex Miq.　種子　マタタビ科

黒褐色～褐色で楕円状長楕円形を呈し、表面には明瞭な凹凸をもつ網目状構造がある。長さ2.1～2.5㎜、幅1.2～1.5㎜。

j. カキノキ属　種子　カキノキ科

黒色～茶褐色で広線状楕円形を呈し、表面には光沢がある。長さ14.1㎜、幅7.8㎜。

k. ガマズミ属　*Viburunum*　核（内果皮）　スイカズラ科

茶褐色で楕円形を呈し、断面は偏平である。下端に臍があり、両面に浅く鈍い溝が走る。長さ5.1㎜、幅4.3㎜。

分類群			試料						
学名	和名	部位	1	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	計
arbor	樹木								
Pinus koraiensis Sieb. et Zucc.	チョウセンゴヨウ	種子	4			2		1	7
Myrica rubra Sieb. et Zucc.	ヤマモモ	核			1		1	1	3
Morus	クワ属	種子	1	1					2
Actinida rufa Planch. ex Miq.	シマサルナシ	種子		13	9	5	2	8	37
Rubus	キイチゴ属	核			3	3	4	3	13
Zanthoxylum piperitum DC.	サンショウ	種子			1	1			2
Ilex rotunda Thunb.	クロガネモチ	種子		1					1
Zizyphus jujuba Mill.	ナツメ	種子	3						3
Parthenocissus tricuspidata Planch.	ツタ	種子		1		1			2
Diospyros	カキノキ属	種子	1		1	1			3
Viburnum	ガマズミ属	核	1						1
Punica granatum L.	ザクロ？	種子			1				1
herb	草本								
Millet?	雑穀?	果実	3						3
Gramineae	イネ科	果実	1		2				3
Scirpus	ホタルイ属	果実		2	2	2	1		7
Polygonum	タデ属	果実			1	2			3
Polygonaceae	タデ科	果実		4	1	2	1	5	13
Cruciferae	アブラナ科	種子			1				1
Sesamum indicum L.	ゴマ	種子		2	1				3
Perilla frutescena Britton var. japonica Hara	エゴマ	果実		2	2	1	1	3	9
		破片			2				2
Solanum melongera L.	ナス	種子		24	15	7	10	18	74
		破片				1		7	8
Solanaceae	ナス科	種子		2	3	1	1		7
Cucumis melo L.	ウリ類	種子		62	69	71	37	85	324
		半形		8	4	7	12	14	45
		破片		15	13	2	9	3	42
Total	計		14	137	132	109	79	148	619

（試料1は5mm篩で2000cc、試料2-1～5は0.25mm篩で200cc）

表5　土坑SK-57における種実同定結果

〔草本〕

l. イネ科（雑穀？）　Gramineae(Millet?)　穎　イネ科

黄褐色～黒褐色で一端がとがる楕円形を呈し、表面には光沢がある。長さ2.7㎜、幅2.2㎜。長さ3.2㎜、幅2.1㎜。長さ3.0㎜、幅1.8㎜。

イネ科植物には多くの栽培種があり、今回産出したものは形態的にアワやヒエなどの雑穀類に類似する。しかし、外形から栽培種であるか野生種であるかを識別することは困難であり、表面の細胞を落射顕微鏡で観察したが、同定には至らなかった。

m. ホタルイ属　*Scirpus*　果実　カヤツリグサ科

黒色で平凸レンズ状広倒卵形を呈し、表面には光沢がある。横方向に微細な隆起が走る。果実の基部には針状の付属物がある。長さ2.2㎜、幅1.8㎜前後。

n. タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

黒色で三角状倒卵形を呈し、表面には微細な網目状構造がある。長さ2.6㎜、幅1.8㎜前後。

o. タデ科　*Polygonaceae*　果実　タデ科

黒色で両凸レンズ状倒卵形を呈し、下端に果柄がある。表面には微細な網目状構造をもつ。長さ3.1～3.4㎜、幅1.7～1.8㎜。

p. エゴマ　*Perilla frutescens* Britton var. *japonica* Hara　果実　シソ科

黒褐色～灰褐色で偏平球形を呈し、下端に臍がある。表面には大きな網目状構造をもつ。径2.1～2.7㎜。シソ属は類似した形態をもつが、検出した果実は2㎜以上の大きさがあり、エゴマと同定した。

q. ナス　*Solanum melongena* L.　種子　ナス科

茶褐色～黄褐色で偏平円形を呈し、一端にくぼみがある。表面は不規則で微細な網目状構造である。長さ3.6～3.9㎜、幅2.9～3.1㎜。大きさが3.0㎜以上と大きく、現生ナスの種子を酸処理したら網状構造が一致したので、ナスと同定した。

r. ナス科　*Solanaceae*　種子　ナス科

黄褐色で偏平円形を呈する。表面には不規則で微細な網目状構造がある。長さ1.5㎜、幅1.2㎜。

s. ゴマ　*Sesamum indicum* L.　種子　ゴマ科

茶褐色～黄褐色で一端がとがる偏平な卵形を呈し、表面には微細な網目状構造がある。長さ2.8～3.1㎜、幅1.7～1.8㎜。ゴマの検出は明らかなものとしては最古の例となる。

t. ウリ類　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

淡褐色～黄褐色。偏平狭卵形で、上端には「ハ」字状のくぼみがある。長さ10.1㎜、幅4.3㎜。長さ9.2㎜、幅4.0㎜。長さ8.0㎜、幅3.9㎜。

ウリ類にはシロウリやモモルディカメロンなど多くの栽培品種がある。本遺跡で検出した種子は長さが7.0～8.0㎜程度のものが多く、藤下(1982など)の基準によると6.1～8.0㎜の中粒種子（マクワ・シロウリ型）である。又、長さが8.1㎜以上の大粒に属する種子（モモルディカ型）にあたる個体も検出されており、中には10.0㎜に達するものもある。

検出数ではウリ類が最も多く、ナス、シマサルナシ、キイチゴ属とつづく。可食種実はチョウセンゴヨウ・ヤマモモ・クワ属・シマサルナシ・キイチゴ属・サンショウ・ナツメ・カキノキ属・ガマズミ属・雑穀？・ゴマ・エゴマ・ナス・ウリ類であり、検出した22分類群中14にものぼり過半である。また、検出数でみるとその90％以上にあたる。雑草はカヤツリグサ科やタデ

科などわずかである。数量の多いウリ類や各試料とも出現するシマサルナシ・キイチゴ属・ナスはかなり普遍的に食べられていたとみなせる。シマサルナシは同属のマタタビが現在でも塩漬けしたものが市販されている地域もあり、当時も漬け物であったのかも知れない。他の可食種実は特に木本の種実は、果物として食用ともなるが、薬用ともなるものでもあり、薬用として摂取された可能性のほうが高いと思われる。ゴマ・エゴマも通常油をとるが、ここでは種実のまま食用か薬用として摂取されている。サンショウは香辛料か薬用として摂取された可能性が強い。また、本遺跡の周辺地域に産しないチョウセンゴヨウや渡来植物であるナツメは、現在知られる類例としては藤原宮や上之宮遺跡などの6～8世紀の宮跡からの出土ばかりであり、鴻臚館の特殊性をうかがわせる。なお、以前に便所遺構から種実がたくさん検出されることより、当時は種子ごと果実を食べていたと指摘したことがあったが、薬用ということを考慮すると、種子や核も摂取対象となっていたために起因する可能性がある。

5．まとめ

1）鴻臚館跡のSK-56・57・61・69・70の堆積物の寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定を行った。

2）寄生虫卵分析では、SK-57・69・70から高密度の寄生虫卵が検出され、糞便の累積と認められ、これらの土坑も便所遺構である蓋然性が高い。

3）SK-57・69・70の寄生虫卵分析では、鞭虫卵・肝吸虫卵が多かった。このことから野菜や野草そしてコイ科の魚を主とする淡水魚の生食か不完全な調理での摂取が常食的になされている。

4）SK-57では回虫卵も多く、藤原京の便所遺構のデータと傾向が同じで、同様の食生活をする人々の糞便ないし便所跡である。

5）SK-69・SK-70では、有・無鉤条虫卵がある程度の数量あるいは比率で出現し、それは有鉤条虫である可能性が高い。SK-69・SK-70は、飼育されたブタないしイノシシを常食的に食べていた人々の糞便の累積ないし便所跡であると考えられる。鴻臚館が当時の迎賓館的性格であることを考慮し憶測すると、SK-69・SK-70は飼育されたブタないしイノシシという肉食を常食的に行う食習慣のある外来者専用の便所跡で可能性が指摘される。

6）花粉分析結果では摂取され排泄された花粉が明らかに反映される。ウルシ科、マメ科A・B、ウコギ科、アブラナ科、ミズアオイ属、シソ属は検出数が多く、花ないし花芽含む植物および花粉の付着した種実を食用するか薬用として摂取されていた。他にサンショウ属、ソバ属、キンポウゲ科、ワレモコウ属、ナス科、オオバコ属は同様に食用ないし薬用とされていた。

7）種実同定ではウリ類がきわめて多く、ナス、シマサルナシとつづき、可食植物が種実総数の90%以上を占める。これらのほかに、チョウセンゴヨウ、ヤマモモ、クワ属、キイチゴ属、サンショウ、ナツメ、カキノキ属、ガマズミ属、ザクロ？、雑穀？、ゴマ、エゴマ、ナスの種実が食用あるいは薬用として摂取されていた。

4）特に本遺跡の周辺地域に産しないチョウセンゴヨウや渡来植物であるナツメの種実の検出は、藤原宮や上之宮遺跡などの6～8世紀の宮跡からの出土が知られており、鴻臚館の特殊性をうかがわせる。

5）以上からみて、鴻臚館跡では、デンプン質食品、魚介類ないし肉類、油脂類、淡色野菜ないし果実類、緑黄色野菜などの基礎食品群がまんべんなく摂食されていたと考えられ、人に必要な栄養素がバランスよく摂取されていたようだ。

6）本遺跡の便所遺構における分析は、今まで知られていない食生活の直接的な資料を多く抽

出することができ、可食植物については食用のみならず、薬用となる有用植物も植物遺体から直接的に探れることが明らかになった。これは便所遺構から検出された植物遺体が明らかに摂取され排泄されたことに起因する。本遺跡はいまだ数少ない便所遺構における分析の好例となる。

〔寄生虫卵〕		〔推定される食物および部位など〕	
回虫 鞭虫		……野菜・野草の生食か不完全調理による摂取	
肝吸虫		……コイ科の魚の生食か不完全調理による摂取	
有・(無)鉤条虫(SK-69・70のみ)		…ブタ・イノシシの不完全調理による摂取	
	〔種 実〕(SK-57のみ)		
	チョウセンゴヨウ	・・チョウセンゴヨウ種子	薬用
	ヤマモモ	……ヤマモモ果実	薬用？
	クワ属	……クワ属果実	
	シマサルナシ	……シマサルナシ果実	漬物？
〔花 粉〕	キイチゴ属	……キイチゴ属果実	
サンショウ属	サンショウ	……サンショウ果実・種子	
ウルシ科		……ヌルデ・チャンチンモドキか？	
	ナツメ	……ナツメ果実	薬用
	カキノキ属	……カキノキ属果実	薬用
	ガマズミ属	……ガマズミ属果実	
	ザクロ？	……ザクロ果実？	
マメ科A・B		……ハギ属の芽・葉？	食用？薬用？
ウコギ科		……タラノキ・ウドの芽	
イネ属型		……コメ	
イネ科	雑穀？	……雑穀類？	
ミズアオイ属		……ミズアオイかコナギ	野菜
ソバ属		……ソバ果実	全草薬用？
キンポウゲ科		……野菜になるものあり	薬用？
アブラナ科		……アブラナ科	野菜
ワレモコウ属		……ワレモコウ	薬用？
	ゴマ	……ゴマ種子	薬用もか？
シソ科	エゴマ	……エゴマ果実	薬用もか？
ナス科	ナス	……ナス果実、食用	薬用？
オオバコ属		……オオバコ全草	薬用
		モモルディカメロン	

表6 鴻臚館跡の土坑(便所遺構)の寄生虫卵・花粉・種実からみた食物

参考文献

金原正明・金原正子「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構』奈良国立文化財研究所 1992年

金原正明・金原正子「史跡松江城二ノ丸番所跡SK-04内堆積土の分析」『史跡松江城調査報告書』松江市教育委員会 1993年

金子清俊・谷口博一『新版 臨床検査講座 8 医動物学』医歯薬出版 1987年

関根真隆『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館 1969年

粉川昭平「藤原宮出土植物種子について」『藤原宮跡昭和43年度調査概要』奈良県教育委員会 1969年

金原正明・粉川昭平「上之宮遺跡第5次調査出土植物遺体の検討」『奈良県桜井市阿部丘陵遺跡群』桜井市教育委員会 1989年

藤下典之「菜畑遺跡から出土したメロン仲間*Cucumis melo* L.とヒョウタン仲間*Lagenaria siceraria* Standl.の種子について」『唐津市文化財調査報告第5集菜畑遺跡』唐津市教育委員会 1982年

木村康一・木村孟淳『原色日本薬用植物図鑑』保育者 1964年

(1) 第5次調査全景(南から)

(2) 土坑SK57(南から)

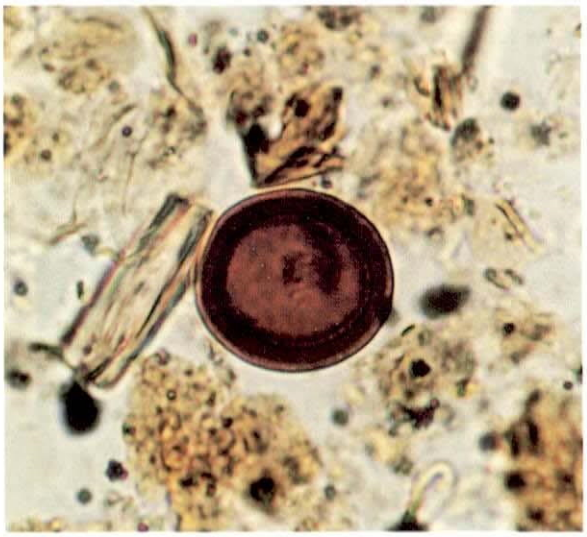
(3) 土坑SK69(南から)

(4) 土坑SK70(南から)

図版2

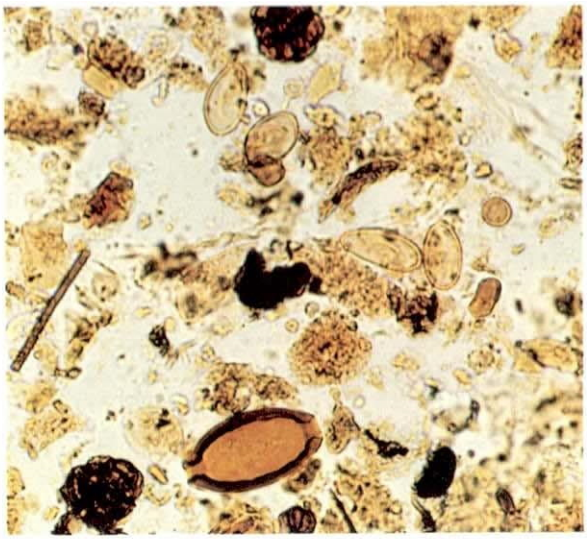
(1) 有・無鉤条虫卵(SK69)

(2) 有・無鉤条虫卵(SK70)

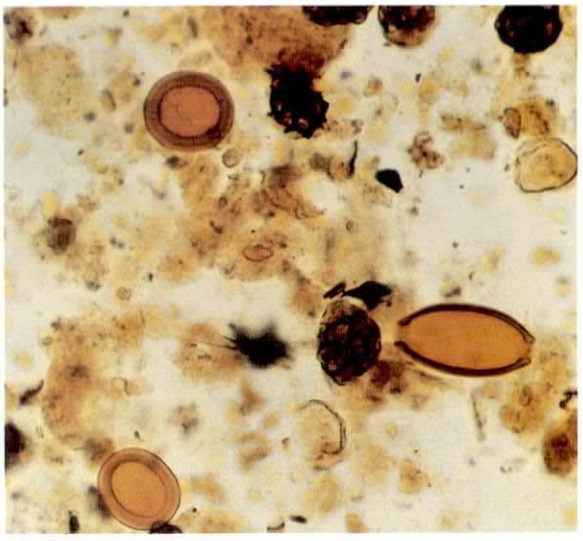


(3) 有・無鉤条虫卵(SK69)

(4) 有・無鉤条虫卵(SK70) ——— 30μm



(5) SK69出土寄生虫卵



(6) SK70出土寄生虫卵 ——— 80μm

SK69(1・3・5), SK70(2・4・6)出土寄生虫卵

(1) 回虫不受精卵

(2) 回虫受精卵

(3) 有・無鉤条虫卵

(4) 鞭虫卵

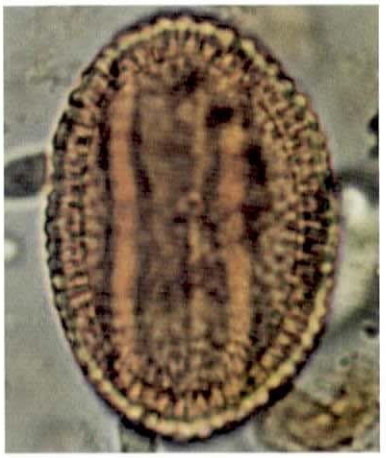
30μm

SK57出土寄生虫卵

図版4

(5) 肝吸虫卵

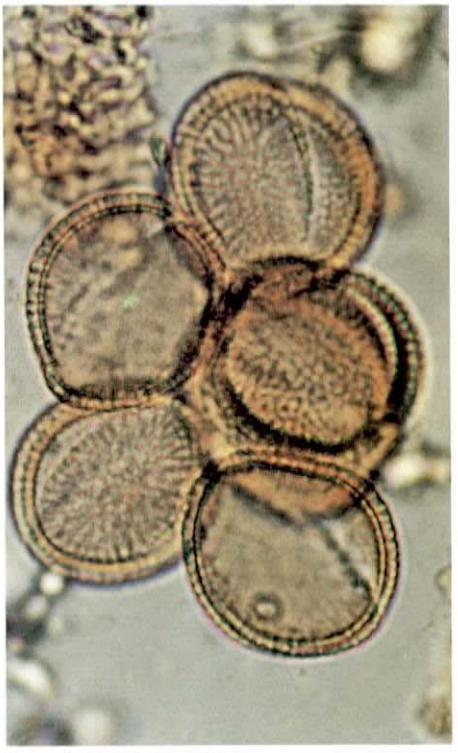
(6) 肝吸虫卵



(7) ソバ属

(8) 横川吸虫卵

(9) ソバ属



(10) アブラナ科　集塊

(11) マメ科　A

(12) マメ科　A

(13) マメ科　B

(14) マメ科　B

30 μ m

SK57出土寄生虫卵・花粉

(15) ウコギ科

(16) ミズアオイ属

(17) ウルシ属

(18) セリ科

(19) シソ科

(20) オオバコ属

(21) ワレモコウ属

(22) キンポウゲ科

(23) キンポウゲ科

30 μ m

SK57出土花粉

図版6

(1) チョウセンゴヨウ　種子 —— 2mm

(2) チョウセンゴヨウ　種子 —— 2mm

(3) ヤマモモ　核 —— 2mm

(4) キイチゴ属　核 —— 0.5mm

(5) キイチゴ属　核 —— 0.5mm

(6) ヤマモモ　核 —— 2mm

(7) サンショウ　種子 —— 1mm

(8) サンショウ　種子 —— 1mm

(9) サンショウ　種子 —— 1mm

SK57出土種実

(10) クワ属　種子　0.5mm

(11) ナツメ　核　2mm

(12) ナツメ　核　2mm

(13) ツタ　種子　0.5mm

(14) ツタ　種子　0.5mm

(15) シマサルナシ　種子　0.5mm

(16) カキノキ属　種子　3mm

(17) カキノキ属　種子　3mm

(18) シマサルナシ　種子　0.5mm

SK57出土種実

図版8

⑲ クロガネモチ　種子 ——— 1mm

⑳ ガマズミ属　核 ——— 1mm

㉑ ガマズミ属　核 ——— 1mm

㉒ イネ科(雑穀？)　穎 ——— 0.5mm

㉓ イネ科(雑穀？)　穎 ——— 0.5mm

㉔ イネ科(雑穀？)　穎 ——— 0.5mm

㉕ イネ科(雑穀？)　穎 ——— 0.5mm

㉖ イネ科(雑穀？)　穎 ——— 0.5mm

㉗ ホタルイ属果実 ——— 0.5mm

SK57出土種実

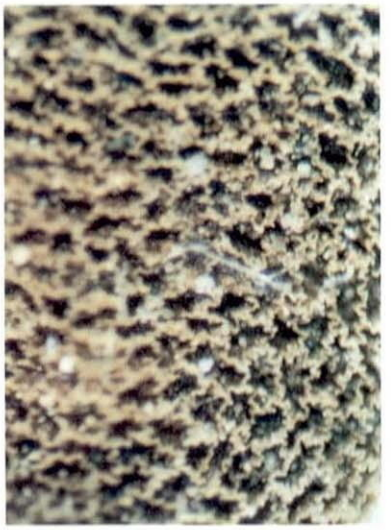
(28) タデ属　果実　0.5mm

(29) タデ科　果実　0.5mm

(30) タデ科　果実　0.5mm

(31) ナス　種子　0.5mm

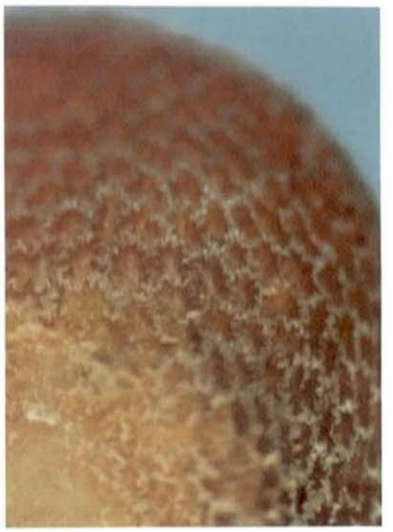
(32) ナス　種子　0.5mm



(33) ナス　種子　0.2mm

(34) エゴマ　果実　0.5mm

(35) エゴマ　果実　0.5mm



(36) 現生ナス　種子　0.2mm

SK57出土種実

図版10

(37) ナス科　種子　0.5mm

(38) ゴマ　種子　0.5mm

(39) ゴマ　種子　0.5mm

(40) ウリ類　種子　2mm

(41) ウリ類　種子　2mm

(42) ウリ類　種子　2mm

(43) 糞便塊　10mm

(44) 糞便塊　10mm

(45) 糞便塊　10mm

SK57出土種実、糞便塊

鴻臚館跡出土瓦の蛍光X線分析

奈良教育大学　三辻利一

1）はじめに

全国各地の窯跡出土須恵器および花崗岩類の分析データから、長石類に由来するとみられるK(カリウム)、Ca(カルシウム)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)の4因子が有効に地域差を表示することが判明した。勿論、地域差を表示する因子は他にもあるが、全国各地の須恵器窯を組織的に分類する上にはこれら4因子に勝るものはない。とくに、Rb-Sr分布図は定性的ではあるが、各地の須恵器の化学特性を効果的に表示する。そして、この図上で遺跡出土須恵器を窯跡出土須恵器に対応させることによって、定性的に産地を探ることは可能である。現在、この操作は判別分析法という統計的手法を導入することによって定量化されている。こうして、窯跡が残っている須恵器を中心に産地推定法が出来上がってきた。

当然、この方法は窯跡が残っている他の土器類、例えば、瓦、一部の埴輪、中世陶器などにも適用できる。ただ、瓦については、もっと窯跡があってもよいと思われるにもかかわらず、それ程多く窯跡は見つけられていない。今後、まだ、多くの窯跡が発見されると予想されるので、本報告では判別分析は使用せず、Rb-Sr分布図、K-Ca分布図上で鴻臚館跡出土瓦の化学特性を把握するとともに、同型式の軒先瓦である鴻臚館式軒先瓦が出土している大宰府政庁(太宰府市)、浜口廃寺(遠賀郡芦屋町)、墓ノ尾窯跡(遠賀郡岡垣町)資料との分析比較を併せて報告する。

2）分析法

瓦片資料はすべて、表面を研磨して付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で、100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、約15トンの圧力を加えてプレスし、内径20㎜、厚さ3～5㎜の錠剤試料を作成し、蛍光X線分析を行った。

蛍光X線分析には理学電線製の全自動式波長分散型のスペクトロメーター、3270型機を使用した。

分析値は同時に測定された岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化された値で表示された。日本地質調査所から配布されているいくつかの岩石標準試料を分析し、JG-1による標準化値と%やppmで表示された報告値の間には、ほぼ、直線性があることが確認された。

3）分析結果

鴻臚館資料の分析値はTab.1にまとめられている。Rb、Sr、K、Caの生データを使って、それぞれ、Rb-Sr分布図、K-Ca分布図を作成し、鴻臚館跡出土瓦の化学特性を把握するとともに、大宰府政庁跡などの他の遺跡から出土した同型式の軒平瓦の胎土と比較してみた。

Fig. 1 には鴻臚館跡出土の軒先瓦のRb-Sr分布図を示す。各資料はほとんど完全に重複して分布しており、同じ胎土であることを示している。つまり、同じところで作られたことを示唆している。そして、これらの瓦をほとんど包含するようにして、鴻臚館跡領域をとってみた。勿論、この領域は定性的な意味しかもたないが、異なる胎土をもつ瓦と比較する上には十分役に立つ。この鴻臚館領域は、牛頸窯群の須恵器が分布する領域にほぼ対応しており、これらの瓦は牛頸窯群内で作られた可能性が大きい。

Fig. 2 には鴻臚館跡出土の軒先瓦のK-Ca分布図を示す。やはり、資料に無関係によくまとまって分布し、鴻臚館跡領域を形成する。

これで、鴻臚館跡出土瓦の化学特性はほぼ、把握できた。鴻臚館式軒先瓦の他遺跡出土資料との比較するには、ここで得られた鴻臚館領域と比較すればよい。これらの中に鴻臚館領域に対応するものがあれば、鴻臚館所用瓦と同じ生産地の可能性がある訳であり、対応しなければ、別の生産地の可能性がある訳である。

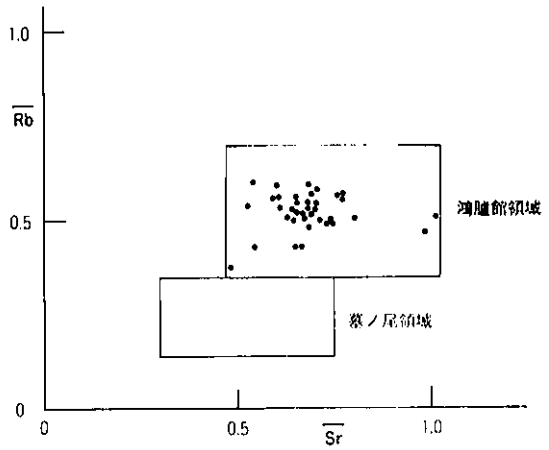


Fig. 1　鴻臚館出土瓦Rb-Sr分布図

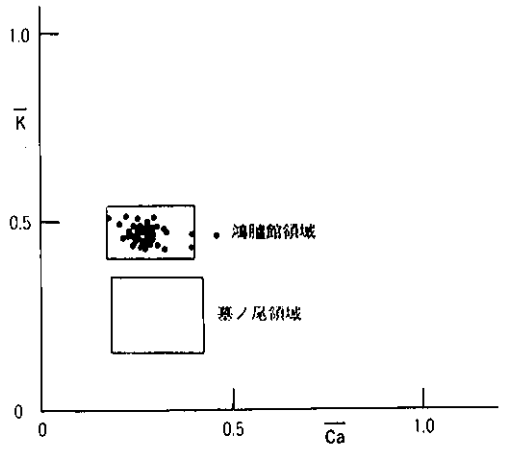


Fig. 2　鴻臚館出土瓦K-Ca分布図

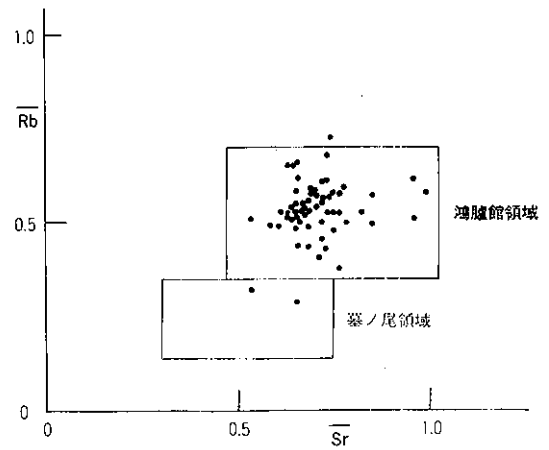


Fig. 3　大宰府政庁出土瓦Rb-Sr分布図

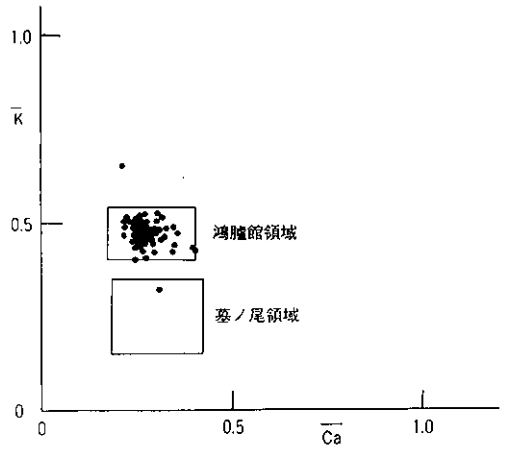


Fig. 4　大宰府政庁出土瓦K-Ca分布図

では次に、他の遺跡出土瓦をみてみよう。

大宰府政庁跡から出土した瓦のRb-Sr分布図をFig. 3、K-Ca分布図をFig. 4 に示す。大部分の瓦は鴻臚館領域に分布する。今回の分析データでは大宰府政庁の瓦は大部分が牛頸窯群内で製作されたものである可能性が高いことを示している。

墓ノ尾窯跡から出土した瓦のRb-Sr分布図をFig. 5、K-Ca分布図をFig. 6 に示す。ほとんどの瓦が鴻臚館領域とは異なる集まりを示している。これを墓ノ尾領域としておく。

浜口廃寺から出土した瓦のRb-Sr分布図を図 7、K-Ca分布図をFig. 8 に示す。過半数は墓ノ尾領域に分布するが、一部には墓ノ尾領域にも、鴻臚館領域にも分布しないものがあることがわかる。

墓ノ尾窯跡北から出土した瓦のRb-Sr分布図をFig. 9、K-Ca分布図をFig.10に示す。

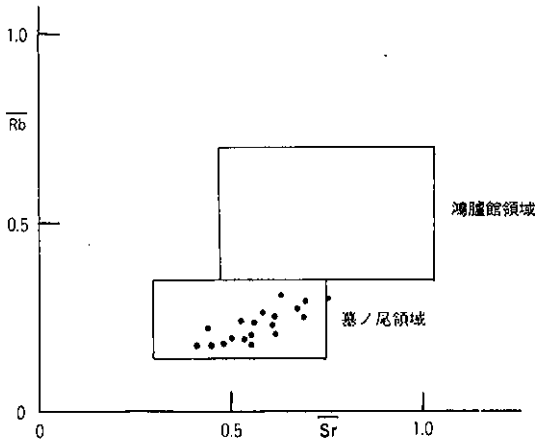


Fig. 5　墓ノ尾窯出土瓦Rb-Sr分布図

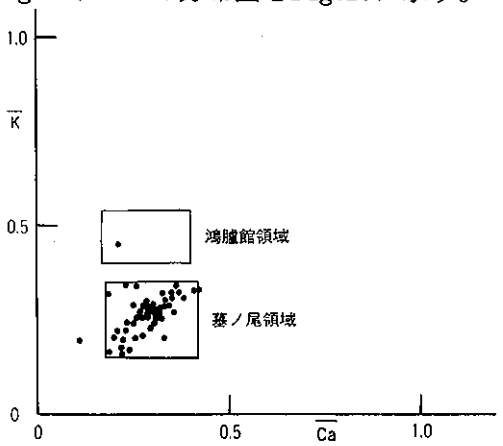


Fig. 6　墓ノ尾窯出土瓦K-Ca分布図

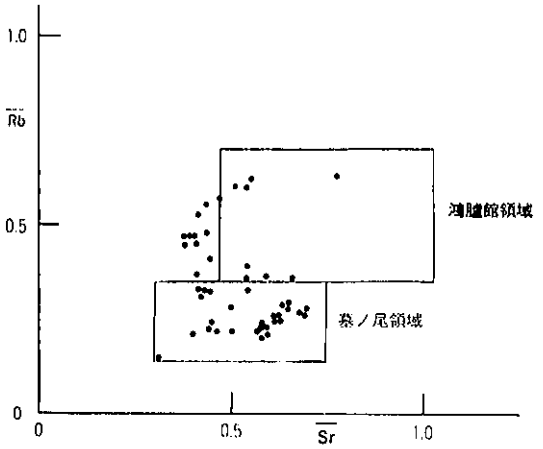


Fig. 7　浜口廃寺出土瓦Rb-Sr分布図

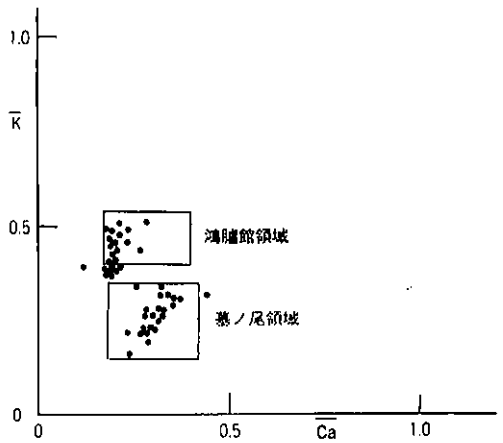


Fig. 8　浜口廃寺出土瓦K-Ca分布図

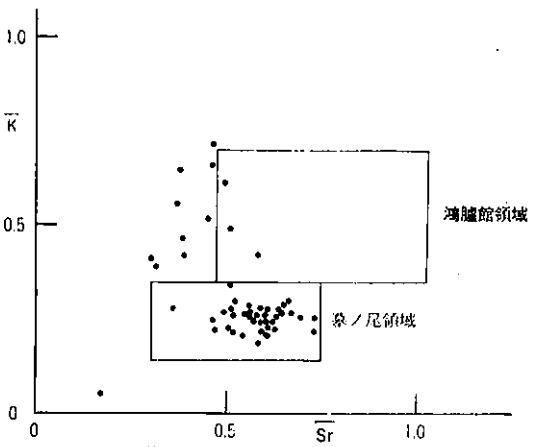


Fig. 9　墓ノ尾窯北出土瓦Rb-Sr分布図

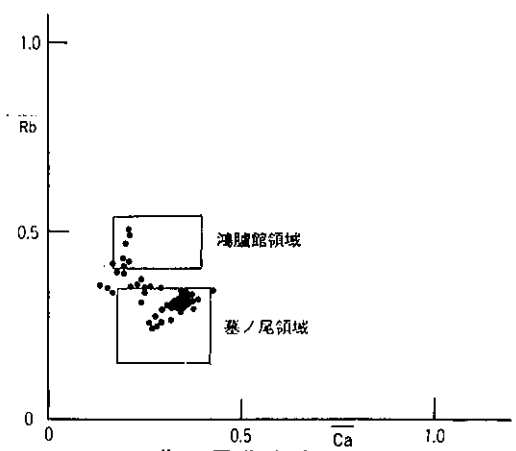


Fig.10　墓ノ尾北出土瓦K-Ca分布図

最後に、Na因子の比較をFig. 11に示しておく。鴻臚館、大宰府政庁所用瓦にはNa量が多いのに対し、墓ノ尾窯、墓ノ尾窯北、浜口廃寺出土瓦は少ないことが明白に示されている。鴻臚館の瓦はNa因子でも大宰府政庁の瓦と同じであり、また、牛頸窯群の須恵器とも対応する。したがって、鴻臚館や大宰府政庁の瓦とは同じ胎土であることは明らかである。

以上の結果、鴻臚館の瓦は大宰府政庁と同じく、牛頸窯群の中の瓦窯から供給された可能性が高い。さらに、墓ノ尾窯跡を含む他の窯跡などから供給された可能性は極めて低い。

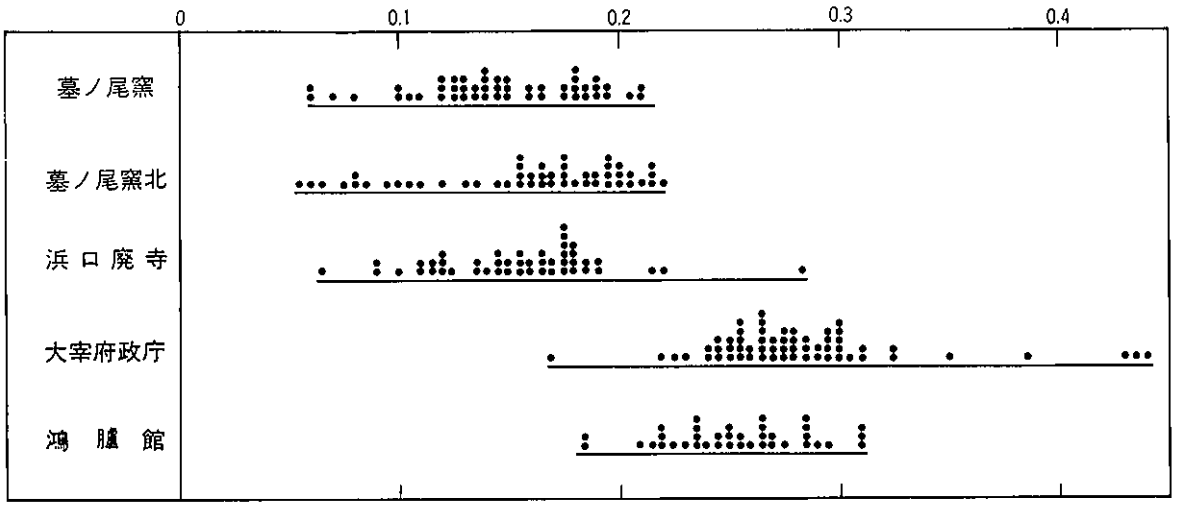


Fig. 11 各遺跡出土瓦のNa量比較

資料No.	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	軒平瓦	0.455	0.276	1.97	0.503	0.709	0.310
2	〃	0.450	0.257	2.18	0.380	0.483	0.265
3	〃	0.425	0.388	1.86	0.434	0.661	0.288
4	〃	0.439	0.296	2.55	0.489	0.743	0.296
5	〃	0.443	0.286	1.77	0.566	0.758	0.310
6	〃	0.464	0.242	1.88	0.533	0.643	0.232
7	〃	0.460	0.392	1.92	0.508	1.01	0.277
8	〃	0.447	0.215	1.98	0.535	0.516	0.237
9	〃	0.431	0.261	2.05	0.489	0.742	0.260
10	〃	0.508	0.222	1.46	0.579	0.695	0.271
11	〃	0.480	0.241	1.58	0.567	0.685	0.264
12	〃	0.458	0.235	1.86	0.510	0.629	0.225
13	〃	0.431	0.270	2.43	0.534	0.676	0.211
14	〃	0.438	0.243	2.01	0.500	0.638	0.249
15	〃	0.421	0.321	2.20	0.473	0.982	0.247
16	〃	0.498	0.293	1.52	0.567	0.773	0.218
17	〃	0.447	0.282	1.74	0.513	0.799	0.243
18	〃	0.508	0.173	1.76	0.599	0.535	0.233
19	〃	0.438	0.267	1.87	0.557	0.646	0.258
20	〃	0.500	0.247	1.66	0.603	0.679	0.270
21	〃	0.465	0.463	1.89	0.533	1.50	0.309
22	軒丸瓦	0.462	0.239	2.14	0.589	0.604	0.220
23	〃	0.480	0.276	2.17	0.508	0.669	0.242
24	〃	0.473	0.327	1.80	0.556	0.767	0.285
25	〃	0.485	0.278	2.51	0.517	0.652	0.249
26	〃	0.479	0.269	2.03	0.558	0.649	0.236
27	〃	0.454	0.293	1.66	0.484	0.677	0.284
28	〃	0.482	0.292	2.77	0.517	0.683	0.255
29	〃	0.492	0.204	1.90	0.558	0.587	0.265
30	〃	0.461	0.277	1.56	0.543	0.681	0.267
31	〃	0.453	0.251	1.68	0.517	0.665	0.285
32	〃	0.466	0.269	1.42	0.433	0.648	0.292
33	〃	0.446	0.290	3.25	0.418	0.541	0.188
34	〃	0.476	0.251	2.31	0.563	0.602	0.187
35	〃	0.471	0.233	1.86	0.526	0.695	0.251
36	〃	0.479	0.249	2.43	0.526	0.611	0.211
37	〃	0.476	0.322	1.98	0.502	0.740	0.234
38	〃	0.475	0.303	1.83	0.537	0.696	0.222

Tab. 1 鴻臚館跡出土瓦分析表

鴻臚館式軒丸瓦について

福岡市教育委員会　　瀧本正志

1）はじめに

鴻臚館跡の調査については、1987年(昭和62年)に平和台野球場改修工事に伴う緊急調査が実施され、以降はFig.1に示すように、野球場南側一帯において発掘調査が継続して行われてきた。当該地域における確認調査も平成4年度の第9次調査において一応の区切りとなり、今後に予定される報告書の刊行や野球場下での調査に備え、これまでに出土した遺物について整理作業を進めている。しかし、膨大な遺物出土量のために整理作業は長期間を必要とし、報告書の刊行も将来になることが予想されることから、年度概要報告書に遺物整理の概要を掲載することにした。

これまで福岡、佐賀を中心として広く出土している鴻臚館式軒瓦は、大宰府の管理下において各地へ製品の分与もしくは笵型の貸与という形の表れであり、同じ笵型から製作されたと認識されてきた。ところが、鴻臚館跡出土瓦の整理作業を進めていく中で、いわゆる鴻臚館式軒丸瓦と呼ばれる標識瓦において瓦当の細部が微妙な異なりを見せ、焼成時の差異、使用頻度による磨滅差、笵の彫り直しや文様の彫り加えでは説明不可能で、笵型が異なることによって理解されるに至った。このため、他遺跡における事例の検証例として、本稿では鴻臚館式軒丸瓦の複数笵型の存在について考察するものである。

2）鴻臚館式軒丸瓦

これまで、鴻臚館跡出土瓦を標識とする鴻臚館式軒丸瓦については、小田富士雄、高橋章の両氏による研究・解明がなされ、本稿においても両氏や先輩諸氏の業績を基に行っている。

ここで示す鴻臚館式軒丸瓦とは、大宰府政庁跡、鴻臚館跡から大量に出土し、初期の瓦葺き主要建物の屋根に用いられたとされる軒丸瓦を指す。瓦当は弁区より一段高い中房に1＋4＋8の蓮子を配し、複弁八弁の反りは強い。外区には珠文24個を配し、外縁は素文で斜面を呈する。瓦当径は基本的に16.5cm前後を測る。すなわち、小田氏の鴻臚館1式[注(1)]、高橋氏のⅠ-4a類[注(2)]に該当する。本稿では鴻臚館Ⅰ類と呼ぶ。この型式には瓦当径が大型で珠文が21個の外は鴻臚館Ⅰ類と同じ文様構成の大宰府第60次調査出土資料（高橋分類のⅠ-3類[注(3)]）が含まれると認識している。しかし、本稿で問題とするのは、これまで同じ笵型による製作と考えられてきた瓦当が複数の笵型によって製作されている点であることから、直接に関連しないことから対象としない。

3）軒丸瓦の分類

軒丸瓦は、瓦当面の形状・数値などの差異から、1-A類～1-D類に分類される。形状における大きな差異は外縁と珠文にある。数値における大きな差異は、直径・中房径・外縁幅などの単に同じ計測部位との比較だけではなく、各部位が瓦当直径に占める割合の比較差にも求められる。

瓦当の計測では笵型の彫込み縁が側面に残る資料を用い、計測部位および計測値はtab.1、Fig.9に示すとおりである。

Ⅰ－A類（Fig.1・2・10）

この型式の特徴は、花弁の立ち上りが急で、外縁が直線的な斜面を呈する。外縁端は丸味は有るものの、外縁幅が狭いために断面形が鋭角的に尖る印象を与える。珠文は大きく、半球形をやや押し潰したような形状である。瓦当径は16㎝と最小である。側面はヘラケズリ調整を施し、裏面はナデ調整。

丸瓦は粘土板巻付けによる成形。凸面はナデ調整を施し叩き目を残さない。凹面には布目圧痕と糸切り痕が残る。側縁はヘラケズリ調整。瓦当との接合部の広端面には深さ５㎜前後の切り込みを入れ、弁区周縁に接合位置が有る。胎土には砂粒等が含まれない。黒色の瓦が多くを占めるが、灰白色～茶灰色の例も有る。この瓦は最も多く120点が出土し、この型式での占有率は63％である。SK69・75・213、SB32から出土している。

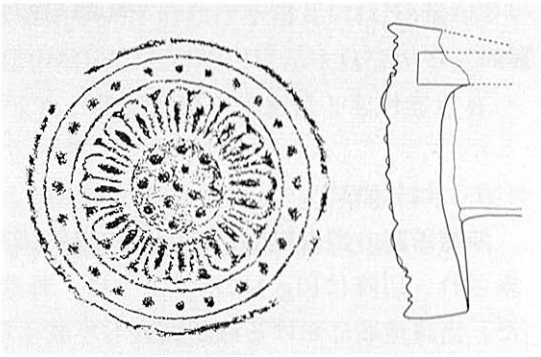


Fig.1 鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ－A類実測図（1/4）

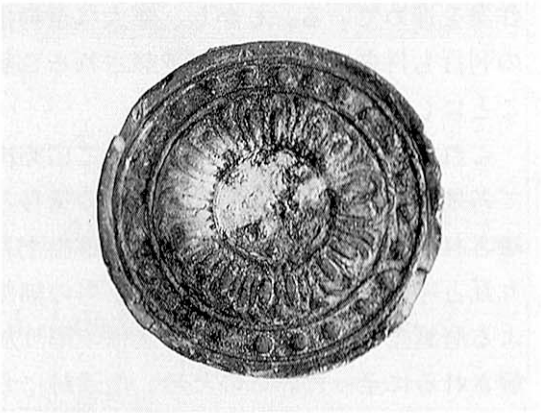


Fig.2 鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ－A類

Ⅰ－B類（Fig.3・4・10）

この型式の特徴は、珠文と外縁との形状にある。珠文は釣鐘的形状を呈する。他と比較して高さが同じであるのに対して径が小さいことや内縁幅に占める割合が小さいことから、珠文の大きさが数値差以上に小型に見える。外縁は直線的に直に立ち上がり、高く、厚みが有る。外縁端部は、断面形がコの字状を呈して面を持つ。1-Aより直径、中房、外区は大きいが、弁区だが小さい。側面はヘラケズリ調整を施し、裏面はナデ調整。

丸瓦は粘土板巻付けによる成形。凸面には叩き目を残さない。凹面には布目圧痕と糸切り痕が残る。側縁はヘラケズリ調整を施し、内側を面取りしている。瓦当との接合位置は弁区周縁に有る。広端面に深さ５㎜前後の切れ込みを持つ瓦もあるが、共通していない。胎土には砂粒を多く含む例も有る。黒色～白色の瓦が多くを占める。51点が出土し、この型式での占有率は26％である。SK57・70・75・160から出土している。

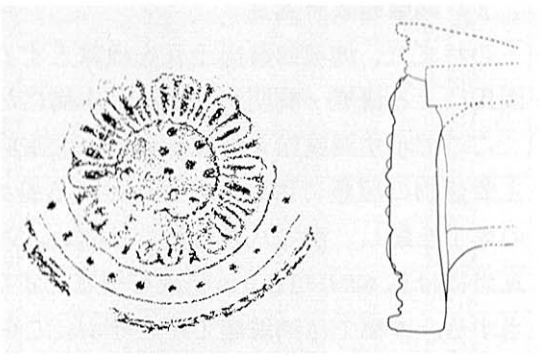


Fig.3 鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ－B類実測図（1/4）

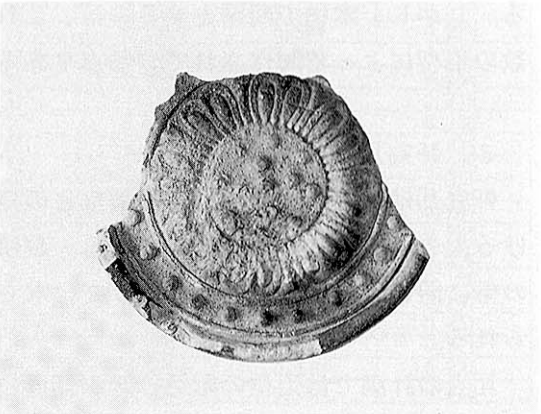


Fig.4 鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ－B類

Ⅰ－C類（Fig.5･6･10）

この型式の特徴は、蓮弁と外縁の形状と瓦当面に占める中房の割合にある。蓮弁は緩やかに立ち上がる。外縁は、幅1.3㎝を測り、緩やか斜面を呈する。外縁端部は丸みを持つ。珠文が内縁の中心に位置しないものが多い。さらに、Ⅰ-A･Dの形式の珠文が比較的等間隔に配置されているのに対して、この瓦では間隔に差があるところがある。胎土は、他型式に比べて砂粒を多く含む。丸瓦との接合は弁区周縁に位置する。

丸瓦の成形技法は不明。凹面に布目圧痕が残る。側面はヘラケズリ調整を施す。胎土には砂粒を多く含む例も有る。色調は黒色～灰白色～茶灰色～赤褐色と一定していない。硬質である。15点が出土し、占有率は８％である。

SK160から出土している。

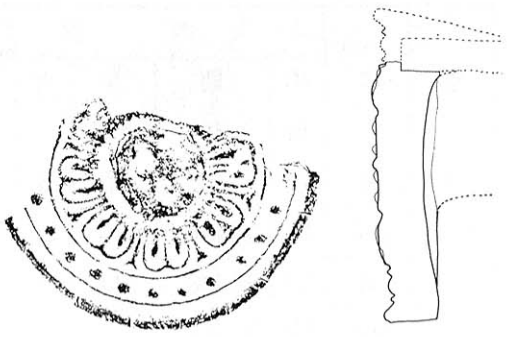


Fig.5 鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ－C類実測図（1/4）

Fig.6 鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ－C類

Ⅰ－D類（Fig.7･8･10）

この型式の特徴は、瓦当径と外縁の形状にある。瓦当径は17.6㎝を測り、他の型式より一回り大きい。外縁はⅠ-Cよりさらに緩やか弧を描きながら立ち上がり、「Ｓ」字状の断面形である。このために外縁端部は丸い。 最大の瓦当径に伴って各部位も最大値を呈する中で、内縁幅と中房径だけがⅠ-Cもしくは他と同じ数値であるため、中房や内縁幅が数値以上に小さく感じられる。さらに、外縁幅がⅠ-Aの1.5倍もあることから、際立って外縁が大きく感じられる。側面はヘラケズリ調整を施し、裏面はナデ調整。側面２か所に笵型とは別の木型の合せ目痕跡が残る。丸瓦との接合は弁区周縁に位置する。

丸瓦の成形技法は不明。瓦当との接合は弁区周縁に位置する。胎土には砂粒を多く含む例も有る。黒灰色～灰白色を呈し、硬質である。５点が出土し、占有率は３％である。

SK70から出土している。

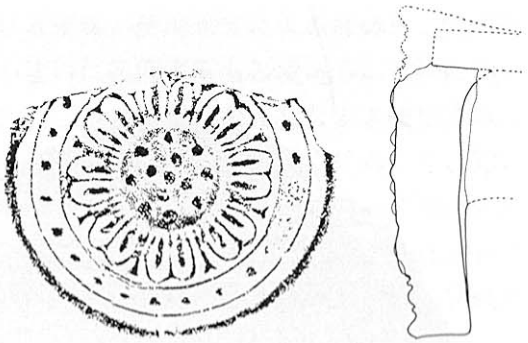


Fig.7 鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ－D類実測図（1/4）

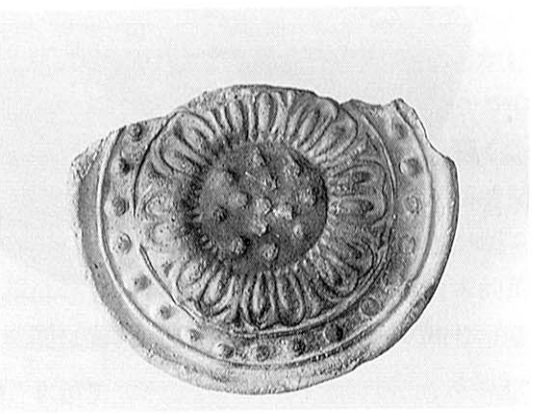


Fig.8 鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ－D類

形式	直径	内区					外区						出土点数	割合
		中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	外区広	内縁		外縁				
								幅	紋様	幅	高	文様		
I-A	160	53	1+4+8	112	27	F8	24	14	S24	10	6	素文	120	63%
I-B	165	56	1+4+8	111	24	F8	27	15	S24	12	8	素文	51	26%
I-C	167	53	1+4+8	113	27	F8	27	14	S24	13	6	素文	15	8%
I-D	176	56	1+4+8	118	28	F8	29	14	S24	15	6	素文	5	3%

tab.1　軒丸瓦瓦当計測表

形式	第3次 (8747)	第4次 (8829)	第5次 (8910)	第6次 (9005)	第7次 (9130)	第9次 (9236)	合計	割合
I-A	12	33	22	36	15	2	120	63%
I-B	3	16	12	14	4	2	51	26%
I-C	0	2	1	8	2	2	15	8%
I-D	0	0	3	2	0	0	5	3%
合計	25	51	38	60	21	6	191	100%

tab.2　調査次数別出土点数一覧　　※( )内数字は調査番号

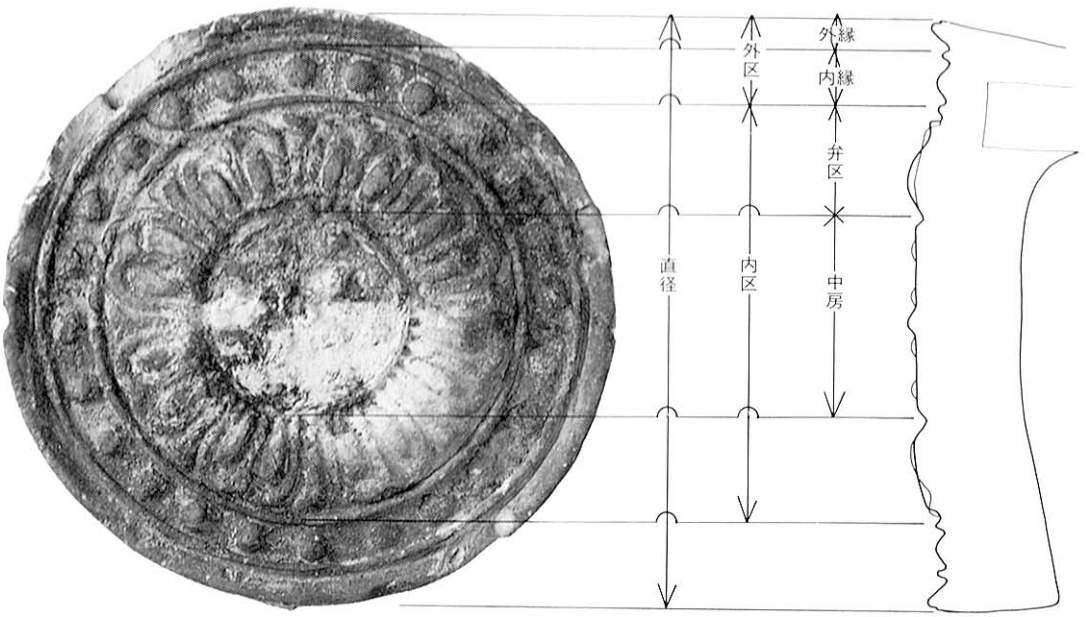


Fig.9　軒丸瓦計測部位図

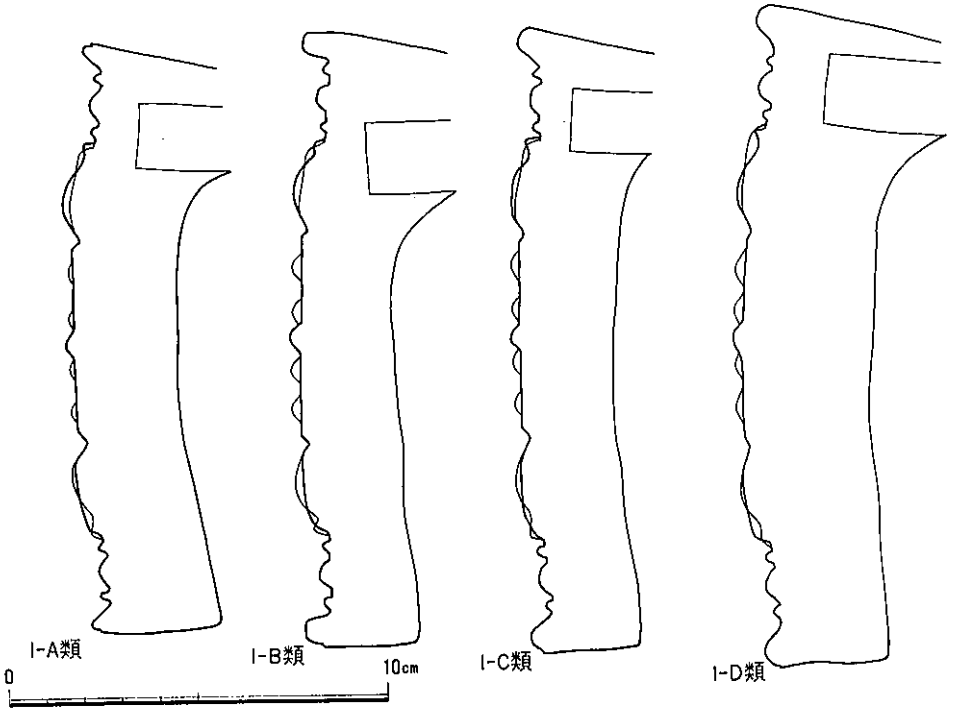


Fig.10　鴻臚館式軒丸瓦Ⅰ-Ａ～Ｄ類実測図（1/2）

3）小　結

鴻臚館跡出土瓦を標識とする、いわゆる鴻臚館式と称される軒丸瓦（小田分類；１式、高橋分類；I-4a類、本稿；Ⅰ類）が、各形式の特徴や計測値などから、同じ笵型による製作ではないことが明らかとなった。鴻臚館跡調査で出土した資料に限れば、I-A～D類の４型式に分類できる。各型式の違いは、製作時（焼成時）に生じる差異、使用頻度による磨滅差、笵の彫り直しや文様の彫り加えによるものではなく、笵型の違いに起因するものである。このため、鴻臚館式軒丸瓦については、これまで狭義的と広義的の二つの解釈が混在したまま使用されてきた感がするので、整理する必要があろう。すなわち、瓦当の型式分類を行うにあたり、同笵のものを同一型式として型式番号を付与する大原則と上原真人氏の指摘される瓦当文様、焼成、胎土、製作技術などの諸要素の連鎖性[註(4)]を踏まえた設定の必要性から考えると、広義的とは瓦当文様、焼成、胎土、製作技術などの諸要素の共通する群的なまとまりであるのに対し、狭義的とは同じ笵型から製作されていることを第一条件とするものである。したがって、広義的にはこれまでの型式（I-A～D類）が該当し、狭義的にはI-A類としたい。

同様に、浜口廃寺の鴻臚館式軒丸瓦の供給地である岡垣町墓の尾窯出土資料[註(5)]も、鴻臚館I-A～D類と文様構成や規模は変わらないものの、中房や外縁に特徴的差異が認められ、明かに鴻臚館I-A～D類とは笵型を異にする。したがって、鴻臚館式軒丸瓦はこれまで同じひとつの笵型からによるものと理解されてきたが、鴻臚館や墓の尾窯だけが例外である必要性は無く、他の遺跡においても異なる笵型使用の可能性が考えられる。このため、過去に出土した鴻臚館式と呼ばれている軒丸瓦を再検討する必要がある。その結果、新たに異なる笵型の存在が明らかになっても、大宰府の管理下における各地への製品分与もしくは笵型の貸与という基本的形態に変わりは無く、大宰府との関係や、各寺院や地域間における個々の関係を細かく知りうる手がかりになるものと考えられる。

次に、鴻臚館におけるI-A～D類の４型式の軒丸瓦について触れてみたい。

1．鴻臚館礎石建物創建期の所用瓦について

いわゆる鴻臚館式軒丸瓦は、大宰府政庁Ⅱ期の建物所用瓦として、8世紀第1四半世紀を生産時期として推定されている。小田分類の1式、高橋分類のⅠ-4a類がこれに該当する。しかし、鴻臚館資料においては、I-A～D類の4型式が存在する。出土数量から見ると、I-A類だけで4型式全体量の63%を占めることから、鴻臚館の最初の瓦葺の建物を中心的に飾っていたのはI-A類と推定される。太宰府政庁所用瓦との同笵関係は、その必要使用量からも詳細に検討する必要があり、別笵の可能性も考えられる。

2．使用開始時期について

鴻臚館式軒丸瓦は、大宰府政庁Ⅱ期の建物所用瓦として、8世紀第1四半世紀を使用時期として推定されている。鴻臚館において8世紀の遺構としては、土壙内から木簡が出土した便所遺構のSK57・69・70がある。便所の廃絶時期の問題があるが、この遺構からI-A・B・D類が出土していることなどから、4型式における大きな時間差は無く、8世紀第1四半世紀においてI-A・B類が施設別もしくは混在して使用されたと思われる。I-C・D類は同時期もしくはやや遅れて使用されたものと考える。

3．笵型について

鴻臚館出土のいわゆる鴻臚館式軒丸瓦は、Ⅰ-A～D類の4型式が認められ、異る笵型から製作されたと考えられる。しかし、基本的文様構成や珠文の間隔が広くなる位置を同じくするなどの共通点から、明らかに同じ笵型製作集団によって作られたもので、親型的なデザインの存在を示唆するものと考えられる。

4．軒平瓦について

各軒丸瓦に組合う軒平瓦の問題がある。現在整理中の時点では、これまで鴻臚館式軒平瓦と呼ばれる瓦（小田分類；1式[註(6)]、高橋分類；I-1類[註(7)]）は、中心飾りや唐草の形状の異なりを大きな特徴として、少なくとも2型式以上存在する。I-A～D類およびⅠ類に含まれる軒丸瓦個々に組み合うものが存在するのか、礎石建物において中心的に使用されたと考えられるI-A・B類に限定されて組合う軒平瓦が存在するのかは、今後の大きな検討課題でもある。

本稿は、鴻臚館跡調査で出土した瓦塼類の整理作業途中における中間報告である。小稿を作成するあたっては福岡県教育委員会の石松好雄氏、栗原和彦氏、高橋章氏、岡垣町教育委員会の中川潤次氏の御教示を得た。さらに、福岡市教育委員会の力武卓治氏、田中壽夫氏、宮園登美枝氏、寺村チカコ氏、山口玲子氏、堀一恵氏、金石邦子氏、真鍋晶子氏の協力を得た。記して感謝するしだいである。

註(1) 小田富士雄「大宰府系古瓦の展開(二)」『九州考古学』 第2号 1957
(2) 高橋章「鴻臚館系瓦の様相」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館 1983
(3) 前掲註(2)に同じ
(4) 上原真人「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』 第3号 1984
(5) 岡垣町教育委員会の中川潤次氏のご好意で、瓦の実物対照をする機会をいただいた。
(6) 小田富士雄「大宰府系古瓦の展開(一)」『九州考古学』 第1号 1957
(7) 前掲註(2)に同じ

輪宝・銅壷の出土について

第一経済大学　三　野　　章

昭和36年（1961）、福岡城址の一部より出土した輪宝と銅壷に関して、その概要を以下記しておく。但し、残念なことに、平面図その他当時の記録の所在が明らかでないとのことで、以下記す概要も、当時のメモや記憶、ならびに福岡市教育委員会施設部保管の福岡市舞鶴中学校、同博多工業高等学校の校舎配置図などをもとにまとめたものであり、出土地点等については、その正確度は期し難いものであることあらかじめお断りしておく。

1．輪宝・銅壷出土の経偉

出土地点は、現福岡市舞鶴中学校の校地の北側フェンス付近に当たるが、舞鶴中学校がこの地に移転したのは昭和35年８月25日（その以前は福岡市立博多工業高等学校がこの位置にあり、同年その直前に現在の野間に移転している）即ち、出土の前年の事で、北側に隣接する国税局福岡支局、北九州財務局との関係で、国有地借用に関する諸事務が進められていた時期であったとのこと。

翌、昭和36年（1961）４月の時点では、移転間もない舞鶴中学校の校舎整備のための増設工事、並びに、隣接する国関係諸施設との境界に関連する一連の作業が進められていたもののようである。

さて、上記工事の一部と考えられる溝の掘削中に、青銅製の“輪宝”と“銅壷”の２点が出土し、工事現場の責任者より福岡県の方に届けられたものと聞いている。なお、その出土時の状況については、「掘削機に引っかかって出土した」という程度の簡単な説明であったと記憶している。事実、輪宝には明らかに掘削機によるものと考えられる損傷がごく僅少であるが認められた。

また、出土地点にあたる掘削溝の一部、メモによると地表より約１ｍのところに、列石の遺構が認められ、この列石と“輪宝”“銅壷”との関係についても明らかにすべきであるとして、実測を中心とした一応の調査を行うよう、４月２日、県よりの依頼を受けたものである。

2．調査について

出土地点一帯が工事中であったこと、また調査可能な日数も限られた状態であり、全くの緊急調査として、昭和36年（1961）４月２日より同４日までの実質僅か２日間半、出土地点付近の平板による実測と、掘削溝の断面図の実測を実施、また、“輪宝”“銅壷”の出土時の状況について工事関係者からの聞き取り程度の調査を実施したにすぎない。

(1) 出土地点

出土地点付近の現状は当時とは全く変貌し、既に国税局福岡支局も北九州財務局もなく、一帯は公園化されてしまっている。ただ幸いなことに舞鶴中学校の舎屋は、その後増築はされたものの、基本的な配置はほぼ当時と同じであり、かつ、前記福岡市教育委員会施設部の記録の中から、それぞれの増築の年次についても把握することができたので、それらをもとにおおよ

その出土地点を確認することはできた。

当時のメモに基づいて判断すると、工事のための掘削溝は幅約80～85㎝、深さは地表から約100㎝で、Fig.2に示すように舞鶴中学校の北側約10ｍの位置に、ほぼ校舎と並行して掘られていた。出土地点はこの掘削溝の中、側壁に比較的近いところであり、その位置は、図中の×印付近思われる。工事担当者の説明では、「深さは掘削溝のほぼ中間部付近で（即ち、地表より約50㎝くらいのところになると考えられるが)、輪宝と銅壺が並んで立った状態で埋まっていたようである」とのことであった。

(2) 出土の状況

前述のように、地表より約50㎝のところに輪宝と銅壺は並んだ状態で埋まっており、そのすぐ上部には径約10㎝程度のカワラケが数枚あったとのことで、当時、ひびは入っていたように記憶しているがほぼ完形に近いものが何枚かと、その破片と思われるものが付近にまとめて置かれていたのを確認したし、また、包含されていた層位は勿論わからないが、おそらく近世のものと考えられる瓦片がいくつか掘削溝の掘り土の中にあったことを記憶している。

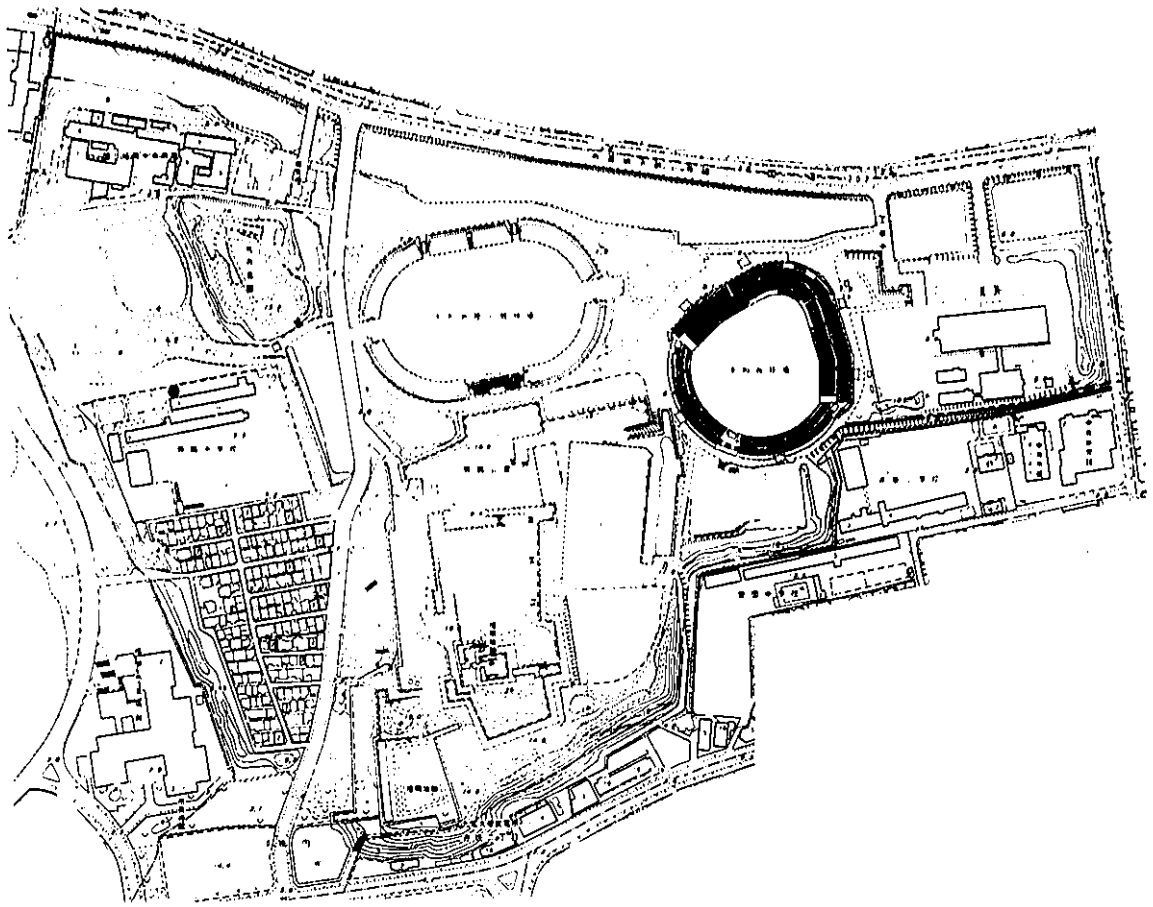


Fig.1　輪宝・銅壺出土地点図（1／4,000）

なお、その位置より約50㎝下、即ち掘削溝の底部付近に、列石の遺構が確認された。この列石は、内幅が約50㎝程度で、掘削溝とはわずかな角度でのずれはあったと思うが、ほぼ溝と並行した状態で東西に延びていた。しかし、工事との関係で、掘削溝の中に現われたせいぜい10m程度の列石を確認し得たにすぎなかったように思う。

(3) 輪宝、銅壷について

両出土品とも、調査関係の事務所らしい所で見たのが初めてであり、出土時の状態は明確ではないが、「銅壷の中には砂が入っており、砂の中に水晶があった」との工事関係者の話を聞いたことが記憶にのこっている。但し、この水晶そのものについては確認はしていない。また、輪宝の方には、掘削時についたと考えられる傷があったことは既に述べた通りである。

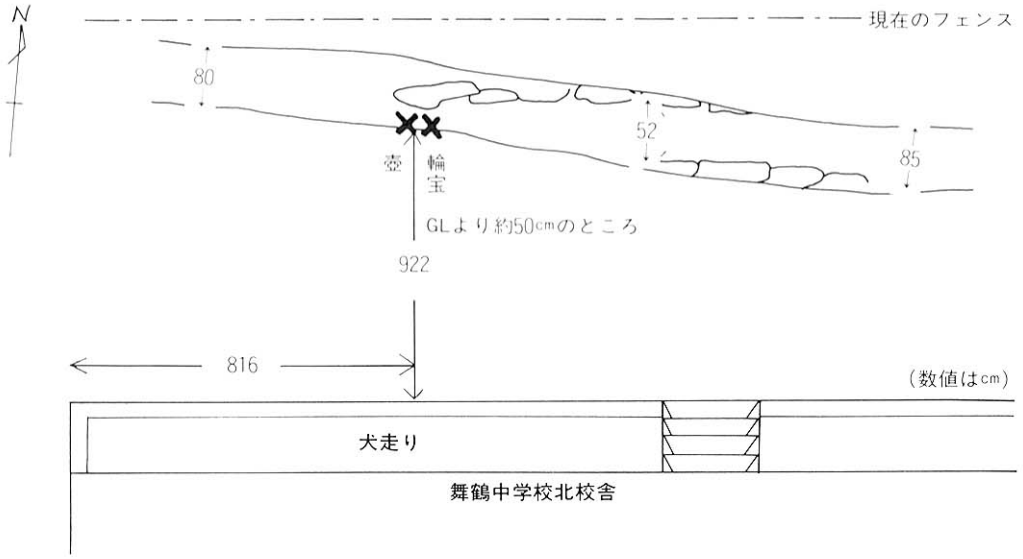


Fig.2　輪宝・銅壺出土状況図

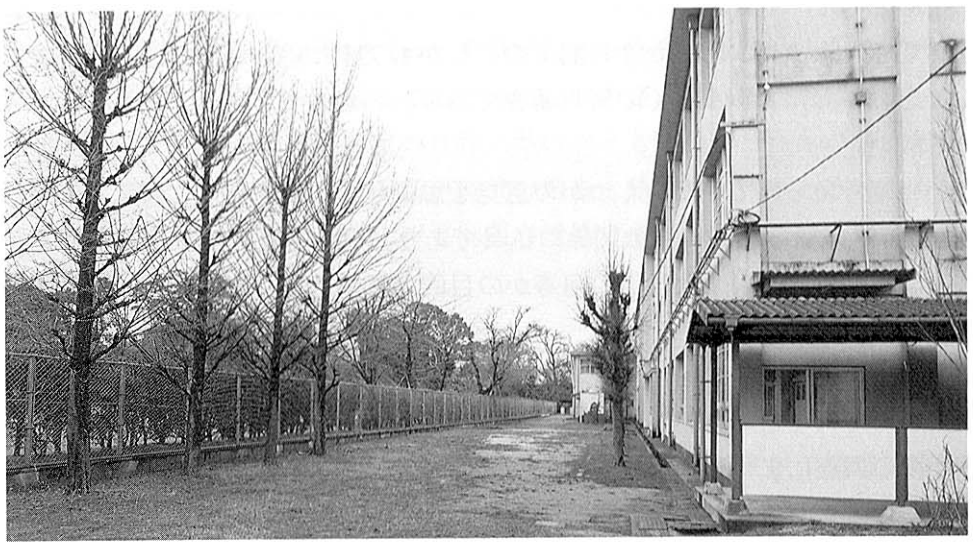


Fig.3　輪宝・銅壺出土地点現況

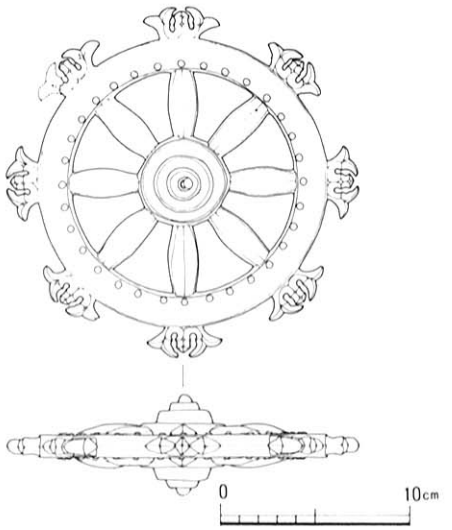


Fig.4　輪宝実測図(1／4)

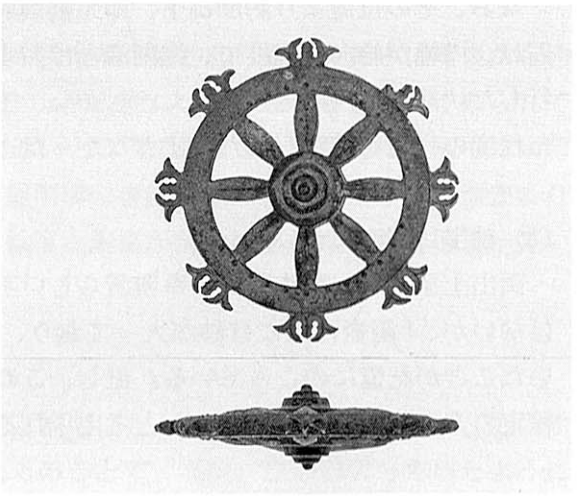


Fig.5　輪宝

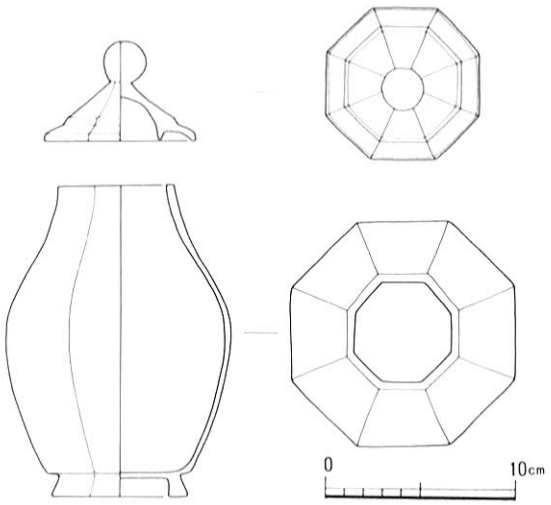


Fig.6　銅壺実測図(1／4)

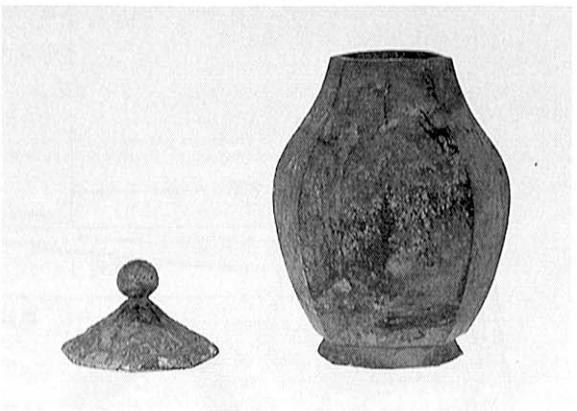


Fig.7　銅壺

3．まとめとして

以上述べてきたように、わずか２日間半の、しかも工事に追われながら、平板を取るのにそのほとんどを費やしたような全くの緊急調査であり、当然のことだが、これといったまとめは出るべくもない。

最後に、当時考えられていたいくつかの意見を思い起こしてまとめに替えることにする。

○“輪宝”“銅壷”ともに密教関係の仏具であり、城内神社に近いことからも黒田藩政時代に祭器としてか、または他の何等かの目的で意図的に埋葬されていたものではないだろうか。

○銅壷は舎利壷であった可能性も考えられる。

○列石が何時代のもので、かつ、何の遺構か、また、出土品と列石の関連は、等については今後の調査にまつべきで、現状では何とも判断しかねる。

○いずれにしても、後日再調査の必要があると考えられる。

（ 1993年12月記 ）

福岡城跡発見の地鎮・鎮壇資料

奈良大学　水野正好

1）発見の地鎮・鎮壇資料

昭和35年8月、福岡城跡の一画に舞鶴中学校が新築移転、その整備工事中、昭和36年4月校地北側フェンス付近で溝を掘穿、以下のべる地鎮・鎮壇資料が発見された。重機による掘穿中の発見で遺構の詳細は不明であるが、三野章氏の報文によれば、「掘穿溝は幅約80～85cm、深さは地表から約100cm。地表より約50cmの深さで輪宝と銅壺が並んで立った状態で埋まっていた。そのすぐ上部には径10cm程度のカワラケが数枚あり、50cm下の二列の列石遺構（溝）と重複していた」と記し、挿図では壺が西、輪宝が東に接して置かれていた状況が示されている。

発見された輪宝は、径18.7cm、轂径5cm、重量1778gを測る大きな規距の輪宝である。輪の先に八鋒三鈷を備えている。三鈷は心鈷が左右二鈷より短く、左右の二鈷は萼が極めて大きく、あたかも全体が花形に近い。本来の武器たる三鈷の機能からは大きく離れた形態を示している。轂は表裏とも三段につくり、芯は棒冠状に突出している。一般の輪宝の場合は中房（時に蓮子を配する）の周囲に花弁をそえて轂をつくるが、本例は単純に三段を重ね棒冠を突出させるのみという独特な形態を示している。外輪＝輞部は一般の輪宝が二圏線に花弁帯をそえたり、三圏線帯で飾るのに対し本輪宝は圏線帯を無文とし内縁にそい32珠文を輻と絡めて巧みに配置する独特な在り方を示しているが、圏帯・花弁帯を省略し、珠文帯に換える現象は注目すべき点であろう。同様な事実は輻についてもあてはまる。薄く平たい輻は中央に稜をもつ中膨み無飾の輻であるが、本来の輻は鈷形をとるのが通例だけに、本例のように鈷形を感じさせないまでに変化している事例は珍しいと言わねばならない。輪宝全体、轂厚(棒冠除く)4.6cm、輞厚1.2cm、輻厚2.2cmと非常に厚く鋭利さを欠く点が特別に注意される。以上のような本輪宝のもつ特色を勘案するならば、輪宝としては極めて退嬰的、後出的であり、元来の武器としての機能から逸脱した表現を随所にとどめる輪宝と見做すべきであろう。江戸時代の輪宝の特色を具えたものとみてよい。

一方の銅壺は、丸鈕二段八稜の蓋を伴い、壺躰も八稜八面、圏台脚をとりつけた銅壺である。蓋は高5.4cm・重量331g、壺躰は高16.7cm・重量1622gを測る。壺躰は飾られず、蓋が僅かに二段、丸鈕という点に装飾性がみられるのみである。蓋、壺とも八稜八面につくられることは本壺の特色であるが、八方八天や、輪宝の八鋒八鈷の制とも関わり合うものかと考えられて興味を惹く。全体に部厚く鋭利さを欠くが江戸時代の銅壺と見做すべきであろう。内部納入品については全く不明である。輪宝、銅壺は一見同質の遺品であり、同時に発注、鋳造された感があることも重要な視点といえよう。

2）本地鎮・鎮壇資料の性格

修法上、通常、用いられる輪宝は径10～15cm前後であるのに対し、本例は径18.7cmと大きく、厚さ、重さ共に通常の輪宝と異なり厚く重い。こうした特色ある輪宝が一般的な密教修法に用いられる輪宝と異なる用途をもつであろうことは容易に推測されるところである。この輪宝の用途を考える上で重要な意味をもつのは『覚禅抄』である。同書の地鎮・鎮壇の項には、たと

えば「鎮壇支度事」として五色糸、蘇密、五宝、五香、五香、五薬、五穀、金銅賢瓶一口、金銅橛八本と支度の品々を注記したあと「金銅八輻輪八枚　各毎輪頂可作三股杵囡形中心有穴」と述べている。同書の同項には、この他「彼輪八方三鈷」、「輪様‥‥各毎輪頂可作付三貼杵、又毎輪中有穴　橛指入料也」といった記事も見られる。八輻輪頂ごとに三貼杵を取りつけた輪宝という記述はまさに、福岡城発見の本輪宝の形を適切に表現する言葉といえよう。『覚禅抄』はこうした八鋒三鈷杵輪宝が鎮壇の際に用いられる法具であることを雄弁に語り上げているのである。ただ、一般の鎮壇の法具としての八鋒三鈷杵輪宝は、さきの『覚禅抄』にも記されているように、轂の中心に橛を挿す穴が穿たれているが、本例にはこの穴がなく逆に棒冠が表裏につくられている。輪・橛は鎮壇には密接不離、セットとして用いられるのが普通だけに一見異様に見える。しかし『覚禅抄』には「千心御抄」に曰くとして「八方敷輪　有穴、輪穴立橛　或輪上覆、輪十枚　二枚無穴尻口料也」といった記事があり、この場合、輪橛セットとなる八枚の穴ある輪とは別に穴のない二枚の輪宝が壺の尻口料として支度されていることが判る。一般の鎮壇支度が八個の輪・橛を用いているのに対し、本例は一輪の支度という在り方がこうした無穴輪宝（轂心棒冠輪宝）を生み出していると考えてよいであろう。銅壺は一般の地鎮・鎮壇遺構や儀軌書では賢瓶形銅壺が用いられ、図示されている。本例のような八稜八面銅壺を用いる例は乏しいが機能は共通すると見てよいであろう。先述の『覚禅抄』の記事では、「賢瓶　可有蓋高五寸」に五宝、五香、五薬、五穀（廿種香薬等）を五袋づつに分け各一袋に各銘を書付け四袋と合せ紙で包み納めると詳細に記述されている。その後、蓋をし、五色糸で十文字に賢瓶を結び、埋めるが、五色糸の一端は地に五指程の長さ出し、置石する次第が述べられている。本例の場合も同様であったと考えてよい。数枚の皿もまた五穀粥などを容れ地神地主に供する際の法具であり、総じて本例は地鎮・鎮壇の遺構と考えてよい内容をもっている。賢瓶と八輪橛で構成されるケースの多い地鎮・鎮壇が本例のように一壺一輪で実修される事例としては『覚禅抄』に「鎮壇支度」として「閼伽一前、鉄橛四本、銅輪一枚、銅壺一口・・・」などと記すケースがある。鎮穴四隅の鉄橛四本とは別に銅輪、銅壺各一をセットとするという点は、彼此まさに共通しており、鎮壇の一としてこうした在り方が息づくことを物語るものである。橛の用法には、敷輪して橛を挿す場合と立橛して輪を挿す場合があるが、棒冠をもつ本例は後者の象徴的表現と言うことが出来るのかも知れない。

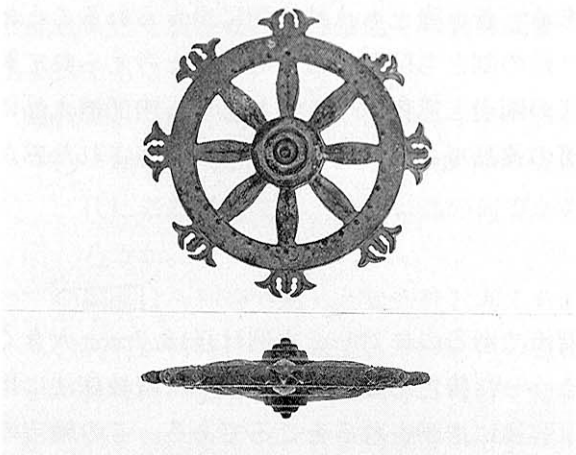


Fig.1　福岡城跡内出土輪宝

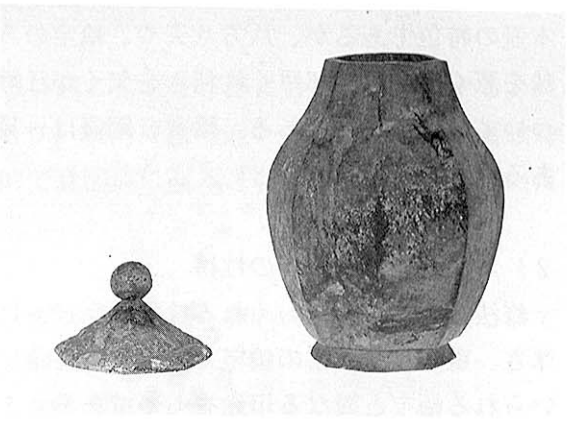


Fig.2　福岡城跡内出土銅壺

鴻臚館調査における多くの成果は、下記の方々の協力によって得られたものです。記して、深く感謝いたします。
家村冨基郎，石田和彦，石橋テルコ，上田　高，梅崎　元，江崎木綿，大石江里子，大橋善平，大庭貞子，大村芳雄，尾崎裕光，斧渕さおり，金石邦子，唐島栄子，木本ゆかり，栗田正治，斎藤善弘，佐藤圭介，佐藤　隆，佐藤　満，佐保明子，島津明男，品川初子，下窄幸生，高田甚一郎，寺村チカ子，仲野正徳，萩尾行雄，藤田圭三，藤吉芽里，船越恒人，古野さおり，堀　一恵，松原高博，真鍋晶子，宮園登美枝，吉川順岳，脇坂レイコ

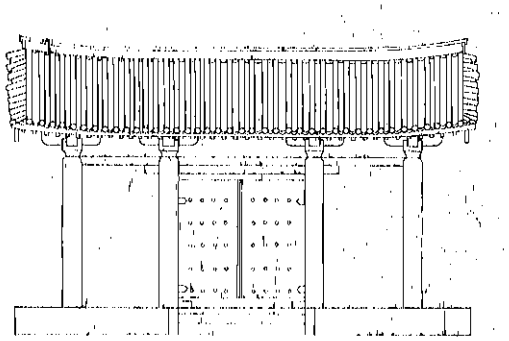
鴻臚館跡 4
福岡市埋蔵文化財調査報告書
＜第372集＞

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
平成6年3月31日

印　　刷　大成印刷株式会社
福岡市博多区東那珂三丁目6-62

KŌROKAN
4

Excavation and Studies of
Kōrokan Ruins
in Fukuoka



March 1994
THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN